
ワールド・クライシス！

結城葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールド・クライシス！

【Nコード】

N1240P

【作者名】

結城葵

【あらすじ】

少女は、平凡な日常を送っていた。彼女が思うに、たかがネコに家の鍵を持っていかなかったくらいでおかしくなるはずはなかったのだ。いくら『魔法』なんてものが、現実になっている世の中だとしても。当然、何故か異世界に行ったりする訳も無く、何故か意味不明な事件に巻き込まれるはずも無かったのだ。……本当は。少女の、成長するかもしれない物語が始まります。

「化け物と少年と狭間の奥と」

マンガみたいなことというのは、突然起こるらしい。

原因は何か、そう聞かれたら少女はネコに家の鍵を取られたからと答えるだろう。しかし、これはあくまでも遭遇した理由であって、起こっている理由ではない。彼女にはそれ以外に思いつかないからこう答えるだけだ。

「はあ……はあ……はあ……」

この、周りには家も何も無いような場所に経っている廃工場を走り回ってから、どのくらい時間が経っただろうか。何周したかはぼんやりと覚えている。大体三周くらいだ。中規模の工場を三周。いくら体力はあるといっても、足がふらつくほどだ。

「こ……これは夢……夢に違いないよお……！」

上記の通り、この廃工場の周りには家など無い。山の中ともなればもっと無い。だから、彼女の背後で鳴っているような轟音が響いても、警察などやってこないのだ。

体力も限界が近い。だというのに、彼女は叫ばずにはいられなかった。

「これが夢じゃなかったら、何だって言うの――」

少女、美薙月千秋^{みなつきちあき}は、マンガにしかないような化け物に追われていた。

さきほど見た化け物を思い出す（今振り向く勇氣は無い）。

狢犬のように恐ろしい顔に、ライオンのような鬚^{たてがみ}。そこから繋がって、背中まで続いている。ドラム缶二つ分ほどの四本足を持ち、人の腕ほどの爪。そして何故か尻尾が三本もある。どこのカメラさ

んだ、と千秋は問いただしたかった。

確かに、彼女の住む現代というやつは、こんな化け物がいてもおかしくはなさそうではある。しかし、あんなものがいれば普通はもつと話題になるはずなのだ。正直言って、さっさと逃げ切りたいところ。

しかし、廃工場から出ればいいじゃん。などというツツコミは受け付けない。この門は閉ざされていて、ネコを追いかけてわざわざよじ上って入ってきたのだ。出るのによじ上っていたらさっさと食われてしまう。

「こ……これって……何かの拷問……？」

さつきから近づいてくる足音が気になって仕様がな。緊張感と疲労感でさらに体力が奪われる。汗で濡れたワイシャツが濡れて気持ち悪い。これがズボンだった日には、足まで気持ち悪くて、どうでもいいところで精神力が狩りとられるところだ。初めてスカートで良かったと思った瞬間かもしれない。

と、どうやらかなり速度が落ちていたらしい。いつの間にか化け物の手が届くところまで追いつかれていた。ぐわっ、と振り上げられた巨大な足が、千秋を襲う。

「うにゃあっ!？」

咄嗟に走るのを中断し、前に転ぶように飛び込んだ。前転の要領で受け身を取ろうとするが失敗して結局すっ転んだ。膝の辺りがひりひりする。

ギリギリのところかわいたらしい、しかし全く去っていない危機に対して、身体ごと向ける。

後ずさりしながら見上げた化け物の姿は、目の前で見ている分かなり恐かった。いや、恐いを通り越して心臓でも止まりそうだった。太鼓どころじゃなく身体に響く音を立てながら、化け物は千秋に近づいてくる。

「……あ……い」

死ぬ。

その巨大な口が開けられて、千秋はそう思った。と、同時に、
——せ、せめて痛くありませんように……。

とまで思ってしまうほどに諦めがついてしまった。

3D眼鏡でもかけているかのように立体的に見えるその口が、
大きく開いたまま、千秋を食らおうと突っ込んできた。

「ひう……!!」

ぐっ、と思わず目を閉じる。

……がきいん

……。

十数秒くらい経っただろうか。痛くもなければ、寒くもならない。
もしかして本当に痛いと思う間もなく寒いと思う間もなく死ねたの
だろうか。だとするならば、あのキメラもどきの化け物に感謝した
い。でも願うなら死体は完全に消化してください。もしも幽霊にな
った時にむごいものを見たくありません、と千秋は切に願った。

……しかし、一向に天使のお迎えは来ない。まさか悪魔でも来る
のだろうか、と怯えながらゆっくりと目を開けてみた。

そこには同じ年くらいの少年と、自分を食ったはずの化け物が、
少年の持つ身の丈ほどの巨大な大剣に受け止められて止まっていた。

「……………えっ?」

しばらく千秋がポカンとしながらその状況を眺めていると、

「だあああああッ!!」

ズドン! とでも鳴りそうなほど勢い良く、化け物が少年に押し
返された。

「う……………えっと……………」

さっぱり状況が理解出来ない。パニック状態の頭が取り入れるの
は、少年の姿と、持っている剣だけだ。さっきから仰向けから何と
か脱しようとしている化け物にはさっぱり意識が向かない。

少年の外見を一言でいえば、日本人だ。真っ黒な、漆黒と言って

も良いほどの綺麗な黒髪。いわゆるイケメン、という奴ほどではないが、カッコいい部類には入るであろう顔つき。今の時代知っておかしくないところある学校の制服。第一印象はクールでカッコいい男の子、といったところだろうか。

対して、彼の持つっている巨大な大剣は――、

「トライデント……？」

『Magic Assistance Code Trident』略してMAC^{マクト}T、通称『トライデント』。現在の世界で存在している職の一つ、魔導戦士の持つ魔法補助デバイスだ。千秋の勉強した限り、種類は二つほどあったが、見分けるほどの能力は彼女には無い。

何故トライデントだと分かったかなどと聞かれても、常識的に考えたに過ぎない。今の時代、武器なんて大抵トライデントなのだ。

などと千秋が考えていると、少年はぶつぶつと千秋を見ながら言った。

「民間人が……。SGSに通ってる訳でもないみたいだな。守りながら戦うのは苦手なんだけどな……」

「？」

千秋にはよく聞こえなかったらしく、少し聞き耳を立ててみようと思った矢先だった。

ズドン！ と音を立てながら化け物が仰向けから脱した。

それを見ていた千秋は「ひあっ!？」と悲鳴を上げ、少年は目を細めながら見詰め、千秋を背に化け物の方に向かって行った。

「シルディック、ウォーター・スライド」

了解です。術式構築完了。発動時間は約一時間

「そんなにかかるわけないだろ」

一応の確認ですよ、一応の

「さすが。おせっかいな委員長キャラさんだ」

背中越しではあるが、なんとなく少年が笑ったような気がした。瞬間、少年は化け物に向かって走り出す。

先程までの、化け物と少年の距離は約一〇メートル。それを少年は一瞬でつめた。と同時に、その大剣が内から外に大きく振るわれた。ズバシユッ、という肉を斬り裂く音が聞こえた。

「ちっ……浅いな」

少年の言う通り、今の一太刀で傷ついたのは顔の一部だけだ。

フツと、少年の身体が消える。代わりに残されたのは、綺麗に輝く透明な光。それは地面に落ちると、ぴしゃつと音を立てた。水だ。よく見ると、その水は、まるで滝が上下逆にでもなったように上に向かって、水の流れが出来ていた。完全に重力に逆らって。その先端には、さっきの少年がサーファーのように乗っていた。

その上から飛び降りながら、大剣を振るった。乗っていた水をその刀身に纏わせ、さっきよりも完全に大きな大剣を。

化け物はそれを横に飛んで避ける。

「バカが！」

が、水を纏って巨大化した剣身は、地面に当たると思うと、剣身の半ば辺りからぱっくり折れて、真っすぐ化け物に向かっていった。ズドン！ という轟音が響く。

水の剣身は化け物の胴体に大きく穴をあけ、霧散した。

「ふう……。まだまだザコのうちだな」

まるで最初からそうであっただかのように、化け物が横に倒れる。それから数秒後、全身が綺麗な光の粒となって消え去った。さっきまでそこにあった巨体は、もう存在していない。

「さて、つと」

一仕事終えたー、という感じの少年は、面倒くさそうに千秋の方を見た。

「……は？」

そこには何やらスカートらしきものから綺麗な足が見え、その足はドタバタと暴れていた。

「んなつ!？」

『狭間』の出現を確認!

「んー! むぐもがががッ!?!？」

典型的な異次元への扉らしきものの中に、千秋の上半身は吸い込まれていた。訳が分からないのだろう。彼女は、何か泣き叫んで（こちらからでは何を言っているのか分からないが）どたばた暴れて抵抗しているのだが、それを見ている少年には、スカートの中が丸見えだ。

少年は思わず目をそらした。

「……………」

……何紅くなってるんです？

「あ、紅くなんてなってるない!! と、とにかく! ひ、引っ張り上げるぞ!？」

声、裏返ってますよ？

「う、うるさい!」などと言いつつ、少年は千秋の元に駆け寄った。……までは良いのだが、

「……どこを持てばいいんだ？」

彼女の足を持てばいいじゃないですか

「いや……あの……それはさすがにちょっと気が引けるんだけど……」

……

いつもクール気取ってるあなたらしくないですね。別にいいじゃないですか、男の子は好きなんでしょう? パンツ

「まるで全ての男が好きかのように! それは一種の偏見だぞ!？」

嫌いなんですか？

「……嫌いではない」

変態ですね

「くっそおおおおおおおおおーーーーー」

!..」

半ばやけになりながら、がしっ! と千秋の足を掴んだ。

「~~~~~~~~ッ!?!？」

瞬間、びくつ！ と反応したかと思うと、千秋の足は掴んだ犯人を思いきり蹴り上げる。

ズゴツ！ と、少年の胸の辺りにくい込んだ。

「むごおっ！！？」

防衛反応ですね

「う…… おおおおお…… 鳩尾…… 鳩尾入ったあ…… おお！？」

などうめいていると、何やら両手に違和感が走った。恐る恐る目を向けてみると、

「な、何故俺まで！？」

蹴られた拍子に離れた足はもう見えない。その代わりに、少年の手が異次元への扉に食われてしまっている。

「し、しまった！！」

『狭間』への突入を確認。逃げられませんか。自業自得です、変態さん

「ちよつと待て！ 足掴めって言ったのはおま——！」

少年の言葉は最後まで続かなかった。言い終えようとした時にはもう、全身その扉の中に吸い込まれていた。

「化け物と少年と狭間の奥と」(後書き)

初投稿の中、なんだかんだで始めました。出来れば、このワルクラ(勝手に略した)を、皆さんが楽しめたらいいな、なんて思っています。

「……ふん。」

ぼやけた目で千秋が見つめたのは、所々が木々で覆われた青空だった。

その隙間から流れていく白い雲を眺めていると、自動的に心がのんびりしだして、再び意識を落とそうとしてくる。背中に感じる柔らかな草の感触が、それを後押しする。

「ん……」

それに対抗するように、冷たい風が身体をなでてくる。少し震えた身体を抱きしめながら、ゆっくりと起き上がってみた。

「？」

視界に移るのは木ばかり。視線を右に向けても左に向けても前にも後ろにも向けても、木ばかり。どうやら森の中にいるらしい。確か千秋の町にはこんな森は無かったはずだ。少なくとも、記憶にはない。思い出すのは、鍵を盗んだネコと、さっきまでいた化け物のことだけだ。

「……！？」

ばっ！ と、千秋は再度周りを見回す。……特に何もない。木しか無い。

それを完全に確認すると、思わず胸を撫で下ろした。

「よかったあ……本当に夢だったんだね……」

夢じゃなかったらどうしようかと思っていた。現代、西暦二〇七五年の今では、『魔法』なんてものが普通に存在している。一応、彼女には使えるはずなのだが、何故か使えない。そんな状況で、いつあんなものに出会うか知れない町を歩きたくはなかった。

と、そんな安心感と共に、千秋はある可能性にたどり着いてしまった。

「……もしかして。私って、あんなマンガみたいな夢を見るほどイタイ頭なの！？」

謎の化け物に襲われる↓カッコいい少年に助けられる↓なんか物語が進む。

ベタなようなそうでもないような展開だった。

「ああああああ……どうしようどうしようどうしよう……。確かにお兄ちゃんの影響でマンガは読んだりするけど夢にまで見るほど影響されてたなんて……こんなの友達に言えないよお……」

言わなければいい。というところまではたどり着かないらしい。

千秋はまるで、受験に落ちていたらどうしようという恐怖から合否の通知を見られない人みたいに頭を抱えていた。どうも彼女にとっては、相当な問題のようで、背後に近寄られても全く気付かなかった。

「……何してんだ？」

「うにゃあっ！？」

「うおっ」

驚いて飛び上がった千秋は、反射的に背後の男（声的に判断）に蹴りをお見舞いする。さすがに予想外だったのか、モロに受けた男は「~~~~ツ！！？」と声にならないうめき声を上げて倒れた。

「……あれ？」

自分が蹴った相手をよく見てみると……。

夢の中にいた少年だった。

「……………」

ダラダラと汗を垂れ流す。

——まさか……。

「いつてて……ったく、何なんだ？」

「iiiiiiiiiiiiいやあああああああああああッッ！！」

「ぐはっ！？ うごっ？！ ひぎゃっ！！ ちょっとまっていべっ！！？」

「お願いします消えてくださいあなたは夢の中の住人なんですこの世にはいないんです私の幻覚なんですせめて出てくるなら夢だけに

してくださいお願いしますお願いしますとりあえず何でもするんで消えてなくなってくださいっていうか消えろおおおおおおお
おおおおお——ッ——！！」

「あぎやはっ！　ぐへふ！　あべし！　ずはっ！！　だからむぐおっ！？　待てっついていぎい？！　ま、マジで待ってくれ痛いからマジで痛いからッ——」

「消える消える消える消える消える消える消える消える消える消える消える消える私のイタイ頭と共に消える消える消える消える」

「怖っ！　ごふっ！！」

それから会話もまともにしたことのない少年をDVのごとく蹴り続けて約五分。精神的疲労からか、息を切らしながらボコボコに蹴られた少年を見下ろす。

「はあ……はあ……はあ……くっ、消えない……」

「うぐっ……人散々蹴っついて謝りもしないのかよ……。一応命の恩人なんだけどな……」

「夢の中で死んでも現実の私は生きます」

「夢って……」

まあ、確かに夢っぽくはありますが

ちやき、と、少年が腰の辺りから黒光りする拳銃を取り出した。

「ひいつ！？　拳銃！？」

「トライデント。待機形状が銃なだけ」

「あー、なるほど。じゃあさっき喋ったのって……」

「そ。俺の相棒らしい、シルディック・アインだ」

らしいは余計です。どうぞよろしく

「は、はあ……」

お辞儀されたので（少年が手首を動かしたただけだが）、お辞儀し返した。

「……って、夢の中の人によろしくって言われても……」

「夢じゃないぞ」

「何言ってるんですか？　あんなマンガの中にしかないようなのが

いるわけじゃないですか」

一応、初対面だから敬語で喋る千秋。

「魔法はあるのに？」

「うっ、それを言われるとキツいですけど……でもでも、あんなのがあるなんて分かってたら、もつと騒ぎになってると思いますよ？」

「隠蔽されてるかもよ？ パニックになるかもだし」

「それは……一理ありますけど……」

自分自身パニックになっていたからか、そう言われると弱かった。
「第一、いくら魔法なんて物があるからって、夢の中の住人を蹴れるわけないだろ」

「うっ……まあ、確かに……」

さすがに頭が冷えてきたのか、正常な思考回路が戻ってきていた。
よくよく考えてみれば、夢の中の住人が見えているということは、幻覚な訳で。その幻覚は形なんてあったもんじゃないのだから、蹴れる訳も無い。よく考えることも無いことだが。

それを察したのかどうか、少年は大きくため息をついた。

「とにかく自己紹介がまだだ。話はその後」

少年は、こちらに手を差し出して、

「俺は神射蒼夜。神を射る蒼い夜で、かみいそうやだ」

私の名前は、先程ご紹介された通り、シルディック・アインと申します

その手を握り返しながら、

「えっと、美薙月千秋です。あの……その……」

「いいよ、気にしてないから。『めちやくちゃ』痛かったただだし」
「うっ……」

思いきり気にしていた。心無しか握手している手に力を入れている気がする。

「ああ、あと。見たところ同い年だし敬語じゃなくっていいぞ。堅苦しいし。名前も蒼夜でいい」

私のことはとりあえずシルディとでも呼んでください。蒼夜様は

呼んでくれないので

「えっと、うん。蒼夜……君と、シルディだね」

頬を紅潮させたのは、別に蒼夜がカッコいいとかではなく、単純に男性の名前を呼ぶ経験が無いためだ。しかしどうとったのか、シルディックが「ひゅーひゅー」などと言っている。蒼夜は一瞬手元を睨んだが、無視して話を続ける。

「……とりあえず、さっぱり何も分かってないようだから状況説明してやる」

「お願いします」

「ん。まずだ。ここは日本じゃない」

「は？」

「ついでに言うと、アメリカでも中国でもロシアでもイギリスでもイタリアでもどこでもない」

「あのー、どういうことですか？」

「まあ簡単に言うとな」

蒼夜は一瞬空けて、

「ここは異世界だ」

「……………。……………。……………は？」

千秋は一瞬、どころではなく全く言われた意味が分からなかった。

「だから、ここは異世界」

「いせかい？ 伊勢エビの貝？」

「違う！ 異なる世界で異世界だ！ てかなんだよ伊勢エビの貝って！？」

「んーと、えっと……伊勢エビガイが入ってた貝？」

「伊勢エビガイ！？ 苦し過ぎるだろう！ そんな奴いないし！」

「うう……」

とりあえず仕切りなおすことに。

「とにかく。ここは異世界なんだ。世界名スフィーリア、でかい都

市も無い代わりにでかい遺跡とか伝説残る田舎だ」

「えっと……それが本当だとして、なんでそんなところに？」

「ちよつとした現象が起こってな」

World Mixture Phenomenon。直訳すると世界混合現象

「とかいうのが起きてんだ」

簡単に言ってしまうえば、どうやら多数ある異世界同士が合体しようとしているようなのです

「がったい？」

「詳しいことはよく分からない。今のところは何が起きてるって訳でもないしな。精々あの化け物、デビルと狭間が出てくるようになったくらいだ」

それは十分問題だと思うが。

「狭間？」

「異世界間を繋ぐ道だ。突然現れる謎のワープゲート」

先程千秋さんが吸い込まれたあれです

「あー……ん？」

「どうした？」

何か思い出したような顔をした千秋を、訝しげに見る。

「いや、そういえばあのとき誰かに足引っ張られた気がして……」

「うっ……き、気のせいじゃねーか？」

「引っ張ったとしたら……蒼夜君？」

凶星だった。

「そ、そそそそそんなバカな！ な、なんでそんな事しなきゃならないんだよ？」

「……なら良いんだけど」

蒼夜は安堵の息を吐いた。「とにかく」と、説明を続ける。

「調査はしてるけど、詳しいことはさっぱりだ。『世界が終わる』

とか、『別のものになる』とか、いろいろと説はあるけどな。うちは結構のんびりしてるよ」

まあ、本部の方とはともかく、SGSは学校ですからね
「そういうことだ」

センチユリーズ・ギア・スクール。通称SGS。
現在日本を、いや世界を管理している組織『世紀の歯車』が開いた小中高一貫校だ。『世紀の歯車』の本部が日本にあるからか、日本に建てられた。いわゆる魔法学校だ（魔法学校自体はSGSだけではない）。

とはいえ、この学校は推薦でしか入れない。しかもSGSからの推薦だけだ。どこから情報を仕入れるのか（世界を管理しているからその程度は簡単なのだろう）、磨けば光るであろう原石を発見し、入らないか、と直接出向いてまで誘う。大抵断る人はいないが、推薦されただけでも名誉らしい。

まあ、千秋は前述の通り魔法が何故か使えないので来る訳も無かったが。

「まあ、何故こんなところにいるのかっていう説明はこれで終了だ。分かったか？」

「なんとなく……」

「そうか、じゃあ今度は、これからのお話だ」

「うん」

「さっき何でもしてくれる、って言ってたよな？」

「え？」

「俺を蹴ってる時だよ、覚えてないのか？」

「い、言った気は——するけど」

「じゃあとりあえずだなあ」

ジロジロと千秋を見る蒼夜。

「ま、まさか……」

「おう、俺の手伝いを——」

「助けてもらっておいで蹴ったお返しに身体で返せとか言つの!？」

「なんでそうなるんだよ!?!」

「うう……だってジロジロいやらしく見てた!」

「見るかぁッ!」

「男の子ってやっぱり頭の中そういうことばかりなんだ!」

「おい、話を聞け」

「ひぁ! 言うこと聞けなんて! やっぱり!」

「お前の耳には台詞改竄装置せりふかいさんそうちでも装備されてんのか!?!?」

「男の子怖い!」

「俺はお前が怖いよッ!」

蒼夜様 蒼夜様

と、どうでもよさそうにシルディックが割って入った。

「何だよ!?!」

口論してて良いんですか?

「はぁ? ……!」

「ど、どうしたの?」

「囲まれてる」

「え?」

はっ、と千秋は気付いた。

周りを見てみれば、木の影からこちらを覗き込む人影が周りを囲んでいた。どうも全員男らしいが、それにしてはなんだか全員有りがちな格好をしている。なんというか、いわゆる盗賊っぽい格好を。当然、頭にはバンダナ装備だ。

「千秋。お前魔法は?」

「使えるはずだけど使えない、って言われた」

「……なるほど。ちよっとお前のこと分かってきた」

「え?」

「俺の後ろに隠れてろ。ぱぱっと蹴散らしてやる」

「……どう？」（後書き）

台詞ばっかかも……。

今回は基本的に設定語りとギャグだったつもりです

「異能への恐怖」

小さい頃。確か、まだ私が幼稚園生だった時の話。

その時の私を知っている人は、今の私を見ると変わった、と言うかもしれない。自分でも言うのもなんだけど、ガキ大将みたいな感じだった。とはいえ、女の子や、気が弱い子たちをいじめのいじめっ子達を蹴散らしたりしてただけだけど。あとは大体普通に遊んでいただけ。お人形遊びとかもしていた気がする。

そんな頃の。大体幼稚園年長さんくらいの時。
いわゆる、挑戦状を受けた。

今まで蹴散らしてきたいじめっ子達が、結託して私を倒そうというらしい。

それだけなら面倒だし放っておいたかもしれないけど、どうも人質がいるらしい。幼稚園生なのに悪役じみたことをするものだ。しかし、人質がいるとなれば行かなければならない。知らない子だったとしても、巻き込んでしまったのだから。

呼び出された河原に行くと、大体二〇人くらいの子達がいた。その中の一人が、前に出てきて、

『みなつきちあき！！ いままでのうらみ、はらしてくれるッ！』
なんて、今考えてみれば幼稚園生が言うようなことじゃないことを言い出した。

対して私も、

『ふん！ できるものならねっ！！』
などと強気でいた。

その時だけだったけれど。

『ファイヤー・ボール！』

誰かがそう叫んだ。

瞬間、目の前が爆発した。

直撃はしなかったし、爆発もそんなに大規模なものじゃなかったから爆風も大きくない。でも、その時の私を吹き飛ばすには十二分なものだった。

状況を理解するのに、三〇秒くらいかかった。誰かが魔法を使っただのと判断するのに更に三〇秒くらいかかった。

耳に入ってくるのは、いじめっ子達の笑い声と人質の子達の悲鳴。のろのろと立ち上がった私を、さらにもう一撃ファイヤー・ボールを撃ってくる。ただ使えるというだけでコントロールは無いらしく、頭の上を超えて背後で爆発した。

『あうっ！！』

小石だらけの河原はかなり痛かった。足とか腕がズキズキした。周りから近づいてくる足音が聞こえる。応戦しようと、立ち上がる。ダメージのためなのか、恐怖感があつたのか。足が震えた。

『オラアッ！！』

ドゴッ！ と、お腹の辺りにいじめっ子のパンチが入った。それだけで一瞬意識が遠のいた。

でも、相当負けず嫌いだっとならしい私は、それに耐えて、殴ってきたいじめっ子を殴り返してやった。今の私じゃ絶対しなさそうなことだ。

でも当然、その程度じゃ退かない。だって向こうには魔法があるのだから。

『おい、ないてるぜ？』

気まずさも無く、ただそう言って笑われた。

言われるまで気付かなかった。目の前が滲んで、頬の辺りに雫が流れ落ちていた。

『おらおら、いつものいせいはどうしたんだ？』

満面の笑みで近づいてくる。恐かった。

誰かに助けてほしかった。

人質の子達はもう目をそらしている。

『さて、かくごしろよ。みなつきちあき』

二〇人が、全員で私を囲んだ。

胸の辺りが熱かった。

これから起こることを想像して、この場から逃げたかった。

ふわり、と風が流れる。

『いやああああああああああああああああああああああああああああああッ！！』

瞬間。

私の周りを流れる風が二〇人のいじめっ子達を斬り裂いていった。
私の周りから血が噴き出していった。

斬り飛ばしていった訳じゃない。当然五体満足だ。後で聞いた話だと、発見が速くてちゃんと全員無事だったらしい。それほど傷が多かった訳でもなかったのが幸いしたみたい。

その時からだった。

私を持つ力のことを知ったのは。

『エアリアル空気制御』。簡単に言ってしまうえば風を操る力。

検査のときは大変だった。力自体はなんとなくの感じで使えただ、力の加減が出来なかった。そもそも使わなくても勝手に漏れることも、その時はよくあった。

おかげでいろんなものが斬り裂かれ、検査が終わるまでかなり時間がかかった。

結果としては。魔法以外の何か、ということになった。どうも、魔力の変換はされていたけど、魔法使用時の術式が全く見つからなかった上、具現力による魔法具現化時の干渉がなかったらしい。

具現力というのは、簡単に言えば魔法を具現化する力。難しく言う、と、魔力変換によって異空間に形作られた魔法を、現実の空間に

干渉し魔法を具現化させる力。

次に術式。魔法を使う時というのは、目に見えないけど自分の周り（範囲指定の場合、範囲全体を囲むように）を文字が鎖のように包んでるらしい。それが術式。

術式は、その魔法の詳細、みたいなものなんだとか。たとえば、ファイヤー・ボールの場合『魔法属性が火の使用者の魔力を変換し球状の炎を生成、具現力によって現実具現化し、指定された位置に炎弾を放つ』って感じ。

私の空気制御には、それが無いみたいで、魔法とは別のものと判断された（具現力を使わない魔法もあるにはあるけど、術式については変わらない）。

理屈だけ聞いても、その時の私にはさっぱり分からなかった。

ただ、私はその力が恐かった。

空気制御自体は、その内使いこなせるようになるかもしれない。でも、魔法とは違う、ということだけで何故かもう恐かった。いつか、この力が再び誰かを傷つけてしまうような気がして。

小学校になると、私は学校で浮いていた。

テレビでやっているようないじめはない。精々誰か関わろうとしないだけ。

中学校は、卒業した小学校から遠く遠く遠いところを受験した。それにあわせて家も引っ越し。

そして今は――、

「異能への恐怖」(後書き)

本当は3話にするつもりでしたが、あえて2・5にしてみました。

ちょっとシリアスめ。

「ときめきがー蒼夜様にも、訪れるー。五七五です」

数は一五人ほど。

盗賊（の格好をした連中）達は、一人一人違う武器を持っていた。長めの片手剣ブロードソード。剣を折るためにある櫛状くしじょうの部位を持つ剣ソードブレイカー。湾曲した刀身を持つショーテル。三角の穂先先端に左右対象の突起を持つパルチザンなどなど。

「シルディック・アイン。ウェイクアップ」

蒼夜の声と同時に、拳銃の状態だったシルディックの銃身が上に持ち上がり、柄に変化する。さらに、銃口だった部分から鐐りゅうが飛び出し、鐐から巨大な剣身が展開される。

「シルディック、剣身の攻撃を非殺傷設定にしろ」
了解

ぞろぞろと木の影から盗賊達が出てくる。

その内の大柄な男が一人、前に出てきた。スキンヘッドで、サングラスをかけたその姿は、なかなか恐怖を煽る。

「ふむ。山賊だ。金目のものを置いていけば、何もされないですむぞ」

「ただの学生がなんもん持つてるわけねーだろ」

「そのトライデントがある」

「こいつは契約型だ。人工型じゃないから、無理だな」

トライデントは契約型と人工型がある。契約型は、何十何百何千年も前に、どこかで作られていたトライデントだ。このトライデント達は、空間と異空間の狭間に存在しており、それぞれが自意識を持ち、自分に相応しい契約者を捜している。そして、相応しいと判断した使用者と契約し、パートナーとなるのだ。その契約者以外の者はこのトライデントを使えない。

対して人工型は、契約型のトライデントを真似て作った物だ。性能は契約型と少しばかり劣るが、働き自体は何の問題も無い。人工

向かって突っ込んできた。

フッ、と蒼夜の身体が消えた。そう千秋が理解した瞬間に、蒼夜の周りにいた山賊達が身体をくの字に折りながら前後左右に吹き飛ばされた。その山賊達の何人かが千秋の横を通り抜けると、今度は千秋の後ろ周りにいた山賊達が、そして側面から迫っていた山賊達が、同じように吹き飛ばされた。

「ふむ」

大柄な男は、数秒ほど考えるような素振りを見せると、甲高く大きい口笛を吹いた。すると、よろよると山賊達が立ち上がった。

いつの間にか千秋の前に戻っていた蒼夜をじっと見つめ、

「SGSなんて魔法学校がどんなものかは知らんが、ふむ、それなりに強い奴もいるようだ。なかなか興味深い」

「アンタみたいな敵ついおっさんに興味もたれても嬉しくねーぞ」
「戦ってみたくなったということだ」

大柄な男が、短い息と共に走り出した。

「はあッ!!」

その太い腕と共に、モーニングスターの鎖でつながれた棘の鉄球が弧を描いて右側面から蒼夜を襲う。

蒼夜がそれをシルディックで防ごうと剣身の面をそれに向け――、

「蒼夜君ダメッ!」

がつ、と蒼夜の身体が真後ろから押し倒された。空気を切る凄まじい音と共に、鉄球が真上を通り過ぎる。

「いってえ……何すんだ千秋!」

「新式魔法!」

「はあ?」

「あの鉄球新式魔法の術式が刻まれてる! うっすらと光ってたの見えなかったの!?!」

千秋が言つと同時に、振り切られて飛んでいった鉄球が一本の木に

当たった。

瞬間、その木が当たった部分から引き千切れた。

「……………」

「多分……何かに当たった時に衝撃強化の魔法だね。鉄球が振り回されて発動……じゃ遅いか。走る時の短い息か、振り回す時の大声か……で、当たると同時に、発動時に溜め込んだ自然力を一気に放出、みたいな感じかな」

「……よく分かるな」

「魔法が使えない分、勉強はしたからね」

すつと立ち上がる。いつの間にか手元に戻した鉄球を持っている大柄な男は、口元に笑みを浮かべていた。

「ふむ。その通りだ。いい目をしている」

「当たっただけで木が千切れるなんて魔法は限られます。新式魔法なら尚更」

魔法には古式魔法と新式魔法の二つがある。たまに、古式魔法を魔法、新式魔法を魔術などと呼ばれることもあるが。

古式魔法とは、トライデントを通して使うような魔法のこと。別に必ず通さなければならぬという訳でもないが、その方が使いやすいので今ではトライデント無しで古式魔法を使う人は少ない。

古式魔法には、いくつか種類があるが、それはまた別に機会に。対して新式魔法は、トライデントは必要ない。それどころか魔力も具現力も必要がない。新式魔法は、いわゆる魔法陣を書いたり、物に術式を刻んだりする。それを自然の中に眠っている力、自然力を使用することで発動するのだ。自然力自体は使用されても元に戻るの、そういった面では新式魔法のほうが便利といえる。

「ふむ……、しかし、今の一撃で決めるつもりだったこちらとしては分が悪い。私のからくりがバレてしまっただけでは対応もされてしまうだろうしな。仕方が無い」

大柄の男は一度区切り、

「ふむ。全員、術式の発動を許可する。一斉攻撃！」

『ヤー————！』

瞬間。周りの山賊達が持っていた武器に、ぽうつと、文字が浮かび上がった。新式魔法の術式が発動されたのだ。

大柄な男以外の全員が自分の持つ武器を天に掲げた。すると、武器に刻まれた術式同士が薄い紫色の線で結ばれていく。一五人の術式が、一本ずつ線を出し、誰かと繋がっていく。そうしていると、一五本で作られた模様が出来た。無秩序で、単に一五本の線を適当につなげたような模様は、中心に千秋達を置いたまま、徐々に光を強めていく。

「こいつは……！？」

「長い術式を分割して、発動を多人数で行うことによって長文術式の携帯を可能にした部隊型術式！」

新式魔法は主に魔法陣や術式を物に刻んで発動する、と前述したが、どちらの方が使われているかといえば魔法陣の方である。

魔法陣は、簡単に言うとな術式を凝縮して詰め込んだ物だ。その分手間はかかる。が、多少手間がかかっても、大きさ自体は発動には関係ない（もちろん効果や威力のことについて言うなら大きい方がいい）ので携帯もしやすい。紙媒体でもいいのだから、複数持つことも出来る。

逆に術式の方は、前の通り魔法の詳細のような物だ。それがどのような手順で発動されるのか、発動後はどうなるのか、などを記したものの。しかし、正直言つて、長い。

何度も言うが、術式は魔法の詳細のような物。当然、細かく書かれている。これが新式魔法に取って面倒なのだ。

古式魔法の場合はトライデントを通して（使わない人は自力で）術式を構築するので、書いたりする必要は無い。が、新式魔法の場合は、何かしらに書いたり刻まなくてはならない。それだけならまだしも、長い物は馬鹿みたいに長いので、持っていくのに不便だし、そうなると思いたい魔法が使いたい場面で使えない何て事が起きる。それを解決するために作られたのが、部隊型術式だ。

部隊型術式「魔力滅殺」発動！

瞬間。体中からフツと、力が抜けた。いや、『消え失せた』と表現した方が正しいかもしれない。がくつ、と意識が一瞬消えた。

二〇一五年に発見された魔力というのは、生命力の片割れのような物だと判明している。それが消滅させられたのだ。おそらく全てが持つていかれた訳ではなく、生きるのに最低限必要な分だけ残るようになっていた（あるいはわざと残された）のだろ。でなければ死にかけているはずだ。

まあ。普通の魔力量ならば、だが。

「ふむ。意識は完全に途切れたようだな」
確かに二人の意識は消えた。
だが、それも一瞬のことだ。

既に片方は目が覚めている。

「ふむ。さつさとこの女を連れて帰るぞ男は殺しておけ」
「ヤーーーー!!」

大柄な男が背を向けると同時、山賊達が千秋達に近寄った。その目を覚ました方には分かつている。過去にそういうことがあったから。

似たような状況があったから。

恐怖に煽られる心に呼応するように、
胸が熱くなる。

山賊の手が彼女の方に触れようとした。

「いやあああああああああああああああああ
ああああツツ！！」

そのとき、蒼夜はその声に目を覚まされ、ぼやけた目で見た。そしてシルディックは『トライデント的視線』で見た。

千秋の周りに魔力が大量に放出された。その魔力が一瞬で変換されて風に干渉し融合した。融合した風が一瞬で凝縮され、さらに放出された魔力が変換され、風に干渉し融合し凝縮され、さらに放出された魔力が変換されて風に干渉し融合して、と繰り返されることなく三秒。

その風が鋭い刃のように周りの山賊達を斬り裂いた。

肉を切る音など無い。それどころか何の音すらもなかった。ただ、緑色に輝くその風が山賊達の身体に振れ、細胞すら傷つけずに断ち切り、達人のごとく綺麗に裂かれた傷口から紅き鮮血がまき散らされるだけ。しかも、その風はまき散らされた血すらも斬り飛ばした。まるで千秋に返り血を浴びせないようにしているかのよう。

どさり、と、それだけの音を立てて山賊達は倒れた。シルディックと千秋以外には、何が起こったかなど分からなかっただろう。ただ緑色に輝く何かが山賊に触れ、そして斬り裂いた、としか理解のしようがなかったはずだ。

「な……な、んだ……？　なに、を……」

大柄な男の表情は、サングラスをかけていても分かるほどに動揺し、恐怖していた。

「魔法……じゃない。千秋、お前何をした……？」

蒼夜の表情は、恐怖もあったが、困惑の方が勝っていた。

大柄な男は、しばらく呆然としていたが、はっと我に返ると、懷から紙の束を取り出して倒れた山賊達に投げつけた。真つすぐに全員に行き渡って、山賊達の真上に魔法陣が現れて山賊達を消した。転送系の術式なのだろう。

そのまま大柄な男もそれを使って逃げた。

残ったのは、山賊達の血と千秋達だけだった。

＊ ＊ ＊

森の中をゆつくりと移動していく。

蒼夜はまだふらついてるので、千秋が肩を貸す形での移動となった。

「大丈夫……？」

「どうつてことない。その内回復するよ」

それは結構ですね。今回みたいに千秋さんに助けられてちゃ、S GSの生徒として恥ずかしいと思います

「お前は心配の影すら見せないな……」

「ん、それならいいんだけどね……」

千秋は苦笑しながら言った。

（……幼稚園以来かな）

あの時もさっきのように風が、『エアリアル空気制御』によって起こされた風がいじめっ子達を斬り裂いていった。どうも千秋が成長するに連れて『空気制御』自体も成長しているらしく、ああして暴走（実際は暴走なのは分からないが、とりあえずこう呼んでいる）でもしなければ広範囲には届かなかったが、今では結構な距離まで届くようになった。

——死んだりしない、かな……。

そう思っていたのが分かったのか、蒼夜が千秋の方を見ずに、

「大丈夫だろ」

「え？」

「あーゆー連中はしぶといもんだ。手足が飛んでた訳じゃないし、見たところ急所にも入ってない。十分アイツらでも対処出来るだろ」

「そ、そう、かな……」

新式魔法が使えるなら治療系のもあるかと。部隊型を使えるので

すから尚更です。魔法を勉強していたなら、治療系魔法が使えないと新式は無理だ、ってことくらい分かるはずですよ

治療系魔法は新式魔法の土台だ。つまりは基礎。他のは全て応用のようなものなので、これが出来なければ新式魔法は使えない。

「……そう、だね。うん、きっと大丈夫」

初めて蒼夜の前で笑った。

屈託の無い、笑顔だった。

……蒼夜が一瞬見とれてしまったのはまた別の話。

「ときめきがー蒼夜様にも、訪れるー。五七五です」(後書き)

大変だった……。設定をいれつつ戦闘シーン、難しいですねーやっぱり。

ていつか展開が速過ぎたかも……。

「面倒と面倒が重なってやがる……」

徐々に足が速くなっていく。

蒼夜が自力で歩けるまでに回復した、というのもあるだろうが、原因は他にある。

ちらちらと木々の隙間から見える光景が足を速めさせた。

「町だよー！」

「町だな」

町ですね

森を抜けたその先にあつたのは町。これもまた、あの山賊達と同じように典型的な町だった。特にこちらは本当にRPGの中に入つた気になる。

地球でいうと村といえるほどの物だ。マンションは一つもなく（もしかしたらアパートのような物はあるかもしれないが）、一軒家ばかりが並んでいる。中に入ってみたいと分らないが、もしかしたら武器屋とか防具屋などもあるかもしれない。

町の周りは、レンガらしきもので作られた壁で囲まれている。中央には噴水がある広場もある。奥の方には他に比べて大きめの家が建てられている。パターンで行くなら、町長の家だったりするのだろう。

検索終了。ここはスフィリア第二遺跡地帯唯一の町、ラインズ。平々凡々な町ですね。特に特徴もなく、貴族みたいな物がある訳でもない、本当に極限的にもう完璧に普通な町です

「本当に普通って……そんな町あつたんだ……」

「まあ、異世界だし。ていうか地球にもあると思うけど」

ちなみに、どうもさっきの山賊達に色々と強いられるみたいですね。金を出せー、とか、女を寄越せー、とか

「……そんな町、地球には無いと思うよ、ゲーム以外」

「ああ……そうだな」

そんな事を言いつつ、蒼夜達はラインズの入り口に向かった。

町内に入ってみると、賑わっている訳でもなく、かといって静まっている訳でもない町だった。つまり普通。町の入り口から見える人々のしていることは、世間話をしていたり、店員が呼び込みをしていたり、地球でもよく見られた物ばかりだ。異世界だとは思えないほどに普通だと千秋は思う。

「んー……山賊に襲われてたりしなければ、地球にもありそうな町だけど……」

「まあ、異世界の町なんてそんなもんだ。結局は同じ『人間』って連中が暮らしてる。歴史とかいろいろ違うだけで似たような物なんだよ」

とりあえず一種のパラレルワールドみたいなもの、と捉えていたできれば大体理解出来るかと

「ふうん……」

そういうものなんだ、と心の中で呟いた。

ラインズの町は特別広いというほどでもないようで、入り組んでもいないから普通に真っすぐ歩いていると、二〇分前後で町を囲む壁までたどり着いた。途中、町人に旅の人かい？なんて人生初の質問に戸惑ったが、蒼夜が町人の相手をしてくれたので、助かった。たどり着いた壁を背に建てられた周り比べて大きめの家を見上げる。

ここまで来るのに見てきたが、アパートらしき物を一つ見つけたくらいで後は大体一軒家だった（武器屋や防具屋は無かった）。二階建てが少なく、地球の一軒家と比べて小さめの物が多かった。

それに対してこの家は大きめだ。小さめの邸きしやと言ったところだろうか。小さな門の奥にある邸は、三角屋根を階段のように二つ重ね、上の段の屋根には煙突が出ている。見たところ三階建てのようで、入り口の左右上辺りと、その二つの上、計四つのベランダがあった。

「凄い家だね……私の町じゃ全然こんな家見られないよ」

「まあ、町長の家らしいからな。当然なんじゃないか？」

蒼夜は言いながら、門の側にあった鐘を鳴らした。途中であった町人（旅の人？と聞いてきた人）が、町長の家に入る時はこの鐘を鳴らせ、と言っていたからだった。

鐘の音がなり終わりしばらくすると、邸の扉が開き、一人出てきた。

「「え？」」

その人は女性だった。茶色い首辺りまである髪に、整った顔つきの人だった。が、

「お待ちせしました。何か御用でしょうか」

「「……………」」

「？あのー……？」

「え、あ、す、すいません。えっと、町長さんにお話があつて来たんですけど」

「かしこまりました。では、こちらへ」

女性の後ろに目を見開きながらついていく二人。たまに目をこすったり、こめかみを押してみたりとしながら。なんで遺跡世界にこんな人が？と思いつながら。

女性が、立ち止まった前にある扉をノックする。中から少し低めの声が返ってくると、扉を開いて中に入る。二人もその後続く。

「町長、このお二人がお話があるそうです」

「分かりました、ありがとうございます」

セシアと呼ばれた女性は一礼して、部屋を出て行った。

「ふむ、見ない顔ですね。さあさ、どうぞおかけください」

町長が自分と対面のソファを示して言った。礼を言いながら腰掛ける。

町長は男性だった。少し茶色身を帯びたワイシャツに黒いズボンを穿き、白くなっている髪は薄めで円形脱毛している。旋毛つめいのあったであろう場所には、もう一本の希望も無い。

「お話し、ということでしたか？」

「えーっと、まず、その前にいいですか？」

「何でしょう」

蒼夜が代表して、さっきから二人が気になっていたことを聞いた。

「あのー、さっきの方、セシアさんでしたっけ？」

「ああ、はい。私の孫の友達でして。彼女のご両親が小さい頃にお亡くなりになられていて、それで家でお手伝いとして引き取ることになったんですよ」

「いや、まあそういう重い話は置いてですね……俺が聞きたいのは――」

一瞬空けて、聞いた。

「なんでミニスカメイド？」

そう、セシアはミニスカートでメイド服だった。何故か肩が露出しているブラウスとエプロン、そして白いニーソックスを履いていた。頭には当然ヘッドドレスも装備されている。前述の通りミニスカートなので、ニーソックスとの間に白い肌が見えていた。

町長は一瞬ぽかん、としていたが、

「ああ、あれは……ですね」

一〇秒ほど考え込み、

「このラインズが山賊に襲われている、というより脅されて様々なことを強いられていることはご存知ですか？」

「ええ、まあ。町自体はそこまで暗いものでもなかったんで信じ辛いところはありましたか」

「あれはある意味開き直っているだけです。もう山賊とかどうでもよくね？ 言う通りにしてりや何も無くね？ 的な」

うわぁ……と思わず千秋は漏らした。

「その結果の一つが……メイドさん、というのですか。あの服をこの家の女中さん全員に着せる（美少女限定）」

「凄い欲望全開の命令ですね」

「まああの程度ならまだ可愛い物ですよ。……ぶっちゃけみんな可愛い！」って喜んでましたし」

「……確かに可愛かったかも」

そう呟いた千秋に蒼夜は一瞬視線をずらしたが、すぐに戻した。

「どの程度のものなんです？」

「そうですね……食料を寄越せ、女を寄越せなどから、金を寄越せ鉱石を寄越せなどまで、とにかくいろいろあります。正直そろそろ厳しいんですよ。特に鉱石なんですが。この第二遺跡地帯は遺跡の他にもそれなりに高価な鉱石も掘れるもので、それを他の町に売ったりしていたのですがね。山賊達のせいで年々、いや月々に町への収入が減って来ているんです。そうすると職を持っていても給料が十分にもらえなかったり、そのせいで買い物が出来ず、店は儲からない、なんて悪循環。いつこの崖が崩れるか分からないですから、結構恐いんですよ」

町長は苦笑いしながら言った。

「……なるほど、大体分かりました」

「ああ、そういえばあなた方のお話を聞いていませんでしたね」

「俺達は——、あーいや、こいつは違うんですけどね」

「俺はSGSの生徒です。なりゆきの仕事ですが、一応手助けさせてもらいますよ」

* * *

あれから町長と話した結果、様子見はせずにさっさと山賊を潰そう、ということになった。

蒼夜と千秋は町長宅を後にし、町に戻る。

なことで『普通の子』じゃなくなるなんてイヤなの!!」

「……………」

「帰してよ……早く私を地球に帰して!! 五日も行方不明になんてなつてられないよ! 私は――」

「お前、何怖がつてんだ?」

「ッ!!」

蒼夜は今までとは比べ物にならない冷たい声で言った。

「大体見当はつく。今のお前の遠吠えで確信も持てた」

「と、遠吠え……?」

「負け犬の遠吠えだ」

「なっ……!!?」

「自分が一番分かつてるんじゃないのか? 今のお前は『普通の子』とやらでも何でも無い。ただの負け犬だって」

「……さい……」

「認めるよ。分かつてても認めたくはないんだろうけどな。じゃなきゃお前は一生――」

「うるさいッ!!」

「……そうかよ。だったらいくらでも逃げてろ。ああ、言つとくけど俺は異世界転移用の術式なんざ知らないんで、SGSから連絡受けた時に教えてもらうしかねえ。つまりお前はそれまで帰れないぞ。それが嫌なら俺の手伝いをしろ。狭間の出現なんざ繋がってる世界で何かあつたからって理由なだけなんだ、山賊共を倒しやあそれで帰れるぜ?」

「……………」

千秋はしばらく蒼夜を睨み続けていたが、諦めたような顔をする
と、蒼夜に背を向けた。

「……帰れるまでだからね」

「分かつてるよ。最初からそれだけのつながりだ。……広場の方が

騒がしい、山賊でも来たかもしれない。行くぞ」

「……うん」

堅い壁越しの二人は、噴水のある広場の方へ歩いていった。

広場には人集りが出来ていた。見たところ山賊が来たらしい気配はないので、とりあえず二人は安堵する。

人集りの中心からは、男性のものらしき声が聞こえる。なにやら叫ぶように喋っているようだが、呂律が回っていない上に、慌てているのか興奮しているのか言葉がめちゃくちゃになって何が言いたいのかわからなかった。

二人は人集りを掻き分けて中心へと向かった。

「だ、だから！ みひやんだ！ こ、ここ、こひゅりゅうを！！」

「だから落ち着けよ。何言ってるかわからないって」

「お、落ち着けるか！！」

最前列にたどり着くと、そんなやり取りを二人の男がしていた。片方は地面に座って噴水へ寄りかかり、もう一人は立っている。他の人々がうんざりしているところを見ると、どうもさっきから同じことをしているようだ。

蒼夜はその男のそばにより、

「落ち着いてください。何か大切なことを話そうとしているのなら、まずは落ち着くことです。でなければ伝えたいことは何一つ伝わらないままになってしまう」

「な、なんだお前は！？」

「俺のことは今どうでも良い。とにかく落ち着いて、あなたの伝えたいことを伝えてください」

「うむう……分かった」

男は何度が深呼吸をする。しばらくそうしていると、どうやら落ち着いたらしく、さっきよりも楽な姿勢で噴水に背を預け始めた。

「で、何を言いたかったんです？」

「み、見たんだ……」

「何を」

「りゅ、龍だ」

「龍？」

ざわ、と周りの人々が騒がしくなってきた。そして男は告げる。

「こ、こ、黒龍を見たんだ！ この目で！ 黒龍『ヘイロン』を！
！」

人々に明らかな動揺が走った。

「へ、ヘイロンだって！？」

「嘘でしょ……ヘイロンは遺跡にいるんじゃないの！？」

「そ、そうだ！ ヘイロンは白銀の遺跡から出ないはずだ！ 第一今はまだ新月じゃないぞ！？ 見たって言っても、子供かなにかじやないのか？」

「違う！ 子供なんかじゃない！ あれは完全に成体だ！ 本当に黒龍『ヘイロン』が出たんだよッ！！」

男は何度も何度もそう叫んだ。

そうしている間に二人は人集りの外に出た。

千秋は、先程のことを気にしているらしく暗い表情のまま、

「……黒龍って？」

「ん、そうだな……まあ簡単に言って神話や空想にいるような龍の一種だ。RPGに出てくるドラゴンの真つ黒な奴さ。とはいえ、そんなのは昔の話だ。今じゃ普通にそんな奴ら……っていつても地球以外だけにいる」

さっきのことなど気にせず蒼夜は続けた。

「龍つてのは神聖な存在としてよく描かれるけど、黒龍の場合は災いをもたらす者としてよく描かれる。まあ普通にイメージとしちゃ当然だろうな。あんな真つ黒いのが幸福を運んでくるなんてイメージはなかなか湧かない。一応一部の地域じゃ神聖な存在として祀ってるけどな。で、話を戻すけど、黒龍つてのは光が苦手なんだ。だ

から光も何も無い深い海底に棲んでるって言われてる。まあぶつちやけ普通に光の中にいられるけど、真っ昼間ほどそこまで明るいのはダメらしい」

「でも……あの人が見たのは外なんですよ？ それっておかしくない？」

「どうしてそう思う？」

「だって……白銀の、遺跡？ から出ないはずだーって。それと今の蒼夜君の話もあるし……」

蒼夜は頷いた。

「そう。白銀の遺跡とやらがどんなもんか知らないけど、光が苦手な黒龍が棲める場所なんだろ。光がそれほど入ってこないとか。そして、夜でもないのに出てくるはずが無い。新月の夜にしか出ないとまで言われてる奴だからな。だがそれが出て来た」

「見間違いとかじゃないの？」

「多分それは無い。龍つてのはでかいんだぜ？ 俺はSGSの授業の動画でしか見たこと無いけど、かなりの大きさだ。ゴ。ラって映画あったろ、あれくらいのサイズはある。あんなのを見間違える訳が無い。酒で酔ってたって訳でもなさそうだ。酒の臭いは一切なかったし」

シルディックを取り出すと、ハンマーのあるはずの場所にあるモニターの画面を押す。すると、そこから映写機のように映像を映し出した。もちろん空中にだ。何かに当てて映している訳ではない。

「シルディック、白銀の遺跡の場所を検索しろ」

了解です蒼夜様。データ検索………発見しました。第二遺跡地帯ポイントBの三エリアです。どうもこの三エリア全てが白銀の遺跡のようですね。このラインズから約三〇分ほどで行けます

「……分かった。じゃあ行くか」

イヤな予感がした。

「い、行くてどこに……？」

「面倒に面倒が重なるけど、どうも黒龍の方も解決しなきゃならな

いっぱい。だからそっちに行くんだよ。山賊自体は簡単に片付けられるけど、こっちはそうもいかない。倒さなきゃならないにしろ、倒さなくてもいいにしろな。つまり、情報収集へGO。白銀の遺跡へGO」

「い、いつてらっしゃい」

「お前も行くに決まってるだろ。早く帰りたいんだろ？」

「うっ……」

「おらおら、行くぞー」

千秋は手を引っ張られ、無理矢理連れて行かれた。

* * *

ラインズを出てから約三〇分。シルディックの案内にしたがって草原を歩き森を歩いた。

「あ……」

森を歩いている途中、足下の感触が固くなったのを千秋は感じた。見ると、さっきまでは土だったり落ち葉だったりしていた地面が、いつの間にか岩のように固まった物になっていた。

「あれだな。第二遺跡地帯ポイントB三エリア」

顔を上げると、森が終わっていた。開けた森の先には所々が緑で覆われている石の建物、いや、町が広がっていた。人の気配など無い廃墟の町のようになっているのは、第二遺跡地帯ポイントB三エリアを埋め尽くすほど巨大な遺跡。ここが白銀の遺跡ようだ。

「……別に白銀って感じはしないけど」

「名前の由来なんざいろんなところから来るだろうし、遺跡の見た感じで決めたとは限らないだろ」

「そっというものなのかな……」

白銀の遺跡を調査する時に作られたのか、人工的な階段が崖に築

かれていた。とはいえ崖を削った原始的な物だから、歪な形はしているが。

「危ない事しやがるな……石になりたいのかよ」

「石？」

蒼夜は千秋の前を歩きながら振り向かず、

「この地面、崖、ていうかこの三エリアのそれ全部ストラジウムで出来てる」

「す、ストラ……なに？」

「ストラジウム。火をつけると爆発して、周りの物を石化させちゃう危ない物質」

「なっ……！」

思わず千秋は飛び退いた。

「安心しろ。普通に歩いてるだけじゃ引火なんてしねーよ。それにどっかのバカが火をつけたってここ一面が吹き飛ぶ訳じゃないし」

「え……？ で、でもここ全部そのストラジウムっていうので出来てるんでしょ？ だったら誘爆するんじゃない……」

「しない。火をつけられたところだけしか爆発なんてしないんだよ。そもそもストラジウムの爆発ってのはガス爆発みたいなじゃないし」

蒼夜曰く、ストラジウムの爆発というのは、自分を分解して粒子化して爆発のごとくそれを散布させることらしい。火をつけて爆発するのは一種のトリガーだからだそうだ。

「ストラジウムについては完全には解析出来てないんだけど、人間の魔力に魔法属性があるように、ストラジウムにも似たような物があるらしいんだ。散布された粒子にはその石化の魔法属性みたいなものがあって、その粒子が触れた物を魔力変換する要領で、一粒が触れたもの半径三〇センチを石化させる。それが粒子で爆発時は煙に見えるんだから、煙の中にいたら物質だろうが生物だろうが石になるって訳だ。ちなみに、空気と水は石化しない。するのは、物と生き物だけ」

方法によっちゃ火花が飛ぶかもしれないから、ストラジウムに階段作るなんて普通しない、と蒼夜は付け足した。

ストラジウムの階段を下りきると、上から見ていたよりも迫力があつた。映画のセットかと思うほど現実味の無い四角形の単純な家らしき物が並ぶ白銀の遺跡は、慣れていない千秋には落ち着かない。しかし蒼夜は特に気にした様子もなく、まっすぐ奥に見える神殿みたいな建物を目指していく。

「へえ……こいつはまた」

たどり着いた神殿を前にして、蒼夜は感嘆の声を漏らした。

大きさは、黒龍が棲んでいるだけあつて大きい。形は単純に四角形を重ねたような物だが、柱や門、入り口付近の壁に様々な彫刻が彫られている。柱の上部はドラゴンの形をしているし、門や入り口付近には天使みたいな人形の何かが彫られていた。神殿の上階にも似たような物がある。

修学旅行くらいしか、古い建造物や場所を見に行かない千秋でも感動出来る物だった。

「こんなのテレビでも見たこと無いかも……」

「あまり外国のことは知らないけど、地球じゃここまで形の残つてる遺跡も珍しいんじゃないか？ 中もちよつと古くて欠けてるところがあるだけで、ほぼ無傷みたいだし」

黒龍の住処ということであり調査にも来ないですから傷つき様もありませんしね。それにおかげでデータもかなり少ないので、詳しい地図はありません。ある意味勇者ですよ、私達は

「漠然とした地図はあるのか？」

残念ながらありません。調査記録には道は単純だ、と書いてあるので特に必要はないと思われますが

「じゃあ良い。とにかく行くぞ」

言つて蒼夜は中に入つていった。千秋も少し躊躇いながら続く。神殿内は、基本的に一本道だった。壁に様々な絵が描かれていたが、どれぐらい価値があつてどれぐらい凄い物なのか分からない千

秋には、ちょっとした感動しか呼ばなかった。

「ん、分かれ道か」

しばらくそうして歩いていると、真つすぐの道に右に行く道が出来ていた。

「どうするの？」

「とりあえず右から行こう。シルディック、道覚えとけよ」
了解です

右に曲がっても、結局一本道だった。変わったのは絵だったのが庭になったところか。

そうして二分ほど歩いていると、大きめの扉があった。それを開き、中に入る。そこには、長方形の部屋があった。広い、という訳でもないが、狭くもない。扉から入って正面には、さっきまで壁に描かれていたように絵が描いてあった。高さは一〇メートルくらい、幅は二〇メートルくらいだろうか。

「うわ……今度はおつきいね」

「ああ。道の途中にあったのとは大違いだな」

近くに行ってみると、ますます大きく見える。

「黒いドラゴン……と、入り口とかにあった天使？」

「黒いドラゴンは黒龍だな。天使の方はよく分からないけど……」

上の方に書いてある古代文字らしき物は言言みたいですね

「文字？」

絵の上の方を見ると、一行しか無いが確かに文字が刻まれていた。千秋には単なる絵文字にしか見えないのだが、この神殿に人がいた頃の文字らしい。

シルディックが読み上げる。

黒き龍が光すらも超越せしとき、神の子に災いが降らん。されど白く輝く銀の者がその災いを止めるであらう……らしいです

「えーっと、つまりどういうこと？」

黒龍が光も気にせずに出たら人に危害が出るけど、白く輝く銀の人が守るだろう、みたいな感じです。白銀の遺跡の由来はこのあた

りからでしょうね

「本当に予言だな……でも無視は出来ないな。現に黒龍は光の中に
出て来てる訳だし」

まあ白く輝く銀の者とやらが出てくるなら、黒龍も気にすることは
無いですがね

「それ期待して出てこなかったらどうすんだよ……まあいい。とり
あえずここはこれだけみたいだし、もう一つの方行くぞ」

言いながら、蒼夜は踵を返した。

「あ、待つてよ」

予言のことが気になりつつも、千秋は蒼夜のあとに続いた。

先程の分かれ道に戻りもう一つの道を行くと、今度は扉は無かつ
たが、絵があつた部屋よりかなり広い部屋の出た。

入り口付近には池があり、部屋の中には巨大な瓦礫がいくつも
あつた。上を見ると、大きな穴があいている。この部屋で行き止ま
りらしく、周囲に扉は無い。

「黒龍が棲んでるとしたらこの部屋くらいか……天井ぶち壊してま
で外に出るなんて、何考えてんだか」

龍の考えることなんて、人間にもトライデントにもなかなか分か
りませんよ

天井の穴を見上げながら、部屋の中心までやってくる。瓦礫の前
に立ちながら、入ってくる光を眩しそうに目を細める。

千秋もボーツとその穴から空を眺めていた。白い雲が流れていく
中、空の色がオレンジ色になりつつあつた。

瞬間、その穴の前を黒くて翼の生えた何かが通り過ぎていった。

「………………。え、今の何？ え
？ え？」

「じ、黒龍、じゃね？」

ていうかそれ以外有り得ません。こちらには気がついてないみたいです

.....。
しばらくの沈黙。

それを、部屋に響く甲高い音が突き破った。

「ひっ！？　こ、今度は何！？」

「ど、どこから響いてるんだこの音？」

反響し過ぎて分かり辛いです

と、その音に何やら悲鳴じみた声が混ざっていることに気がついた。

二人は全力で神殿から逃げ出した。

「面倒と面倒が重なってやがる……」（後書き）

いつもより長め、だと思っています……。

遺跡探索の描写凄く苦労した……。頑張って台詞でカバーしたつもりだけど。

序章の第二章が次からです（プロット的に

「私も……行ってみたいな」

千秋達が白銀の遺跡神殿から逃げ出していた時、ラインズ付近にある山の奥にある崖と洞窟を改造して作った基地の中では、基地内で一番広い部屋で二人だけの会議が行われていた。

部屋の中は崖の中にあるとは思えないほどに豪華な物だった。どこぞの貴族でも住んでいそうなほどにキラキラ光った部屋の中には、ユニコーンの銅像やら無駄に高そうな壺やらが置かれている。天井には当然のようにシャンデリアが部屋を明るく照らしていた。

そんな中に、千秋と蒼夜を襲った山賊の幹部、大柄な男アレックス・ジークは目の前にいる男と向き合っていた。

男は腕も足も胴体もが筋肉が目立ち、いわゆるマッチョという奴だった。顔つきはかなり厳つく、まさに山賊のボスという雰囲気だ。実際、彼は山賊のボスである。ボスの名はイグリア・ビーストだった。

「と、言う訳です」

アレックスが千秋達のことを報告し終わると、イグリアは座っている豪華な椅子にふんぞり返ったまま、不機嫌そうに言った。

「魔法じゃない何か、か。にわかには信じがたいことだな」

「しかし確かに見ました。あの風は異空間で変換され、現実空間に具現化された風の魔法属性によるものではなく、現実空間にまき散らされた魔力が風に干渉し、その風自体が変換されて圧縮されていました」

「新式魔法じゃないのか、なんて反論は無意味だな。新式は魔力ではなく自然力を扱う。それに自然力自体は発動時に術式、もしくは魔法陣に集められ、変換される」

「あの二人の周りで変換されていたんです。もしもあれが新式魔法による物ならば、何も無いところに術式や魔法陣があったことになる。何かに書く、刻むことで発動する新式魔法では有り得ません」

「最近じゃ、それ以外でも使えるものが発明されているらしいがな。まあ、お前がそう言うならそうなんだろう。ところで、やられた連中はどうした」

「現在医療班に治療させています」

「さっさと治させる。その二人の現在地は分かっているのか？」

「ラインズに入っていくのを部下が見ています」

「分かった。じゃあ近々ラインズに部下どもを差し向ける。で、その二人を差し出させる。差し出さないようなら問答無用でぶっ壊せ。壊滅しない程度にな」

「了解しました」

アレックスは一礼すると、踵^{きんす}を返した。

「アレックス。男は連れて来る時どうしてもいいが、女は無傷で手に入れる。出来る限りな」

「分かっています。いろんな意味で価値のある女ですからね。どこにでも高く売れる」

「ククク……分かってるなら良い。さっさと行きやがれ」

振り返りもう一度一礼する。

……イグリアは出て行くアレックスを見ながら、手元にあったグラスの中のワインを口を含み、喉に通す。

「ふん……風を操る女のガキか。なるほど……。あのクソつたれの科学者も、面白そうなもんを……」

イグリアは通信術式の書かれた一枚の紙を取り出し、発動する。

「よう。クソつたれ科学者。ちつとばかり話があるんだがよ」

* * *

白銀の遺跡から約三〇分。長々と森の中を歩いて戻って来た。帰ってくる途中に黒龍は見なかったが、目の前で見た衝撃と、あ

の広場で聞いた悲鳴じみた声が、三〇分間二人を無言にさせた。その間シルデックスがぶつぶつと何かを喋っていたが、二人が喋ることも無く、ラインズ付近まで戻って来た。

と、千秋が重い口を開いた。

「……蒼夜君」

「……何だ？」

「……さつき、あれ倒すとか言っただけ？　あと男の子なのにあーゆーホラーっぽいダメなの？」

「……倒すにしても倒さないにしても言った。あと怖いもんは怖い」「……倒すって言うてるよね？　あと怖いもんは怖いって、さつきまで俺についてこいみたいな感じだった人が何を言ってるの？」

「……ああ、言ったけど何か？　あと怖いもんは怖いんだから仕様ががない。怖いもんは怖いんだから」

「……何開きなおってるの？　あともう意味分かんないんだけど」

「……開きなおって何が悪い。あと俺も意味分からん」

と、数分そんなやり取りをしていると、森の終わりが見えた。ラインズの町を囲む外壁が見える。

その中から煙が何本も上がっていた。

「そ、蒼夜君！　あれ……！」

蒼夜は黙って走り出し、ラインズの入り口に向かった。当然千秋もそれに続く。

町内は大騒ぎだった。

入り口から見えるだけでも一〇軒近くの家が燃えており、自然鎮火したらしい家も、骨組みが首の皮一枚で残っているような状態だ。そもそも消火方法が小規模過ぎる。バケツに水を汲んでかける程度の物だ。消火するどころか、隣に隣にと燃え移り、被害は拡大している。それが更に人々を騒がせていた。

「こ、これって……」

「一〇〇%山賊達だな。ホースと元栓が壊されてる」

蒼夜が指差した方を見ると、ホースの入っていたらしい箱がめちやくちやにされ、飛び出ているホースはズタズタになり、元栓は木の板のように叩き潰されていた。見回してみるとあちこちにも似たような状態になっているホースと元栓があった。

「とにかく消火だ。いくぞシルディック！」

了解

シルディックが拳銃から大剣へと変化する。

千秋を置いて、噴水のある広場まで走る。そのままブレザーを翻すと、隠れていて今までは見えなかったが、ベルトに一〇個ほど一五センチ程度のケースがぶら下げられていた。

そのケースの一つから、黒い、同じく一五センチ程度の棒を取り出した。それをシルディックの鍔の下面にあるくぼみに差し込んだ。ガシャガシャガシャ！ という音がすると同時、シルディックから何かの駆動音がキュイイイイン！ と流れ始めた。

追いついて来た千秋が、

「EASシステム……広範囲の水系魔法を使う気なんだ……」

Embediment Ability Strengthening System、通称EASシステム（大体の人はEASだけで呼ぶ）。具現力を強化するシステムだ。

異空間に魔力変換され発動した魔法と、具現力が現実空間に干渉して具現化した魔法の威力や効果は等しくない。そもそも変換された魔力の量と具現力の高さは等しくないのだ。一〇対一くらいの差はあり、その残った九の魔力も無駄になる。

それを少しでも解決するためにあるのがEASだ。EASの媒体（カードだったりデータチップだったり色々とある）をトライデントにローディングによって具現力を強化し、異空間に発動されている魔法を本来よりも現実空間に具現化させる、少しでも変換された魔力量と具現力の高さの差を縮める。これによって魔法の威力も効果も、発動時間も範囲も格段に変わる。

しかし、限界はある。

平均的に強化出来るのは一〇対一から、一〇対四か五までだ。世の中には一〇対六やら七、もっと言えば八まで強化出来る術者もいるにはいるが、それは一握り程度しかない。そんな天才が何人も何十人もいては、世の魔導戦士達は核兵器の次に危険な存在と化してしまう。

まあ、世界というのはどうもそこまで人間には甘くないらしいが。「おらああああああああッッ!!」

思いきりシルデイクの刀身を地面に突き刺すと、その周りに魔法陣が浮かんだ。段々大きくなる魔法陣は、蒼夜を囲む大きさになった。

視界の端でポウ、と何かが光った。

見ると、そちらにも同じような魔法陣が浮かび、あちらこちらに浮かんでいく。

瞬間、その魔法陣すべてから水が噴き出した。雲もないのに雨が降ったラインズの町の家々は、次々に鎮火していく。

「あ、アンタら……魔法使いだったのか……？」

と、町人の一人が言った。蒼夜はどうでもいいらしく、

「千秋は違う。おい、町長は家にいるのか？」

「いると思うけど……」

「分かった。行くぞ千秋」

「う、うん……」

二人と一振りの大剣は、町長の家に向かって行った。

町長の家は特に燃えていた様子も無く、全くの無傷だった。

蒼夜は門の鐘を鳴らすと、誰かが出てくるのを待たずに中に入った。邸の扉を開け、勝手に中に入る。

入り口から見える、二階へと続く階段の上に町長は座っていた。「町長、何があったんです？」

「あ、ああ…… S G S の…… そちらは……？」

蒼夜は黒龍のこと、白銀の遺跡のことを手短に説明した。

「なるほど、黒龍^{ヘイロン}が……。わざわざありがとうございます」

「いや、さつさとこいつをもとの世界まで帰さなきゃならないんでやっただけですよ」

千秋を指差して言った。

「それで…… 山賊が来たんですね？」

「はい…… 人を引き渡せと」

「人？」

「連中が言っていた特徴から言つて、おそらくあなた方でしょう。とはいえ、調査に行かれていたあなた方を渡せと言われてもどうしようもありません」

蒼夜達を責めている様子は無い。単純に絶望しているだけのようだ。

「ここに入ったのは見ても出たのは見てなかった、って事が……。被害は家だけですか？」

「いえ、美少女と男性四、五人が人質に連れて行かれました。セシアと孫もその中に……」

セシアはともかく、町長の孫も美少女だったらしいことはさておき、面倒なことになった、と蒼夜は心の中で呟く。

山賊自体は魔力滅殺と大柄な男に気をつけさえすれば、特別手こずるとは思っていない。だが人質が取られて、それを無視してまで戦えるほど冷酷になれるような出来た人間じゃないことは蒼夜が一番理解していた。

第一山賊達の目的は確実に千秋だ。人質がいる上に彼女まで守って戦え、というのはかなり酷な状況だ。

千秋は蒼夜から見てもかなりの美少女だろう。栗色より少し薄いくらいの長髪が、風になびくたび、その碧眼が光に照らされるたびに見とれてしまうほどには（何回もちらちらと反射的に向く蒼夜の視線に千秋は気付かなかったようだが）。

あのと看くわした山賊達が目的にしていたのはそれだ。スフィリアだろうと他の異世界だろうと、どこの世界だって貴族や金持ちに千秋は売ろうと思えば相当な高値がつくだろう。が、それが山賊達の目的だったのは、おそらくあの時までだ。

（千秋のあの力……か。シルディックが見た限りじゃ、魔法じゃないらしいけど……）

契約型のトライデントとその契約者は、頭の中で会話が出来る。

全く説明はされていないが、何らかのつながりがそれを可能にしている、と解釈されているようだ。

その時に蒼夜は、シルディックから千秋の力のことを聞いた。エアリアル

もっとも、魔法以外の何か、ということ以外は分かっていないが、少なくとも人体実験でもやっているような違法な研究機関に売ろうとすれば、貴族や金持ち以上が出す以上の値段で買ってくれるだろう。

（……それだけはさせられねえな）

もしもそんなことを許せば、千秋が何をされるか分からない。身体中を、頭の中を、精神を掻き回され、また会うような機会でもあれば、そうとう酷い状態になっているに違いない。

正直、あの時守れなかったからこの娘はこうなってしまった、なんて思いするのは寢覚めが悪いどころの話ではない。

こちら、と千秋の方を見る。多少なりとも自分が狙われていることを自覚しているのか、俯きながら少し震えていた。

口からため息がこぼれた。

（どんな力があつたって、やっぱり女の子だしな……怖いもんは恐い、か。狙ってくる相手が悪ければ尚更）

「……町長、今から山賊達の住処に忍び込んで人質達を助けて来ます。千秋をお願い出来ますか？」

「ちよつ、蒼夜君！？」

ハッと顔を上げた千秋など無視して話を進める。

「ぶつちやけ、いくら俺でも人質がいる中じゃ戦えない。もうすぐ

夜だ、その内に忍び込んでパパッと助けてくればあとは連中を倒すだけ。黒龍の問題はその後だ」

「待って蒼夜君！ 一人で行くなんて……」

「潜入するのは施設破壊でもない限り単独の方がやりやすいんだよ」

「潜入はどうか知らないけど、蒼夜君一人で人質の人達全員を守りきれの！？」

「む」

ここまで頭が回ったとは……と心底感心した。

「今絶対失礼なこと考えたよね？」

「……考えてにや、ない」

「噛んで言われても説得力無いよっ！」

「あー、もうとにかく！ それで行くしか無いだろ！」

「町の人達に協力してもらえば……」

「町の連中はとづくに諦めてるから、今まで抵抗しなかったんだろ
うが。どうせ連中の新式魔法に歯が立たなかったんだろ。大抵の人間って奴は、圧倒的な戦力や力を見せつけられれば戦うのを止めるんだ」

「そうですね……私達は山賊達の魔法の前に屈しました。最初だけですよ、立ち向かっていたのは。でも、やはり人間とは弱い物ですね。勝てる確率が全くないと、一時でも頭で考えてしまえば何の根拠が無くても確実に、絶対に勝てないと思ってしまう。そうして戦いを放棄してしまう……」

「あ……」

本来なら、そんな町人達に対して怒りを見せなければならないの
だろう。だが、そんな事出来るはずも無かった。

——だって、私も同じだから……。

「しかし……私も今から行くのは反対です」

「町長？」

「黒龍が活動しているというなら、夜に行くのは危険過ぎます。今のスフィーリアの夜は黒龍の世界です。夜に行動を起こすのは……」
「しかし……！」

「それによく考えてみてください。夜だから行動を起こさないというのも一手ではありませんか？ 夜に潜入してくる、というのは向こうも考える可能性はあると思います」

「それは……そうですね」

「私とてみんなと同じ、戦うのを諦めた者ですから偉いことを言う資格が無いのは分かっています。しかし、危険かもしれないところに行こうとしている人を止めないほど堕ちているつもりはありませんよ」

町長は柔らかく微笑んだ。その笑みには自嘲じみたものが混ざっていた。

「今日はここにお泊まりください。町には宿がありますが、今はおそらく無理でしょうから」

「……千秋」

蒼夜は千秋の方を向きなおした。お前はいいのか、と言いたいらしい。

「……いいよ。どうしようもない、し」

「……そうか。じゃあ、お世話になります」

* * *

スフィーリアの時間帯でもう九時を迎える頃、千秋は町長の邸の一室にあるベッドの上に座りながら、開けた窓から夜空に浮かぶ三日月を眺めていた。

「今向こうはどのくらいの時間かな……」

スフィーリアにとっての一時間は地球にとっての五時間。一日は、

五日。一週間は一ヶ月と四、五日。こっちに來た時の地球の時間は午後六時頃だったらしいが、今となっては何時間経ったのかすら分からなかった。

「もう、一日は経っちゃってるよね……」

呟く口からため息がこぼれる。言い訳やら何やらを考える余裕も無く、ボーッとしてしまうほどに頭の中は諦めしか無かった。

空気制御のことを知ってから、周りの同級生は近づかなくなった。それどころか大人達まで。

千秋の両親は優秀な魔導戦士らしく、千秋を産んですぐに外国へ派遣されたらしい。連絡は一週間置きにくるたびに、兄が「まだくたばってないのか」と笑いながら言っていたのは、記憶に新しい。

両親は千秋の力を知らない。兄が知らせていないようだ。何でか聞いたことは何度かあるが、教えてくれたことは無い。まあ、自分のためなのだろう、という解釈はしている。

そもそも中学を、小学校から遠いところを選んでくれたのも兄だった。その辺りなら誰も知らないだろう、ということ。千秋の力自体はその町だけが知っていることだったからだ。

中学からはいろいろやっていた。

どうも運動に関しては覚えが早いらしく、即席でも部活の助っ人が出来ていた。剣道や弓道など、小学校ではやったことも無いスポーツでも、二、三日練習すれば戦力にはなるし、一週間も練習すればエースくらいにだってなれる（戦力やらエースやらは周りの生徒達が言っていたことだが）。

そういえばもうすぐバスケット部が試合だったなあ、などと、正直もうどうでもよくなって來たことをぼんやりと漏らした。

「ん……？」

と、なんとなく違和感を感じた。

窓から入ってくる風の感じが、微妙に変わった。

風が操れるからなのか、肌を流れる風の感覚の乱れが分かる。大抵は人が歩いたりした、本当に微妙な違いなので特に気にもしない

が、乱れ方が違う。一人二人なら全く気にしないが、一〇人もいれば嫌でも気になる。

町長の家の敷地外ではない。敷地内を、一〇人も人間が歩く。どのくらい歩いているのかが分かるだけで、誰なのかを識別することが出来ない千秋は、ベッドから立ち上がり窓から庭をのぞいた。

カキン、という金属と金属の触れる音がした。

「え？」

窓枠に爪のような物が引っかかっていた。さっきまでは無かった物だ。

爪の先には縄がくりつけられ、滑車を通して下にたれている。瞬間、ガラガラガラガラ！と、その滑車が回り始めた。それを千秋が認識すると同時、窓の下から太めの腕が伸びて来た。

ガタン！という音と共に背中に固い痛みが走る。

「うつ……！」

「お前だろう、山賊共の言っていた娘は！」

目を開けると、鬼の形相をした男が目の前にいた。おそらく町人だろう。

「お前らが……お前らがここに来たから、俺の娘はアッ！！」

男が腕を振りかぶる。唐突過ぎて反応出来ない千秋は啞然としていて、抵抗するなんて考えまで回らない。

ダアン！という音が響いた。と、同時、男の身体が後ろに吹っ

飛び、窓から放り投げられた。男の悲鳴が窓の外から聞こえる。

「ったく、何してんだお前。ボーツとしてんじゃねーよ」

ドアの外に蒼夜がいた。

「そ、蒼夜君？」

「魔力弾だから痛みだけだ。殺傷能力は無いぞ」

千秋のそばまで来ると、手を差し伸べて来た。それを掴み起き上がる。

窓から見ると、一〇人ほどの男達が逃げ去っていくのが見えた。が、五人ほど気絶しているらしく、一人一人が誰かしら背負っていた。

「俺のところにも来たから返り討ちにした。無駄なEAS使っちゃったよ」

拳銃状態だとEASのマガジン内の弾丸を使って魔力弾撃つからな、と付け足した。

「えっと……ありがと」

「ん？ ああ。気にすんな」

腰にシルディックを差すと、蒼夜はベッドに座った。その隣に千秋も座る。

よく考えたら、今日は蒼夜に続いてばかりだ。なんとなく悔しさを覚える物の、それ以外に自分が出ることも無い、と諦めた。一分ほどの沈黙が流れた。

「なあ。突然だけどさ」

千秋の方を見ずに、さっき千秋がしていたように夜空を見ながら言った。

「勉強してるなら分かるだろ。古式魔法を発動するにあたって通す流れってやつ」

「……大抵は異空間に干渉する魔力を異空間で変換して発動、具現力で現実空間に具現化する、だよな」

「その異空間ってどんなのか知ってるか？」

「知らない、けど……」

「自分の世界だ」

「え？」

よく意味が分からなかった。

「自分の世界。魔法学的には己の世界って言う。高校から習うことなんだけどな、”この人がいて、この人が友達で、この人が好きで、この人を愛していて、こういう場所で、この場所が好きで——”ッッー感じの、自分視点の自分の中だけの世界。それが魔法を扱う上

で通る異世界の正体」

「えっと……？」

「己の世界って奴は、大きく括れば、スフィériaみたいなものと同じ異世界だ。己の世界だけが特別で、異世界みたいに行くことは出来ない。でも、古式魔法が使える奴の数だけ己の世界ってやつはある。異世界が無数に散らばる一種の宇宙の中にな」

「……………」

「千秋、お前にはそれが無い。いや、あるはずなのに、作れるはずなのに作れてない。だから魔法が使えないんだ。そりゃ、あっても使えない、魔法属性が無い魔力を持つてる奴だっている。でも、多分お前は属性自体はある。魔法が使えるはずなんだ」

「……蒼夜君の言ってる物だったら、私にもある」

「ないね」

即答だった。千秋は思わず蒼夜の方を向かされた。

「いいか。よく聞け」

「己の世界は、逃げてるだけじゃ、誰かが手を差し伸べてくれるのを待ってるだけじゃ出来ないんだよ。それで出来てると思ってる自分の世界はただの幻想だ」

「あ……」

「お前だってもう認めてるはずだ。いや、認めてるのに認めてないフリをしてる。分かってるぜ、お前自分の力が恐いんだろ。その風を操る力が恐いんだろ」

蒼夜は千秋を見つめた。ふざけや茶化しの無い、真剣な表情と瞳が発する声が、千秋を貫く。

「俺はお前がどんな人生送って来たかなんて分かんねーよ。お前の幼馴染みとか家族とかでも無ければ、ずっと一緒にいた訳でもないから。でもその力が恐いのは分かる。誰かを傷つけでもしたんだろ。だからそれにトラウマがある。お前は優し過ぎるから」

「……………」

「でも、なら尚更逃げるな。逃げて逃げて逃げ続けたって、結局それはお前の力だ。ずつついてくるもんだ。逃げは意味が無い。なら立ち向かうしか無い。立ち向かって自分の物にするしかない」

「蒼夜君に……何が分かるの？」

「分かるよ」

「え？」

蒼夜は笑っていた。なんとなく、初めて蒼夜の笑顔を見た気がした。

「お前みたいに力のせいじゃないけどな。前に一度、魔法で失敗してな。小学生くらいの頃だったんだけど、そのせいでいろんな奴を大怪我させた」

蒼夜にはちよつとした魔法の才能があったらしい。特別な物でもない物だった。蒼夜の家、神射家は何かの名門でも、歴史の長い家でもない。極々平凡な家だ。

でも、人間というのは自分の子供に少しでも才能があれば期待する。その子供をその道に進めようとする。それが名門だろうと無名だろうと、だ。

トライデントを与え、魔法の学校に行かせ、魔法の勉強ばかりをさせた。

そんな中で、両親が小学生が使えるはずも無い魔法を使わせようとした。魔導戦士ではなかったから分からなかった、といえば簡単かもしれない。だが、周りには魔法を学んでいる人だっていた。止めたのにやめさせなかった。期待し過ぎて、自分の子供なら出来ると思い過ぎて、前が見えなくなっていたらしい。

結果。魔法を制御出来ずに暴走。暴走した魔法が親や周りにいた人達を襲い、大怪我をさせた。

「それがトラウマになって、しばらく魔法が使えなくなったんだ。また同じようになるのが恐くて、魔法から逃げた。使うのを恐れた。だから、己の世界って奴が壊れた。逃げてるだけだったから」

まあ、昔話は置いて、だ。と続ける。

「結論から言う。魔法って奴は、どんなに辛いことでも、どんなに恐い物にでも、立ち向かえる奴に与えられる物だ。そりゃあ、さすがに死ぬようなところに行け、って訳じゃないけどさ。でも、言われたんだ」

――逃げるな。恐れるな。振り返るのはいい。だが、掴みたい物があるのなら前を向け。

「掴みたい物なんてその時はまだ無かったけど、そういうことじゃない。逃げてるだけじゃ、恐がつてるだけじゃ何も掴めない。そういうことなんだ。ほら、好きな奴には告白しないと、好きだ、って気持ちは伝わらないだろ？ 相手が心を読む力持つてる訳じゃないんだから」

「……………」

ふう、と蒼夜は一息ついた。

ひとまずは言いたいことは言ったらしく、「水道借りていい？」と聞いて来た。承諾を得ると、水道で水を一杯飲んだ。

「……さて、ここからはこんな堅苦しい話じゃなくて、ちょっとだけロマンのある話をしようか」

蒼夜は窓枠に手をかけて、話し始めた。

「さっき、己の世界は大きく括れば異世界と同じだ、って言ったよな」

「……………」

「ってことはさ、今は行けなくても、その内行けるかもしれない。そう思わないか？」

「?」

「何言ってるのか分かんない、って顔だな……。いいか？ 己の世界ってのは自分視点の自分だけの世界なんだぜ？ つまり、こんな偽りだらけの世界じゃない。真実しか無い世界がそこにはあるんだ」

蒼夜の目は輝いていた。まるで夢見る子供みたいに純粋な瞳が、月と星に輝かされていた。

「そりゃ、己の世界に行くって事は、人の心を覗くってことだから良いことじゃない。でも——ワクワクしねえか？ その人が描いた夢が、思いが、何の曇りも無い世界が広がってるんだぜ？ 俺はワクワクして仕様がなない。こんな嘘だらけの世界じゃない、本当しか無い世界がどうなってるのか、気になるだろ！？ 冒険心をくすぐられるじゃねえか！」

無意識なのか、夜中だというのに大声を上げた。そんな蒼夜が面白くて、千秋は思わず吹き出した。

「お、おい。何笑ってんだよ」

「い、いや……だって……あ、あははははは！」

夢見過ぎな電波少年キモイ、だそうです

「それはお前の感想だろうが！ ったく……いちいちどうでもいいところだけ喋り出しやがって」

大きくため息をつく、蒼夜はもう一度笑って、

「でさ、お前はと思う？」

「どう、って？」

「そんな世界に行ったらどう思うかってことだよ」

「あー、なるほど」

しばらく考えると、

「私は……ちょっと恐いかな」

「何で？」

「だって、本当じゃないって事は、知ってる人だったら知りたくないことだって知っちゃうこともあるでしょ？ 残酷な真実だって世の中にはあるし」

「……………」

「でも——」

——楽しそうかもね。

「ッ！！？」

「？ どうしたの？」

「い、いや、何でも無い……」

笑顔を引きつらせながら、顔を真っ赤にしながら目をそらした。千秋の笑顔を見て、一瞬抱きしめたくなっただのは内緒である。

「すー、はー。じゃ、じゃあさ。もしその世界に行けるとしたら、一緒に行こうぜ」

「一緒に？」

「ああ。スフィリアから帰って、また会えるかどうかなんて分かんねーけどさ。行けるとしたら、一緒に。こんなファンタジー信じてるバカ同士って事でさ」

嫌なら断っても良いんですよ？

「お前は黙ってる」

「うん。良いよ？」

「え？」

聞いてなかった。

「だから、その時は一緒に行こう、ってこと」

「あ……、お、おう。じゃあ、約束な」

その時に交わした指切りげんまんは、スフィリアでの一日を綺麗に締めくくった。

少なくとも千秋は、そう感じている。

「私も……行ってみたいな」（後書き）

また台詞多めかも……。

はい。かなり更新が遅くなりました。ごめんなさい。でも某櫻井さんみたいにジューズはおごりません。

今回は最後にちょっと仲直りさせました。前回二人を遮った分厚い壁に大穴を空けられたかなー、とちょっと不安にはなりますが、多分出来たと思います。

次は……予告はしない主義です。

「千秋さんは、意外と正義感は強いみたいですねー」

翌日。あれからは特に何もなく朝を迎えた千秋は、ぼやけた頭のまま窓を開けようとした。

時間はまだまだ五時半。でも基本的に千秋はこの時間帯に起きるので何の問題も無い。問題があるとすれば地球に帰った時生活リズムが崩れている可能性だけだ。

「……………あれ」

ガシャガシャ、と何度か開けようとしてみるも、一ミリたりとも開こうとはしなかった。

「そつえば……………」

『お前の場合、寝ぼけたまま窓でも開けて日を浴びようとするだろ。とりあえず開かないようにしとくぞ』

本当に開けようとしていた。窓自体は防弾仕様らしいので、狙撃自体は多分大丈夫だ、とも言っていたが、狙撃銃とやらがどのくらいの威力か知らない千秋は窓から飛び退いていた。

日を浴びるのはとりあえず諦め、洗面器に向かう。頭が活性化する、とかテレビで見てから、中学二年までしなかった朝すぐの歯磨きを終え、洗顔用の石けんはないらしいので、仕方なく水だけで顔も洗い終える。

帰ったら顔洗つとこ、と適当に考えながら、着替えを始め——
ようとしたが。

「……………そつえば私、学校の制服以外無かった……………」

今はセシアの寝間着を借りている（町長が借してくれた。丁度洗濯して干されていたらしい。町長邸は無傷なので、洗濯物も無傷だった）。服もセシアのを借りれば良いのかもしれないが……………。

「み、ミニスカメイド……………」

なんとなくイメージされる、お金持ちの家にいるようなメイド服ではない。ロングスカートではなく、制服のスカートよりも短そ

うなミニスカートで、ブラウスは何故か肩が出ているというものだ。普通に考えれば可愛いのだろうが、着る人によっては恥ずかしいものかもしれない。

「……はあ。制服着よ」

と、言う訳で、昨日と同じ服を着るはめになった。

……他の服も持っているかも、という可能性には至らない千秋だった。

着替え終えた千秋は、ドアを開けて廊下に出た。

「ああ、美薙月さん。おはようございます」

と、なんとなく見覚えのある男性が階段を上がって来た。

「町長の執事です。夕食の際にお料理をお持ちした」

「あ、あー、そうでした。えっと、おはようございます」

執事はにこりと笑うと、突然難しい顔になってジロジロと見出した。思わず後ずさる。

「えっと……な、何か？」

「あ、いえ。昨日と同じ服な気がして」

「えっと、はい。着替えとかなかったたので仕様がなくて……」

「なんと。それはいけません。着替えの服ならお貸しますよ？」

まだメイド達も二、三人残っていますし」

「ええ！？ で、でもミニスカメイドはちょっと……」

「普通の服もありますか」

「え、そうなんですか！？」

「はい。休みの日は旅行等に行くこともあるようなので」

……よく考えてみれば普通あるよね……、とようやく至った答えだった。

「えと、じゃあお願いします」

「かしこまりました。では、どうぞこちらへ」

執事が二階にある部屋の前に立つと、とんとんとノックをした。

「失礼、だれかいますか？」

すると、中から女性の声が返ってくる。執事が用件を伝えると、きい、とドアが開いた。

「ささ、どうぞ。私は少々離れた辺りに下りますので」

「は、はあ」

（別に普通に廊下にいれば良いんじゃない……）

千秋は中にいたメイドに連れられて中に入る。

普通に更衣室のようで、ロッカーがずらりと並んでいる。ただ気になることといえば、更衣室の奥に置かれた大きめのカーテンで囲われた場所がある。

メイドは楽しそうにその中へと後ろから押して来た。その後ろから、もともといたメイドが二人ついてくる。

少しばかり不安を覚えながらも、カーテンの中に入る。

「うわあ……」

「凄いでしょう？」

そこには大量の服があった。ミニスカメイドはもちろん、チャイナ服やらナース服やら。普通の服もあるが、ぶっちゃけコスプレだらけだった。

「じゃ、おねーさん達がコーディネートしてあげるねー」

「え？ いや、自分で……」

「良いの良いの♪ ささ、服は脱いじゃってねー。選択しておいてあげるから」

「え？ え？ い、いやだから——んにゃ！ ちょ、ぬ、脱ぐなら自分で脱ぎますから……うにゃあ！？ 服脱ぐのにそんなところ触る必要な……って、いつの間にか下着だけ……な、なんですかそのおもちゃを見つけたような笑みは……って、普通に持つてるのコスプレばかりじゃないですか！！ うひゃあ！？ ちょ、ちよつと！？」

「んー♪ あなたスタイル良いわねえ。まだ一五だっけ？ 羨ましいわあ」

「でもこれだけ可愛かったらこれ全部似合いますねー。でも朝食まで時間もないし……これとこれとこれだけでも!」

「あとこれは絶対着せてあげなきゃね！ あ、逃げちゃダメ！ 逃げる……私の百合っ娘としての本能が目覚めちゃうよ？ いろんなもの奪っちゃうよ？」

「そーやくん助けてええええええええええ！ うにや
あああああああああああああああああああ
あああああああ……………」

ちなみに、千秋の叫びは届かなかった。

*
*
*

窓から差し込む光が、今更のように目を突いてくる。気がつけば朝になっていたことに少々嫌気がさす。

蒼夜は徹夜明けだった。SSSとの通信を試みるため、スフィアの異世界間座標を元に異世界間通信術式を作っていたのだ。蒼夜の魔法属性「水」には異空間通信魔法がない。おかげで新式魔法の魔法陣を書かなければならず――。

「ふう……さすがに朝までかかるとは思わなかったな」

まあ、本当ならもっと簡単なものもありますが、異世界間干渉を長時間する場合、術式はややこしい物でないとなかなか出来ませんから。さて、あとはちよつとした仕上げだけです

「分かってるよ……。ただ、一睡もせずに山賊共と戦わなきゃいけないのか。学生には辛い話だな」

その前に、一人で多数を倒そうというのがまず辛い話ですね。数多の主人公達でさえ、一人二人の仲間がいたというのに

「主人公じゃないから仕様がねえ。さて……こつちが気をつけるとしたら、連中のボスとあのマフィアっぽいオツさん。それとあの魔デ
ストロイヤ
力滅殺、くらいか」

魔力滅殺については発動時間さえ与えなければどうにかありません。他に何かあったとしても同じ。やはり第一に気をつけるべきはボスとあの男ですね。ボスは力量が不明ですし、あの男はそれなりの力を持っているようですし

「……状況によったら、アレを使わなきゃかもな……」

一応対人使用は緊急事以外禁じられていますか？

「だから状況によれば、って言っただろ」

蒼夜は手元に置いておいたカップに口を付け、コーヒーを一口飲む。特別甘くした訳でも、ブラックのままな訳でもない味が舌を通り過ぎる。別にコーヒーが好きな訳ではないが、途中で寝ないための策だった。

ふと時計を見ると、そろそろ短針が七に指そうとしている頃だった。

「そろそろ朝飯か。一応術式も完成したし、そろそろ行くかな」

そうですね。あ、そうそう

シルディックはうふふ、と気持ち悪い笑いをこぼしながら、今日の千秋さんには気をつけた方が良くかもしれませんね

「なんだ急に」

いえ別に。ちょっとした可能性を示しただけですよ。ささ、行きましょう行きましょう。わし腹へってしても仕様があらへんでー

「意味分かんねー奴。そしてなんだそのエセ関西弁……」

ドアを開け、廊下に出る。部屋が大きい故に少ない三階なので、すぐ目の前にある階段を下りていき、事前に教えられていたリビングへと向かう。

キィ、と音を立ててドアが開く。

リビング、というにはかなり広い部屋の中には町長が一人いた。

「ああ、SGSの。おはようございます」

「町長ですか。……って、どうしたんです？」

町長の頬やら首やらを、包帯や湿布が覆っていた。

ああ、これですか？ と、苦笑しながら、

「私も昨日町人達に襲われてしまいましたね……。なんとか執事達に助けていただいたのですが……。いや、面目ない。町の長でありながら、町の人々の敵視されるとは」

も、ということは、蒼夜達も襲われたことを知っているようだ。

まあ町長の部屋は蒼夜達の部屋の下階だし、物音、ついでに自分も襲われたとあれば分からないことはないではない。

「えっと、なんかすいません……」

「いえいえ、あなた方のせいではありませんよ。それどころかお客様に手を挙げさせるなど、町長として失格です。申し訳ありません。立ち上がり、深々と頭を下げる。思わず慌てた。

「い、いやいやいや！　頭を上げてください、こっちは全然気にしてないですから！」

「しかし……」

「あ、頭を下げるよりも、これからのことを考えないですよ。それに、謝る謝らないのことで言えば町の人達がするべきですから」

「……そうですね。はい。朝食中にも話しましょうか。まだ女の子の方が来てませんか」

「分かりました。……それにしてもアイツ、まだ寝てんのか？」

「はは、女の子の準備は色々と時間がかかるみたいですよ？」

……現在七時四五分。蒼夜がリビングに来てから四〇分ほど経つと、千秋がようやくやって来た。

「千秋遅いぞ。一応まだ料理は来てないけ、ど……」

ほほう、可愛いですね

千秋は昨日来ていたような服は着ていなかった。

袖にフリル状になっている白いブラウスを着て、胸元には黒いリボン。黒い、肩ひもがフリル状になったジャンパースカート、当然のようにスカートにまであしらわれたフリルが、千秋が歩きたびに揺れる。スカートの下からは、海とかで焼こうとしたこと無いんじ

やないかと思うほどに白い足が真つすぐに伸びていた。

長い髪は首辺りで黒いリボンでまとめられ、フリル同様尻尾のよ
うに揺れている。

「ご、ごごごごごごめん……」

「あ、ああ……」

耳まで真つ赤にした千秋は、俯きながら席につく。蒼夜は蒼夜で、
頬を赤くしながら千秋から目が離れない。

リビングのドアから、ニヤニヤしたメイド三人と、ちょっと赤く
なった執事が入ってくる。料理の乗ったお盆を手に持ちながら、テ
ーブルに歩いていく。

町長が微笑みながら、

「へえ、可愛いですね。あの三人に？」
小さく頷く。

すると、ちょうど町長の目の前に朝食を置いていたメイドの一人
が、

「千秋ちゃん何でも似合うから迷いましたよー。こんな大変な時に
ちよつとアレですけど、楽しんじやいました着せ替え♪」

「私達と同じミニスカメイドも似合ってたけど、死。だ世界。線、
だっけ？ の制服も似合ってたわよねー」

「私はやっぱり男装が……あんな男の子になら、百合な私でも恋し
ても良いですねえ……。いや、いつそのこと私も男になって薔薇と
か……ムフフ」

「アレえ？ 私よりも千秋ちゃんの方が良いのかなあ？」

「何言ってるんですか。私には貴女が一番に決まってますよ？」

「はあ……はいはい、イチヤつくなら部屋でやりなさいよねー。ほ
らほら、町長達が目のやり場困るような濃過ぎるキスとかするなら
もつと部屋に行きなさいよ。私も目のやり場に困るのよ？ それ」

「ぷはあ……あ、ごめんなさいごめんなさい」

「ん……ふう、いいお味でした♪」

そう言いながらメイド二人は本当にどこかに行ってしまった。言

われた通り本当に部屋でイチャつくつもりなのだろうか。

町長はあはは……と苦笑いしながら、

「すいませんね、本当に……。いつもあの二人がいる時は、私もよく目のやり場に困ってます」

「クビとかにはしないんですか……」

「まあ、恋愛は自由ですからね。あれくらいじゃクビには出来ません」

蒼夜はため息をついた。

「まあ、何はともあれだ。いただきます」
『いただきます』

「さて、どうしようか」

朝食を食べ始めて一〇分ほど続いた他愛のない話を、蒼夜は終わらせた。

「どうするって……」

「まずは……人質を解放する、といった方向の方が良いのではないのでしょうか。私が言うのもなんですが、その方があなた方も動きやすくなると思いますし」

と、蒼夜が口を開こうとすると、

「でも一人で潜入する、っていうのは絶対ダメだよ？」

一瞬キョトンとした。

「って、じゃあどうすんだよ？」

「潜入するなら私も行く。戦えないって言っても、エアリアル空気制御は使えるもん。幼稚園からの力だし、極限状態じゃなければ暴走させずに扱える。私だって自分の身くらい守れるよ？」

「あ、あのなあ……」

どうも多少なりとも吹っ切ったらしい千秋は、やけに生き生きとしていた。まあ、彼女自身にはそんな自覚は無いようだが。
(シルディックが言ってた気をつけろ、ってのはこれか？)

それにしても、町人に突然襲われても反応出来ずにいた千秋が、山賊達に対して同じようなことにならないと言えるのだろうか。いや、少なくとも蒼夜からすれば絶対言えない。そもそも千秋に潜入任務など出来るのか。

「蒼夜君、でしたか。私の人生経験からして、君みたいなタイプでは絶対に彼女を言い負かせられませんし、彼女みたいな娘は、絶対に今の言葉を貫き通しますよ？」

「うぐっ……」

うんうん、と千秋は頷いている。

「で、でも。その空気制御とやらが使えるとしてもだ。魔法が使えない奴を連れてく訳には……」

「ちなみに。我々も山賊共の隠れ家は知りませんよ？」

「んなっ!？」

「調べる機会もチャンスもありませんでしたからねえ」

ちよつとばかり町長が策士に見えて来た蒼夜だった。

「じゃあどうすんだよ……」

「今日山賊達が来ると思います。その時にでも、掴まるなり逆にボコボコにして場所を吐かせるなりすれば良いのではないですか？」

「しかし、監視されている可能性があるのに返り討ちは……」

「いえ、その心配はありません。連中の数はそれほどものでもないですからね。我々が勝てないのは連中に魔法があるから、という言い訳が立ってしまいくらいには」

町長は一問開けて続ける。

「山賊共は知らないでしょうが、この町には半径三百キロ内のライonzに体する視線を感知する巨大な魔法陣のようなものが地下にあります。ほぼ毎回ここに来る際は見張りなどいません。先日、あなた方を捜しに来た連中の時も見張りはありませんでした」

「なるほど……」

確かに現代の魔法にもそう言ったものは存在している。新式魔法は当然、古式魔法だと属性にもよるが、『風』や『感』などがあ

る。

魔法陣というのだから、新式魔法に近いものなのだろう。感知範囲が三〇〇キロというと、相当巨大な魔法陣があるに違いない。さすがは遺跡だらけの世界、といったところか。

「でも返り討ちにするにしても、確実に返り討たないですわ……。それに時間がかかり過ぎててもマズいな。いくら数が少ないからって、誰も隠れ家に残さないなんてことはさすがに無いでしょうから。少なくともボスは。あとは尋問と……場所にもよるけど、隠れ家まで行く時間か。……相当忙しいことになりそうだ」

隠れ家まで行き、助けるのが遅ければ確実に人質達に害が及ぶ。

それがどんなものであれ、避けなければならぬ。

千秋は朝食を食べ終わると、ふう、と一息ついた。

「ところで……山賊さん達が来るまではどうするの？」

「ん、どうするか……。入り口付近で待ち伏せとかしても良いけど、町でもまわる……はダメか。昨日のこともあるしな」

なら、この邸で待っていても良いのでは？ ウォーター・スライドもあることですし、連中が来た時に現場に行くのは十分早いと思います。視線感知の術式があるそうですし、確実に間に合うと思いますよ

「私は全く構いませんよ。どうぞごゆっくり」

蒼夜はしばらく考え込み、

「じゃあ……ちよつとばかりのんびりさせていただきます」

* * *

二人はそれぞれの部屋で歯を磨き終わると、二人とも千秋の部屋でベッドに座っていた。

「へえ……そいつは大変だったな……」

「うん……あのメイドさん達すごい強引で……抵抗しようにも抵抗出来ずにいろんな服着せられた……」

蒼夜には言っていないが、ぶつちゃけ二、三回ほど貞操の危機に陥った。さすがにその時はまだ勝機を保っていた二人もしくは一人が止めてくれたが、止めてくれなければどうなっていたか……と考えるとももの凄く恐い。

そういえば、蒼夜のことを彼氏だ恋人だと勘違いしていたようだが、勢いに流されて否定することも出来なかった。肯定も出来なかったが。

「それにしても……」

蒼夜は千秋をちらりと見る。

はつきり言つて可愛い。可愛過ぎる。服が変わっただけで美少女が更に美少女になった。これでもっと出会い方が良ければ一目惚れしていたかもしれない、と思うほどに。

さすがにもう慣れたのか、それとも忘れてるだけなのか、千秋はもう平然とその姿で歩き回っている。まあ邸内だから、というのものもあるかもしれないが。

蒼夜の視線に気付いたのか、「どうしたの？」と、首を傾げて来た。

ふあさり、と流れる髪から何だか良い匂いが流れて来ている気がした。

「い、いや……なんでもない」

「？　そういえば、蒼夜君それ昨日と同じ服？」

「あ、ああ。着替え持つてなかったからな……出来れば着替えたかったけど、どうせ今日帰るんだし良いかって思つて」

「ふうん……でもやつぱり汚れてるね、土とかで」

「そりゃ、戦つたり倒れたり遺跡行つたりしたからな。汚れるさ」

「……蒼夜君も執事さんに服借りたら？」

「いいよ、別に。なんか面倒だし」

「私と違って執事さんのなんだから別に危険は無いと思うけどなあ……」

「そついう問題じゃねーの。可能性の問題なの」

「可能性？」

——いや、だってあのメイド三連星なら普通に着替え中とかで乱入して来そうだし……。

……想像したら寒気がした。

「と、とにかく。俺はこのままでいいから」

「……つまんないの」

千秋が不満そうな顔をしたが、蒼夜は無視しておく。

……数秒、二人は何も話さずただボーッとしていた。

すると、蒼夜はそういえば、と話をきりだした。

「さっき言ってた空気制御、ってどういう原理なんだ？」

「え？」

「いや、最初見た時一応、シルディックからトライデント視点で見たことを聞いたんだけど、よく分かんなくって……あ」

しまった、と蒼夜は思った。

千秋は自分の力、空気制御に対してトラウマを持っている。何があつたかなんて蒼夜には当然分らないが、彼女には辛いことのはずだ。それが直接そのことに触れている訳ではなくても。

そんなことを気にしているのを知ってか知らずか、千秋は首を傾げながら、

「？ 蒼夜君？」

「え、あ、いや、言いたくないならいいから……」

「別に言いたくないなんて言ってないけど……どうしたの？」

蒼夜の顔を覗き込む彼女の表情は、ちょっと心配が滲むだけだった。特に何かを気にしているような感じは無い。

「いや、だってお前、空気制御のことで気にしてたみたいだし……」

暗い顔されると気にしちゃうってことです

「お前はいちいち余計なこと言っなっ！」

「あははははっ……！」

「？ 千秋、どうした？」

「だ、だって……！ あはははっ！」

どうも押さえ様の無い笑いがこみ上げて来たらしい千秋は、腹を押さえながら、ベッドで悶えていた。

対する蒼夜は何が何だか分からず頭の上に？をうかべるばかりで、まさかとうとう頭が壊れたのか！？」と本気で心配している。

しばらくして、ようやく落ち着いて来た千秋は、ベッドから起き上がる。頬は紅潮し、ちよっと涙目になっているが、まだ口元はつり上がっている。

千秋は、まだ肩で息をしながら、

「ご、ごめんごめん。だって、今更過ぎてつい、ね」

「今更って……」

「だって昨日いろいろ言って来たくせに、今更気にするとかさ。なんか蒼夜君らしくないとなーって。まあ、今までのイメージから言ってるんだけど」

「今までのイメージってなんだよ」

「クール気取ってる無意識なカッコ付け」

「んなっ！？」

かなりの的を射ていますね

「でも、優しい」

「！？」

蒼夜は今顔が赤い自信があった。

「なんでもかんでも自分で背負おうとして、なんだか生き急いでる男の子。人を立ち直らせようと思えば、悪役を全面的に引き受けるし、誰かを守ろうと思えば、その人が戦える力を持っていても戦わずに一人で突っ込んでいく。悪く言えば無謀だよな」

千秋は恥ずかしげも無く淡々と続ける。

「だから今回だって一人で潜入するとか言っし、相手のトラウマを

思いきり^{えぐ}決りながらも、なんだかんだで優しくなる。克服させようとする。一種のお人好しだよねー」

だから今更でも気にするんでしょうが、でもその精神を完璧に貫くならそこまで気にしないはず

「そうそう。だからちよつと中途半端」

「お前らなあ……好き勝手言いやがって」

そう言いながらも蒼夜の口元は緩んでいた。半ば呆れて、半ば嬉しいようなこの気持ちはなんなのか。

「まあいいや。で、^{エアリアル}空気制御のことだっけ？」

「いいのかよ……。ああ。教えてくれるなら教えてくれ」

「うん。……って言っても、私もちよつとしか分からないんだけど……」

空気制御。

魔力を空気に干渉させ、融合。言ってみれば自分の身体の一部みたいな物にし、自由自在に操る力。

力の発動時に術式の鎖が術者の周りに存在していない上に、具現力も使用されていないことから、魔法とは全く違うものとされている。

その前に大前提として、魔力というのは異空間に干渉する力である。つまり本来ならば現実空間に干渉するはずが無いのだ。だが空気制御を使用する場合、何故か魔力は空気に、現実空間に干渉している。それが一番の謎だ。

以前空気制御について調べた医者や科学者は、空気制御使用者の魔力は、何かを通して現実空間に干渉出来るように変換している、使用者の魔力は他の人々物とは根本から異なる、など様々な説をあげているようだ。

話を戻そう。

空気制御によって、使用者、つまり千秋の魔力が干渉した空気はエメラルドグリーンに輝く風となり、千秋の思いのままとなるとされている。

あくまで現状の情報からで言える話だが、力の暴走時のような鋭い刃にする事も出来れば、分厚い空気の壁を作ること出来る。下手すれば真空すら作ることが出来るかもしれない。

極論を言えば、空気さえあれば千秋には最強の矛と盾がある、ということになるのだ。

「ふうん。とにかく、ばらまかれた千秋の魔力が空気と融合して、それがあの緑色の風になる、と」

「まあ、分かる範囲で言えばそんな感じ」

それにしても、確かに魔導戦士の中には特殊な力を持った人もいますが、自然の中の物を操るといった物は聞いたことがありませんね

基本的に言われる異能持ちというのは、ある種の超能力のような物だ。「動物と会話が出来る」や、「透視が出来る」などを言う。

しかし、世界を管理している”世紀の歯車”のデータベースには、自然を操る、つまり千秋の「風を操る」や、火を操る雷を操るという異能は存在しない。そもそも魔法で操っているのだ、そんな異能が存在する必要は無いといえない。

「その辺りの詮索はよそうぜ。今やったって仕様がないことだし、専門家が解き明かしきれなかったんだ、俺達が考えても分かることじゃねーよ」

それもそうですな

「今は山賊さんと黒龍のこと、だね」

ふう、と千秋は一息つく。長々と喋ったら喉が渴いた。立ち上がり冷蔵庫の中の麦茶（遺跡世界でも冷蔵庫くらいある）を口に含む。冷たい麦茶が喉を通り潤してくれる感覚が、なんとなく気持ちいい。

「ん？」

蒼夜がドアの方に視線を向ける。

部屋の外からどたとどと、誰かが走る音がする。

蒼夜は一瞬身構えたが、ドアを開けて入って来たのはさっきの執事だった。

「視線感知の魔法陣が反応しました。ラインズに山賊達が来ます！」

* * *

千秋と蒼夜は、ウォーター・スライドで入り口付近まで行く。ただし、家の陰に隠れるところにだが。

入り口付近には、山賊達が約一〇人ほどいた。さらに彼らが囲む中心に、ライオンが五匹くらい入りそうな檻が置かれていた。もちろん、その中には人質が数人入れられている。

「昨日話した二人を連れてくればこの連中はもちろん、まだ我らのアジトに閉じ込めている連中も帰してやる！ さあ、さっさと連れてこい！！」

町人達は、何人が走り出していった。おそらく町長の家にも向かったのだろう。

自分でもよく分からないが、不思議と落ち着いていられる千秋は、蒼夜に視線だけを向け、

「（蒼夜君、どうする？）」

「（なんとかして人質を解放、あの連中を倒して隠れ家の場所を吐かせるに決まってるだろ）」

「（人質の人達はどうやって？）」

「（弱いウォーター・スライドをあの檻にかけて、町の連中側に檻を滑らせる。その時に檻も壊せばいい。山賊共は楽勝だろ。見たところあのオツさんもないみたいだしな）」

視線を戻すと、山賊達は人質に悪い笑みを浮かべながら話しかけていたり、イライラしているのか足で地面をせわしく叩いたり、魔法陣の書いてある紙を弄んでいたりと、誰一人同じことをしないで時間をつぶしている。

それから三〇秒ほど経つと、さっきから地面を足で叩いていた男がため息をつき、「おい、まだなのか！」と、苛立った声をあげた。

それを合図にしたかのように、

「こ、こら待ちなさい！」

そんな女性の声が聞こえた。すると、タタタタタ、と小さい走る音がいくつも聞こえて来た。

がしつ、と六人の子供達が、声をあげた男の足にしがみついた。

「（オイオイ、マジかよ……）」

そう漏らす蒼夜と、周りにいる大人達の気持ちを知ってか知らずか、子供達は「セシアねえちゃんをかえして！」「セシアねえちゃんをかえせよ！」「おねえちゃんを返してください！」「かつてにおれたちのセシアねえちゃんとなつてくなよお！」「セシアさんをかえせ！」「セシアおねえちゃんをかえしてよう」と、何度も何度も言い続けた。

セシア。町長の家のメイドさん。小さい頃に両親を亡くしてしまい町長に引き取られたらしい女性。

ありがちな設定だ。だが、このスフィリアという世界はありがちな設定だらけなのだ。そんな女性が子供に好かれていてもおかしくはない。

「（あ……！）」

山賊の男は鬱陶^{うつとう}しそうにその子供達を蹴り跳ばした。

「邪魔なんだよ、さっさとどっか行け」

「うるさい！ セシアねえちゃんをかえせ！」「そうだそうだ！」

「いったあい」「だいじょーぶ？」「このやろっ、やったなあっ！」

「いたいじゃないですかっ」

ご両親の声だろっか、静止の聲が飛び交う中、その子供達は躊躇^{ためら}いも無く再び山賊の足にしがみつき、噛み付いたり蹴ったりした。した。

山賊の男は「ちっ」と舌打ちすると、もう一度その子供達を今度は思いきり蹴り跳ばす。子供達が一〇メートルほど飛んで転がった。それを見ながら男は懷から一枚、手くらいの大きさの紙を取り出した。

「（な……！ アイツ！）」

「ウゼえんだよ！」

コオオオオ、とその紙に赤い粒子が集まっていく。その赤い粒子は、オレンジ色に輝く火の玉へと姿を成していった。

この赤い粒子は火の自然力である。アレックスのモーニングスターに刻まれた術式などは、総合的な（火だろうが水だろうが関係なく）自然力を扱うが、こうした火を操るなら火の自然力だけを扱うのだ。

全く状況を理解していない子供達だったが、自分たちが危険だということとは理解したのか、悲鳴を上げ始めた。だが逃げ出さない。足が固まっているかのように動かない。逃げ出せないのだ。

ドオオオン！！ と、爆音がライنزの町に響いた。

大人達の悲鳴が上がる。山賊達の使う新式魔法の魔法陣には、非殺傷設定を施していないことをしているのだ。

「ったく、無駄な魔法使っちゃったぜ」

「ははっ、バカだなあお前。子供なんか適当に脅しやあ逃げてくつてのによ」

「面倒だったんだよ、あーあ、もったいねえ。またコピーすっかなあ」

などと話している山賊達の目の前の煙が晴れた。というより、

「（くそっ……！！ アイツらぁ……！！ って、あれ？ 千秋？

おい、どこに——）」

煙が吹き飛ばされた。

ブワッ！！ と自分たちの目の前から吹きよせた突風が、山賊達の身体を浮かして後方に大きく吹き飛ばす。「ぐえっ！？」と情けない声を漏らしながらちようどそこにあつた気に激突した。山賊達は地面を転がりながら痛みにも耐える。

蒼夜は思わず頭を抱えた。

こんなことが出来るのはさっきまで目の前にいた奴しかないし、
見覚えのある容姿をしている奴が今子供達の前にいる。

「何を……何をしてるんですか!!」

栗色より少し薄いくらいの、腰まである長髪。美少女としか言い
ようの無い整った顔立ちと、エメラルドのように輝く碧眼。

さっきまで蒼夜と共に物陰に隠れていた少女、美^{みなつき}薙月千秋だっ
た。

(………………。あれ？ 私何
してるんだろ?)

これが俗にいう身体が勝手に動いた、というやつなのか。何か考
えるより先に、脊髄反射のごとく身体がいつの間にかここまで来て
いた。

良く言えば勇気がある。悪く言えばただの考え無し、バカである。

「何だお前は!？」

「ん？ オイ、この女……」

「ああ……間違いねえ。アレックスさんの言ってた女だ」

山賊達は各々の獲物を取り出す。相変わらず一人一人の持つ武器
は違う。

「おい女」

「は、はいっ!？」

「もう一人、男がいたはずだ。そいつはどうした」

「つまりは蒼夜のことか。」

「い、今はここにはいません!」

「じゃあどこに行った」

「えっと、は、白銀の遺跡!」

「白銀の遺跡だあ? なんでんなどこ行くんだよ?」

「こ、黒龍が出た、って言うから調査に……」

「黒龍う? ぶっはははははははははは!! 何を言い出すかと思

え、伝説上の生き物調べに女を置いていったのか？ こりや傑作！」

「まあどうでもいいだろ。女は出来る限り無傷で、男は何してもいいってことは、優先順位はこの女の方が高いってことだ。男の方は別にどうでもいいのかもしれないぜ？」

「んじゃ、とつとと捕まえて帰ろーぜー。早く可愛い娘達に囲まれたいー」

山賊達はゆつくりとこちらに近づいてくる。

対して千秋は、スカートにしがみついてくる子供達のせいで動けない。

「……………」

ゆつくりと、子供たちの手をどける。顔だけ子供たちに向けて、にこりと笑顔を向け、再び山賊たちに戻す。

……なんだかムカついて来た。

昔感じていたような感情が心の奥からこみ上げてくる。

当てはめるなら、後ろの子供達がいじめられてる子たちで、目の前の山賊たちがいじめっ子、といったところだろうか。

そう、思ったら。さっきと同様に身体が勝手に動いた。

（魔力を思ふ場所に散布し空気に干渉させ、自分の思ふ通りに！）

腕を思いきり振った。それだけで風は飛ぶ。

ブワッ！！ と突風が再び何人かの山賊たちを襲う。それだけで、まるでそちらに重力が働いているかのように身体が押し出された。

「くっ…………このクソアマアッ！！ 逃げるなら今のうちだぜ！？」

「そんな負け惜しみで私が逃げるわけないでしょうが！ 私は貴方たちみたいな人質を取らないと優位に立ってる気になれない人がいっちばん！ いっちばん嫌いなんだからアッ！！」

風を手に集め、竹刀の形にする。キツ、と山賊の一人を睨みながら中段の構えをとった。剣道は部活の助っ人でやったことがある。

「こいつ、調子乗ってんじゃねえぞコラあ！！」

「ッ！！」

カットラスを持った山賊が千秋に向かって走り出すと同時、思いきり踏み込んだ千秋が風の竹刀を思いきり振るう。反応出来なかった山賊は思いきり面をくらい、その場に倒れた。

「チッ……仕方ない、無傷で捕らえるのは断念する！ あれをやるぞ！」

山賊の誰かがそう叫ぶと、まだ残っている一〇人ほどの山賊たちの内七人が、自分たちの持つ武器を掲げた。剣身、刀身、穂先などの表面に、薄い紫色の文字が浮かぶ。部隊型術式だ。

掲げられた武器の中心で、淡く紫色に光る粒子が集まり球体を成していく。

残った三人は発動までの時間稼ぎのようで、千秋に向かって来た。（そ、蒼夜君はどうして何もしてくれないの！？）

敵の攻撃を付け焼き刃の太刀筋で弾きながら、さつきまで自分のいた建物の影を思い出す。

いや、来ない理由は大体分かっている。人質解放のタイミングでも計っているのだろう。今七人は部隊型術式を構築中で動けないし、残りの三人は時間稼ぎのために千秋とチャンバラ中だ。あと少し耐えれば蒼夜が人質を解放し、倒してくれるはず。

「ああもう！ 面面メーン！！」

バシバシバシ！ と三人の頭を思いきり殴る。更に、痛さのあまり怯んだ三人の胴に一撃。殴ると同時に突風を起こして吹き飛ばした。入り口の壁に三人とも思いきり衝突し、気絶する。

ハッとして残った七人の山賊たちの方を見た。掲げられた武器の中心では、変わらず粒子が集まり球体になっていく。さつき見たときはバスケットボール程度だったのが、今ではバランスボールほどの大きさになっている。自然力で構成されたエネルギーの塊は、更に巨大化し、半径一メートルほどの球体と化した。

山賊の一人が叫ぶ。

「一応非殺傷設定を急遽追加したが……当たれば痛いぞ！ 食らえ

マテリアル・バスター
！ 集束魔鋼弾！！》

全員が掲げていた武器を千秋に向ける。それについていくように球体が千秋に向けられた。

避けられない。

それは間に合わないという意味と、後ろにはラインズの人々がいるという意味を持っている。

ならば耐えるしかない。千秋は正面に魔力を集中し、時間が許す限り、なるべく大きく分厚いエメラルドグリーンの壁を造り出す。

出来たのは精々千秋から五、六〇センチ程度をカバー出来る壁だった。

ズドオオオオオオオオン！！ と、集束された自然力が放出された。まるでビームのような極太のそれは、千秋に向かって突っ込んでくる。

魔力と自然力は、水と油のように混ざりあわない関係だ。まるで同極の磁石同士のように反発しあう。壁が自然力を受け止める瞬間、まるで突進してくる象を止めようとしているのではないかと思うほど強烈な衝撃が襲った。足が地面を滑って少し後ろに下がるが、壁はまだ健在だ。自然力が壁を抉り、壁が自然力を押し返す。そんな攻防戦が壁の向こうで行われている。

千秋も千秋で大変だった。決りとられていく壁を修復し、全体の維持に力をまわし、壁が負ける前に自分が押し負けないように頑張るという並列行動。

「くっ……！」

と、視界の端で何かが飛び出した。

「オラああああああああああああ！！」

黒髪の少年、蒼夜だ。

「何！？」

山賊たちが驚愕の表情を浮かべる中、蒼夜は山賊たちの後ろをすり抜け、人質たちの入った檻に微弱なウォーター・スライドをかけた。スケートでもするように滑りながら、檻を思いきり蹴って町人

側に滑らせる。

「蒼夜君！」

「ちよつと待つてろ！ 今すぐ連中を！！」

「ちつ……出力を最大にする！！」

山賊たちがそれぞれの武器の柄を軽くひねった。と同時に、刻まれている術式が更に光を増した。

瞬間、ドン！！と、集束魔鋼弾威力も勢いも太さも倍加した。

ホースから勢い良く出る水を何かにぶつけると、水が撒き散らされるように、集束魔鋼弾があらぬ方向へと飛んでいく。それらはライズを囲む壁に、家々に、地面にと様々な物を抉っていく。

「うおっ！？」と、蒼夜が自分の元に來た流れ弾を、後ろに飛び下がりながら避ける。

が、千秋にはもうそれを気にするほどの余裕は無かった。

さつきから壁の修復はまだ問題ない。壁の維持はギリギリだがまだ大丈夫だ。だが、ずるずると、足が後ろに滑っていく。壁を押さえている腕がきしんでくる。壁は大丈夫でも千秋こうちが大丈夫じゃなかった。

だというのに、どうも神様というのは残酷らしい。

一本の光が、千秋の後方に飛んでいった。それは弧を描くように地面へと向かって落ちていく。町人たちがいるというのに、だ。

それを千秋は左手で風を飛ばし、弾道を無理矢理変えさせた。

無意識、反射行動と言ってもいいくらいだった。

「バカっ、千秋！！」

蒼夜のその声が引き金になったかのように、グン！と右手が肩が外れるかと思うほど引つ張られるように後ろに持っていかれた。と、同時に壁が壊れた。

ブワッ！！と、風が周りに撒き散らされる。

目の前が淡い紫色に染まった。

「しま……っ！」

千秋の身体は、淡い紫色の光に飲み込まれていった。

「千秋さんは、意外と正義感は強いみたいですねー」（後書き）

ふう……全開より早めの更新です。

かなりの長時間を使って修正しました。無かったシーンや、あったシーンも何かしら変わっていると思います。それが良い方に少しでも向いていれば良いな、と思います。

ご感想がありましたら、どうぞ、待ってます。

「まさかの変わり具合にびっくりだ」

千秋が集束魔鋼弾に飲み込まれた瞬間、スタングレネードでも投げられたのかの思うほどに強烈な閃光が辺りを飲み込んだ。

蒼夜や町人たち、はてには山賊たちすらも小さく悲鳴を上げる。どうも集束魔鋼弾による影響ではないらしく、山賊たちはもちろん蒼夜と町人たちも目に痛みを覚えた。

閃光が止むと、集束魔鋼弾はもうその場には無かった。代わりに、
「あ、あれ？」

無傷でいる千秋がそこにいた。

周りが啞然とする中、唯一その光の中で何故か目を開けることが出来ていた千秋は、開いた口が閉じずにいた。

千秋ちゃんだったな。よっ、これからよろしく

「……………は？」

目の前の何かが突然喋り出した。

表現するなら……………小型端末だった。携帯とは違う、現代の研究員や発明家などがよく使う小型端末。作業時にさまざまなデータを呼び出す、ちょっとした超小型パソコンのようなものだろうか。それに似たようなものが目の前に浮いていた。

大きさは大体掌サイズ。テニスボールでも持つような感じで持てそうなくらいの大きさだ。形は八角形の左側（千秋から見て）が少し出っ張った感じ。その出っ張った部分を横から見ると、カードでもスライドするような隙間があり、中心にはその白いボディにつけられた、面の大半を占める液晶画面がある。

まあとにかくにも、急展開過ぎてついていけない千秋だった。
「千秋！」

同じく若干ついていけない蒼夜がシルディック片手に叫んだ。

「それは多分お前のトライデントだ！！ さつさと契約しろ！」

「……え？ って、ええ？ わ、私のって……」

ようやく我に返った山賊たちも、

「トライデントだと！？ くそつ、オイ！ 契約する前に捕らえろ！！」

「ええ！？」

「させるか！！」

いつの間にか山賊の目の前にいた蒼夜は、非殺傷設定にされた剣身で思いきり腹を殴りつけた。小さな悲鳴と共に山賊の身体が宙に浮く。

まあ、そういうことだ。さつさと契約して、連中を倒しまおうぜ

「で、でも契約ってどうすれば……？」

なに、俺をウェイクアップしてくればそれで良いよ。後は自動的にやってくれるから

「……そういうもののなの？」

そーゆーもんなの。ほら、単純にアークス・ゼロ、ウェイクアップ、って言えば良いからさ

「えっと……？」

さつさと契約してくれ、と笑いながらアークスは言う。

……本当に全く展開についていけない。突然自分のトライデントだ何だと言われてもしっくりこないし、魔法が使えなければ意味が無いと思う。そもそも今の自分に『己の世界』は存在しているのだろうか。魔法に関しては勉強していたりしたが、トライデントに関しては必要最低限以上はしなかったので、『己の世界』の有無で現れるかどうかなどということは分からない。

しかし、しかしだ。

契約型トライデントが現れたということは、自分は何か、一歩進めたんじゃないだろうか。成長したんじゃないだろうか。

今、魔法が使えるかどうかなんて、本当は些末な問題なのかもしれない。千秋はそう思った。

ただ、今アークスと契約し、戦う覚悟を決めるか、それとも現状の力のままで守れるかどうかも危うい覚悟のまま戦うか。

当然、千秋がどちらを選ぶか、なんて決まっていた。

「アークス・ゼロ、ウェイクアップ！」

カツ、と再び光を放つアークスの上下に、小さな粒子が集まって持ち手が生成される。さらに、四角形の何かがくつつき、その上に三つに分かれた穂先が粒子によって作られる。

いわゆる槍というやつらしい。長さは千秋の身長より五センチくらい長い。持ち手の部分は青というより蒼といったカラーで、中心（液晶画面の辺り）を上から下に白い線が真っすぐと伸びている。穂先の付け根には四角形、あえて言うならひし形が持ち手に平行になるように取り付けられている。その中心には琥珀色の宝石がはめられていた。

ふと全身がやけに暖かくなったかと思うと、肩から足下にかけて白い襟付きのマントが羽織らされていた。これも一応一部らしい。

さあて千秋ちゃん！ イッツ山賊殲滅タイムだ！

「せ、殲滅タイム……？ あ、いや、ちょ、ちよつと待って！ 私魔法の使い方とかよく分かんないんだけど……」

千秋には確かに知識はある。だから歴史やら何やらのことは十二分に理解しているが、そういうのを知ってても、一度も使ったことの無い千秋にはどうやって魔力を異空間で変換し、どうやって具現化させるのかが分からない。というか前述したように『己の世界』があるかどうか微妙だ。

ああ？ ……だったら、とりあえず俺を剣みたいアイツらに向かって振ってくれ
「ええ？」

今回は俺が千秋ちゃんの魔力使って、初期登録されてる魔法使ってやるからさ！ つつても、電撃撃つただけだ

——トライデントってそんなことも出来るんだ……。

そもそもそれは千秋が使ったことになるのか、それともアークスが使ったことになるのか（聞いているとアークスが使っているように聞こえるが）。なんだかそれはそれで重要な気がしたが、今はそんなことも気にしていられない。

「えっと……分かった！ ええいッ！」

と、思いきりアークスその場で振り下ろすと同時、バリバリバリ！！ と、穂先の先端から青白い閃光が山賊たちに向かって飛んでいった。それは山賊の顔面に思いきり命中し、無駄に吹き飛ばしたあげく木に腰から激突させた。

ちなみに、その青白い閃光の通り道に、微妙にはあるが蒼夜がいて首元をかすめかけていたが。

「んなっ！！？」

「あ……」

おっと、悪いな兄ちゃん

「悪いな、じゃねえ！！ あとちよつとで俺に当たるところだっただろうがッ！！」

当たんなかったんだから良いだろー

まあ、当たるよりはマシかもですね

「良くねえから！ マシじゃねえから！ ただの結果論で言うなよ！！ 今めっちゃ恐かったし、当たったら痛いんだ、ぞ！！」

言いながら背後に迫っていた山賊の横っ腹を、ドゴッ！ と、思いきりシルディックで殴りつける。骨とか折れてないと良いなあ……、と心から思う千秋だった。一応、非殺傷設定されているトライデントは、その後の生活に支障が出たり、死ぬような攻撃でも死なないようにされていたりするので、おそらく問題は無いだろうが……殴っているときの音が安心させてくれない。

蒼夜はため息をつく、千秋の方を向いた。

「千秋！ 俺は良いから人質の檻を壊してこい！」

「で、でも……」

「俺は昨日、もう少し多い連中と一人で戦ったのを忘れたのか？」

「……分かった」と一言言つと、躊躇いながら千秋は踵を返し、人質の入った檻へと走っていった。どうもこれ以上言つても無駄だと判断したようだ。

千秋が人質の入った檻の元に行くのを確認すると、ニヤリと笑い、「さて……お前ら覚悟しろよ？」

* * *

アレックス・ジークは、山賊の隠れ家付近でラインズの様子を見ていた。

彼は自分自身に、遠視を可能にする魔法とどんな感知システムにも引つかからない魔法を同時使用している。つまり、ラインズの視線感知術式には感知されていないし、双眼鏡や望遠鏡は使っていない。

確かに、ラインズの視線感知術式は山賊達は知らない。当然ボスのイグリア・ビーストも。しかし、このアレックス・ジークだけは知っていた。

「ふむ。初めてにしてはなかなかいいセンスをしている。あのトライデントも珍しい物のようだが、あの少女はそれ以上に珍しい『異能持ち』のようだ」

彼が言っているのは空気制御のことではない。いや、厳密に言えばそれも含まれてはいるが、彼の目には、もっと別の物が視えている。

たった一撃ではあるが、このアレックス・ジークという男はそれだけで、千秋のことを幾分か理解していた。

「ふむ。才能……という奴か。やはりここに来て正解だったかもしれん。磨けばダイヤモンドのごとく光る卵を見つけてしまった」

アレックスは不敵な笑みを浮かべながら、ライنزから視線を移した。

「ふむ……あれは——なるほど。あちらが今回の本命、という訳だ」
隠れ家への道を歩きながら、アレックスは愉快そうに視線を前に戻す。

彼が見ていた先では、黒龍が叫びをあげていた。

* * *

「あれか……」

千秋と蒼夜は、スフィériaに来た時にたどり着いた山の、奥に来ていた。

山賊達を倒した千秋達は、蒼夜が山賊達から聞き出した山賊達の隠れ家に向かっていた。（聞きだし方については、千秋は蒼夜が山賊と共にこもった部屋の外にいた上に、自分の部屋にいたので分からない。相当凄い物だったらしく、警護していたメイドや執事達は蒼白になっていた。どんな聞き方をしたのか聞いてみたが、答えてはくれなかった）

町を出る際には、当然のように町人達が突っ掛かって来た。山賊達を返り討ちになんてしてどうするつもりだとか何とか。もともと諦めていた町人達にしてみれば、山賊達を返り討ちにしてしまった千秋達にそう言うてくるのは確かに当然のことだった。まあ、時間があったので無視して来たのだが（蒼夜に引っ張られて強制的に無視させられた）。

そうして今、こんなところにいる。

「あの山賊が言っただことは本当だったみたいだな」

シルディックの画面に、隠れ家付近の山のマップが映し出される。その中には赤い点が五、六個ほど点滅している。

内部から多数の生命反応確認。ばらついたように配置された反応

ですが、一カ所だけ密集した反応があります。全てが人間の確率大時間がかけられるなら、内部構造まで調べていきたいところだったけどなあ

「仕方ないよ。それに、もう行動は起こしちゃったんだ、今更後戻りは出来ないしね」

真顔でそう言う千秋に、今更少し驚いたような表情で、

「……本当、お前変わったよなあ。昨日の今日で」と漏らした。

「え？」

「なんでもねーよ。さ、行くぜ」

「あ、ちよつと待ってよ！」

更に奥へと、千秋達は進んでいく。

入り口に見張りは全くなかった。見たところ、入り口付近には監視系魔法の類も無いらしい。

少しばかり怪しいといえば怪しいが、町長は山賊達の人数はそれほど多くはない、と言っていたので、もしかしたら内部の見張りだけいて、あとはさっき倒した連中だったのかもしれない。少々不用心な気もするが、それも自分たちの力への自信の現れなのかもしれない。

そう考えること十秒ほど。蒼夜と千秋は山賊の隠れ家に潜入した。ちなみに、蒼夜が手に持っているのは非展開状態のシルディックである。大剣だとでかくて潜入には向いてない、と銃形態である非展開を選んだ。弾丸自体はシルディックのEASである、マガジン内部装填された弾を使う。マガジン一本につき九発＋一発（構造はなんとなくではあるが、実銃と似たような物であるらしく、勝手に一発リロードされる。だから「＋一発」）。一種の魔力弾として発射されるため、殺傷能力自体は、設定にはよるがない。

もう一つ、千秋に関して言うと、未だにメイド達に着せられたフリフリの服を着ている。その事に関しては完全に忘れ去っているよ

うで、何も気にせずに綺麗な足を晒している。正直、蒼夜的には千秋の着ていた制服よりも短めのスカートが視界をちらつて気になつて仕様がなかった。

山賊の隠れ家内は、意外としつかりして埃など無い綺麗なところではあった。

しかし、隠れ家というにはなんとなくしつくり来ない物がある。入つてすぐのところには検問用のカウンターのようなものが設置されているし、機銃も置いてある。どちらかというと、軍の前線基地、などと言われた方が納得出来そうだ。

数秒、安全の確認をすると、二人は隠れ家の中を進み始める。

廊下（？）の地面は全くと云つて良いほどデコボコしておらず、それどころか真つ平らで、歩き辛さが微塵も無かった。さらに道が広い物だから、逆に歩きやすい。小石一つ落ちていない地面は、整備の行き届いた様が見て取れた。

と、数十秒ほど歩いたところで、

「……分かれ道？」

通つて来た道から真つすぐ左右に道が分かれていた。道路などで言う、Ｔ字路みたいな感じだ。道の特徴自体には何の違いも無く、どちらにも相変わらず綺麗な道と、規則的に配置された光った電球があるだけだ。

「シルディック、どっちか分かるか？」

密集している生命反応だけを見れば左です。あくまでそれだけを見れば、なので道が正しいかは分かりませんが

さつきと同じ山のマップを出しながら、シルディックは言った。

「じゃあ左に行つてみるか……」

「……多分、右だと思う」

「何？」

文字通り、なんで分かったよ、という顔をしている。

「私、空気制御せい、だと思っただけど、風の流れて人がいるかどうかというのがなんとなくだけ分かるの。シルディ、確か生命

反応が密集してる場所は一つだけなんだよね？」

はい。一カ所以外は全て単体、もしくは二、三人の集まり程度です

「だったら右。三〇人くらいの人がいるから」

「違う生物、って事はないのか？」

「これで感じる人の感覚なんて、日常茶飯事なんだよ？ さすがに間違えないよ。大きさも一応なんとなく分かるし」

蒼夜は少し考える素振りを見せ、少しすると、

「……分かった。とりあえず右に行ってみよう。違ったって連中に見つかりさえしなけりゃ、さっさと戻りゃ良いのはどっちでも変わらないし、可能性が高い方に行った方が時間も短縮出来る」

言って、蒼夜は右に進み出した。

結果として、人質達を発見した。

「見張りは……二人か」

三〇人ほどの人質がいる牢屋の前には、山賊が二人いた。手に持っているのはおそらくトライデントではない実銃。いわゆるアサルトライフルという奴だ。種類に関してはよく分からないが、新式魔法は今まで山賊達が持っていた剣や槍同様に刻まれているはずだ。

「……ここで騒ぎを起こしてもあれだな……。仕方ない、氷系は苦手だけど……」

蒼夜は片膝をつくと、左手の人差し指と中指を地面につけた。

「水を氷に変換……水を氷に……」

地面につけた指先から蛇のように水が流れ出し、山賊達の足下に流れていく。

「アイス・ホールド……」

瞬間、パキン、と小さな音を立てて山賊達が巨大なつららに飲み込まれた。つららは一部も残さず二人を完全に包み込み、正直言って間抜け面としか言いようのない表情のまま動きを完全に封じた。

当然のことではあるが、人質達は大騒ぎだ。

「みなさん、落ち着いてください」

蒼夜が言った。

「あ……あなた方は……」

後ろの方からミニスカートでメイドな女性が現れた。茶色い首まである髪をした、見覚えのある顔をした女性が出て来た。

「セシアさん……！ 無事だったんですね！」

「ちよつと大声出し過ぎだ。まあ、なんにしても良かったです」

「もしかして……わざわざ助けに？」

「はい。えつと、鍵は……げ、こいつら持ってやがる……」

牢屋を開けるための物であるう鍵は、ご丁寧につららの中にあつた。もつと正確に言うなら山賊の腰の辺りに。

「仕方ないな。壊す。ちよつと、下がってもらえますか？」

「あ、はい」

人質の町人達が、セシアに誘導されて後ろに下がるのを見ると、蒼夜はシルディックを牢屋の鍵に向ける。

「銃声は出すなよ」

サプレッサー機能はONにしてあります

言われた瞬間、トリガーを引いた。ガキン！ と音を立てて牢屋の鍵が壊れる。

キィ、と牢屋の扉を開けると、人質達がゾロゾロと出て来た。

「みんな、静かにしてください」

と、セシアが言つと、町人達は全員黙った。千秋が小さく「凄い……」と漏らす。

「えつと、蒼夜さんでしたか。これから私達はどうすれば良いでしょうか」

「とりあえずここを脱出してください。俺達が先導します」

「分かりました。じゃあ、みんな。行きましょう」

一行は前方を蒼夜、後方を千秋が守る形で、山賊達を警戒しながら

ら隠れ家を進んでいく。人質達はセシアが落ち着かせてくれるため、騒がずに進んでくれた。

どうもセシアのことを町人達は上位存在（？）みたいに扱っているらしく、基本的にセシアの言うことは聞けらしい。との話を人質の女性から千秋は聞いた。子供達からも慕われていたようだし、さらにこれだけの町人からも慕われているところを見ると、セシアのカリスマというか、性格の良さと言いか。とにかく、なんとなく憧れる感じがした。

千秋ちゃん、集中した方が良いんじゃないか？

「え？」

あつ、と我に返った。どうも少しかりセシアについての考えにふけてしまっていたらしい。

「ごめん、アークス。ありがとう」

あいよ、と、アークスが返すと、千秋は再び後ろに警戒を向ける。出口自体はもう目の前のはずだ。あとは気さえ抜かなければ無事脱出。町人達に安全な道を教えてラインズへ返し、千秋達は山賊達の殲滅、もとい、逮捕を開始しなければならない。

基本的に千秋は空気制御、もしくはアークスによる雷撃での援護支援に徹するつもりだ。彼女自身は足手まといになるつもりは全く無いし、自分のことくらいは自分で守れる。とは思うものの、アークスが魔法をまだろくに使えない千秋が前線に出るのは、蒼夜の負担が大きくなるから止めた方が良く、と言い出した物だから、渋々後衛にまわることにした。まあ、後ろを任されている現状では、ほぼ前線みたいな物だが。

とにかく、町人達を脱出させ、ラインズまで返すことが出来、山賊達を倒すことが出来れば残るは黒龍だけになる。そうすれば――。そうすれば……どうするのだろうか。

特に考えていないことだった。今更今まで通りの生活を送ることは、無理だ。別に今回のような事件に巻き込まれるから、とかではなく、『今の』千秋が『今まで』に戻ることを拒否しているからだ。

ただ周りの気を伺って、上っ面だけの”世界”を作るのはもう止めよう、と。

なら――戻った時、私はどうすれば、良いんだろう……。隠れ家の入り口にたどり着く。その時だった。

バギン！！　という、轟音と青白い光が隠れ家の入り口を振るわせた。

「全く……魔害探知の反応を確認したから来てみれば……」
その二つの主が、千秋達の背後からゆらりと歩いてくる。

あの時の大柄な男に勝るとも劣らない巨漢だった。

角ばった厳つい顔には顎髭あごひげが生え、人殺しの目、とでも言いたくなるほどに冷たく冷めた鋭い瞳。ボサボサの髪。筋肉の塊と言っても過言ではないその体躯。ノースリーブのベスト一枚と半ズボンを穿き、首からは金色のネックレスを下けている。身長に至っては二メートルほどもあった。

どう考えても今まで戦って来た”下っ端”とは違う存在だった。

「イグリア・ビースト……。山賊達のボスです」

セシアが町人達を庇うように立ちながら言った。

なるほど山賊のボスらしいといえばらしい外見である。どちらかといえば海賊のボス、のぼうがしつくり来るような気もするが、千秋的には似たようなイメージだった。

更にイグリアの背後から五人ほどの部下と共に、大柄な男も現れる。

「ふむ。まさかここを突き止めるとは予想外だ。先刻ラインズへ送った部下どもにでも聞いたか」

「ちよつとばかり荒い手を使って、な」

ふつ、と大柄な男は怒るでも無く苦笑した。

「ふつふつふ、アレックス、本来ならここに忍び込まれたことに関

して執行部隊隊長の貴様には厳罰を与えねばならんところだが、この際人質共を牢屋から出されたことに關しては水に流してやろう。目的の女が直接出向いてくれているようだしな」

「ありがとうございます」

アレックスが一礼したのを一目見ると、視線を千秋に向けた。二ヤリと厳ついニヤニヤした顔を向けられて、少し怯む。

「貴様に関しては森の中で見つけた当初、『女』として他世界の貴族やら何やらに売り飛ばす気でいたが……なかなか面白い力を持っているようだな。古式魔法でもなく、新式魔法でもない全く新しい力。一体、どこの研究所に『研究材料』として売り出せば高く売れるかねえ？」

「……！」

千秋は今、初めて自覚した。そう、千秋の空気制御は古式魔法でも新式魔法でもない。まだ明かされていない新しい技術なのだ。あの時病院で研究材料として扱われなかったのが奇跡的としか言いようが無い。千秋の空気制御について研究すれば、もしかしたら具現力が必要ない完全な力を発揮する魔法すら造り出せてしまうかもしれないのだ。

「お前を欲しがる研究所なんていくらでもいるだろうさ。人権も、人の尊厳も、生命尊さなんて関係ない。ただ、己の欲しい名誉と金と幸福のために、お前を頭の中から身体の奥までいじり回したいやつなんて……！」

そんなところに送られれば、一体自分は何をされるのだろうか。全く気付かないほど身近にあった恐怖に、今更気付かされた千秋は、敵地にいるということすら忘れ、ただ呆然とするしか無かったが、

「俺を無視して話を進めてんじゃねーぞ」

真横にいながら、すっかり忘れていた少年の言葉は、千秋に思考

を戻させるには十分すぎるほどの力があつた。

「蒼夜君……？」

「ったく、千秋、何ビビってやがる。まだお前は掴まっちゃいないんだぞ。そんな、まだ『もしも』でしかない可能性に震えてんじやねえ。そんなに恐いなら、その『もしも』なんていう獣が自分を食らう前に、叩き潰せば良いだけだろうが」

蒼夜はそう、呆れたように言った。あれだけ強気だったくせに、今更何ビビってんだ、と。

「それに……俺はS G Sの——いや、世紀センチユリーズ・ギアの歯車の執行部隊所属隊員だ。お前を連れて行かせるようなへまはしねえ」

その言葉がどれだけの力を持っていたかなどということは、千秋本人しか分からないだろう。だが少なくとも、千秋に戦う意志を取り戻させるほどの力はあつたはずだ。

「ふむ。ただの魔法学校の生徒だと思っていたが……まさかC・Gの隊員だったとはな。さすがに予想外だ」

「それでもまだガキだ。俺と俺の右腕たるお前が相手をすれば、さほど苦でもないだろう」

イグリアは自分の獲物を取り出しながら言った。取り出されたのはナイフ。普通の間人が持つには剣なのだろうが、形で言えば、短剣。ナイフだった。だがただのナイフではない。剣身は二つのパーツが合体して出来ているし、その他にもあちこちが機会仕掛けだ。

「トライデントか？」

「違う……と思う。あれは多分……」

イグリアはただニヤリと笑いながら口を開いた。

「完全武器型トライデント、意志無き相棒を知っているか？ 文字通り自我意識の無いトライデントだ。AIを捨て去り、空いたスペースに更に機能を追加し、全ての機能を魔法補助にまわすことが可能になったトライデント。それがブリューナクだ」

ブリューナク、それに関しては千秋も少しではあるが知識がある。ブリューナクとは、今で言うなら十二師団という日本の少数精鋭

守護部隊が使っているというのが有名か。イグリアが言った通りAIを搭載しない分、機能を魔法補助にまわすことが出来る物だ。当然人工型のトライデントに分類される。

基本的には従来のトライデントと同様に古式魔法の補助しか出来ない。が、最近だとカスタム次第ではあるが、新式魔法ですら対応するようになって来ているらしい。上記の十二師団のブリユーナクも、それだという噂が流れている。

ある意味で人工型トライデントよりも万能、しかしAIが搭載されていない分魔法発動の処理やら何やらに関しては全て術者が負わなければならぬため、使いこなせる魔導戦士は少なからず限られてくるようだ。それに、当然ではあるが契約型のトライデントには性能的にはかなわない。まだまだ契約型の方が技術に関しては上なのだ。

かといって、樂觀出来る訳でもないが。

「ブリユーナク……見るのは初めてだけど、形状に関してはトライデントと同じようなもんだな」

「分類は人工型だからね。それは当然」

アークスとシルディックをウェイクアップ状態にしながら後ずさる。二対七、周りの下っ端達とはかく、イグリアとアレックスまで加わってくると、さすがに人質達を守りながらはキツイ。それに千秋はまだ魔導戦士の初級者にも達してないのだ。空気制御があるエアリアルとは言え、戦力的には危うい。

そんな懸念を感じたのか、セシアが後ろから、

「私も一応戦術は持っています。人質の中にも一〇名ほど。ここまで来れば私達はラインズまで引き返すことは出来ますので、存分に」

まるで最初から山賊達を潰すついでだった、ということを知っているかのような口ぶりで言った（でなければ逃げる時間かせいで勝手に掴まってくれ、としか解釈出来ないが）。

「分かりました、そっちはそっちで頑張ってください」

「了解です。それと、私は同い年ですから、敬語じゃなくて結構ですよ」

「……分かった。じゃあ、頑張って逃げろよ」

「かしこまりました」

そっちは敬語かよ、とツツコミたくなつたが、何とか抑える。

セシア達が隠れ家から逃げ出していく。

「アレックスさん！ 人質達が逃げますよ！？」

「ふむ。放っておけ。元々こいつらをラインズの町人達に引き渡させるためのエサだ。もつとも、引き渡されたのではなく、向こうから勝手に来たようだが」

部下の言葉に何の関心も抱かずに、腰に差していたモーニングスターを取り出す。針だらけの鉄球は、どうも脱着可能らしく、今は鎖をぶら下げたまま持ち手と鉄球がくっついていている。

「アレックス、分かっているとは思うが――」

「はい。女の方はなるべく無傷で」

「なら良い。野郎共！ 男は存分にボコせ！ 女は捕まえた奴に限度を設けた上で一日好きにさせてやる！！」

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおツツツ！！』

下っ端達が千秋達に向かって突っ込んでくる。

「ウォーター・ニードル……！！」

蒼夜がシルディックを地面に突き立てると同時、下っ端とイグリア、アレックスの足下から水の杭が飛び出して来た。ドッパン！

と、水しぶきを上げながら下っ端達は思いきり直撃を受けて天井に激突し、気絶する中、イグリアとアレックスはその巨大な体躯からは想像出来ない素早さでウォーター・ニードルを避けた。

「全く……一撃で伸されやがって……。むうん！！」

一線されたイグリアのナイフから、拳ほどの雷激が飛ぶ。バリバリバリ！！ と轟音を轟かせながら、蒼夜の顔面に向かって一直線に来るそれを、上体と首を反らしてギリギリで避ける。が、少し体

勢を崩して倒れそうになった。何とかそれだけは避けた物の、一瞬動きが鈍くなってしまった。それを狙っていたかのように、アレックスがモーニングスターと持ち手の連結を解除し、鉄球を飛ばしてくる。

「このっ……！」

鉄球を屈んで避け、鎖の下を通り抜けるように走り抜けアレックスの懐に入り、下からシルディックを振る。

「野郎ッ……！」

「ふむ」

ガッキン！ と、モーニングスターとシルディックがぶつかる。しかし、持ち手で受け止められた剣身は、徐々に下へ下がっていつている。やはり筋力ではアレックスの方が上のようなようだ。まるで棒一本で落ちてくる巨大な荷物を支えているかのような感覚に耐える蒼夜の顔に汗が滲む。

「ふん、そのまま押さえておけ」

イグリアが千秋に迫る。それを阻もうと思っても、少しでも気を抜けば叩き潰されそうなこの状況では一歩たりとも動けない。同じ理由で魔法を使う余裕すらない。

（なんとかして……このオツさんの馬鹿力をどけねえと……ッ！）

卑しい笑みを浮かべるイグリアが一步步こちらに近づいてくるにつれて、心臓の動きが少し早くなっていくような気がする。まだ恐怖は捨ててきていない。それはそうだ。まだ千秋は中学三年生。その上初めての”戦場”。今までの下っ端達るときはまだ良かった勝てる、という確信があった。だが、この巨漢に関しては――。

「逃げるな女。抵抗さえしなければ、痛くはないさ」

イグリアに関しては全くと言って良いほど確信が持てない。人というのは、勝利の確信が無いと恐怖が芽生えてくる、ということを千秋は初めて知った。

「くっ……千秋……！！」

蒼夜の声が耳に届く。アレックスに受け止められたはずの剣身は、まるでそれが逆だったかのように蒼夜が押されている。助けは……無い。そう思うと、無意識に足が後ろに一歩進んだ。

「くつくつく……逃げ場など与えないぞ？」

イグリアの持つナイフが黄色く光る。新式ではなく古式。雷の属性だ。

サンダー・リング
「雷の闘技場、発動ッ」

瞬間、視界が一瞬ではあるが光に包まれ、バチッ！と静電気の走るような音が響いた。思わず閉じた目を開くと、青白い壁が千秋とイグリアを囲むように現れていた。一辺は大体七、ハメートルほどの完全な立方体、一種の結界だ。蒼夜とアレックスは当然外にいる。助けが無いどころか、完全に引き離されてしまった。

「雷の闘技場はその名の通りだが、この壁に触るとバチッ、だ。死ぬほどではない。ちよつと痛いだけだ。静電気より数倍ほどな」

雷の闘技場の外で、蒼夜は剣身を押されるがままだに真っすぐ傾ける。と同時に、キーツ！と金属音と火花を散らしながら、モーニングスターの持ち手を滑り台のように滑らせていき、完全にしたまで滑ったと同時に、シルディックを振り抜いた。

当然のように後ろに飛び退いて避けられるが、元々そうされるのが分かっているやっただから気にはしない。

「くそッ……面倒なもんで……！」

「言っておくが小僧、外からでも効果は同じだからな？ それどころか、外の方が痛いぞ。同じく死ぬほどではないが、そっちは死ぬほど痛い」

クッククック、とイグリアは笑いながら言った。

「貴様はアレックスと適当に戦いながら、己の無力さを思い知っておけ」

イグリアの言葉を合図にするように、蒼夜とアレックスの戦いが再開した。

ニヤニヤと笑うイグリアが視線を千秋に戻すと、

「ほう？」

アークスをイグリアに向けて立っている千秋がいた。まだ恐怖の色は全くと云って良いほど消えない物の、その碧色の瞳には戦う意志が宿っている。

「抵抗せずに掴まる気はない、ということか？ 女。まだ怖いんだろう？ 足が震えてるぞ」

「こ、恐いです……恐いですよ……ッ。さっきまで相手にして来た人と違って、凄く怖い……。でも……何もしないで諦める方がもっと怖いから！ 少しでも、掴んだら壊れてしまいそうなほど小さな希望でも、絶望を掴むよりは全然良いです！ こ、恐いからって、足の震えが止まらないからって！ 受け入れたくない運命が目の前にあるなら最後まで抗いたいですっ！ だから——！！」

戦いますッ！！ そう叫んで千秋はイグリアに向かっていく。食らおうとしてくる獣を倒すために、変えたいものの全てを変え、ここまで立ち上がらせてくれた蒼夜の為に、自分の力を振るう！

ガキン！ とアークスの穂先とイグリアのナイフがぶつかりあう。イグリアはその体軀からは想像出来ないほどに素早く動き、己の筋肉が伊達ではないことを示すように力強い剣撃を繰り出す中、千秋は一週間ほどではあるが槍術部の助っ人としてやっていた頃の経験と力を生かして鋭い突きと斬激を繰り出し、時折風で攻める。

経験を長く積んで来た者と、経験の無さを能力で補う者の戦いだ。た。イグリアの戦い方は動きこそ激しいものの、ペースは一定に保っている。自分の体力の限度を分かりきった動きだ。どれだけのペースで動くとどれだけ体力が続くか、というのを経験的に知っている。

対して千秋は、自分の体力の限界自体はイグリアと同様に知っている。だが戦闘経験というものが著しく欠如していた。それを千秋は無意識か意識してか、己の能力でそれを補っている。空気制御や反射神経、持続時間の長い集中力など、動きと感覚に関しては昔から周りよりも一際秀でた千秋だから出来る戦い方だ。それでも当然

のように、イグリアと比べて隙は多いギリギリの戦いだ。

何度も何度も刃がぶつかりあいながらも、それでもその隙をついてこないのは、まだ余裕があるからなのだろう。未だにニヤリと笑いながら、ナイフを振り回す。

キン！ と、何度めかすらもう分からない回数 of 金属音が響く。

「そろそろ諦める。お前では俺には勝てん」

「まだ……分かりません！ でやああああッ！！」

ブワッ！！ と、突風がイグリアを襲う。だが、常人ならば普通吹き飛ばされるほどの風圧をもとせず、イグリアは左手で目の前の千秋の腹目掛けて拳を振り上げる。千秋はそれを、ほんの一瞬间だけ早く後ろに飛び退き避ける。が、

「雷光！」

バチッ！！ と、その拳の先から雷激が飛んだ。光の速さかと思うほどに速い一撃が、避けるという思考に行き着く前に腹に直撃する。そのまま空中へと投げ出され、真っすぐ青白い壁へと叩き付けられた。

「くはっ……ウああああああアアアアアああアアアアああアアアアああああッッッッッッッ！！？」

千秋の身体中を白い閃光が走り抜けた。数分にも感じるそれは、たった数秒で終わった。その後はただ地面へと叩き下ろされるだけだ。だがその感覚すらどうでもよくなるほどに、今まで感じたことも無い痛みは、思考を奪った。蒼夜が何か叫んだ気がしたが、それだけだ。

「ふん。所詮は奴の　　か。威勢だけは良いようだが、まだ　　の　　がなっちゃいない」

イグリアの言葉が所々抜け落ちて聞こえる。

だが、そんな中で何故かはつきりと聞こえてくるものがあつた。

人の声ではなく、なにか機械的な声が。

WD - 201、バイフェクト・アサルト完全戦闘状態、発動待機

（ぱーふえくと……あさると……？）

一瞬で考える力が元に戻った。それはダメだ。それだけは発動させちゃいけない。本能か、理性か、はたまた心の奥底かがそう言った。千秋自身も直感的に理解する。完全戦闘状態とやらは、千秋が『暴走』と呼ぶあれか、それ以上のものだということを。まだ自分^{リアル}の力には隠れたものがあつた、ということよりも、それを発動させまいとする心が先に出る。

「ふむ。まだ抵抗を続けるか」

その心は、どうやら身体にも影響を及ぼしたらしい。完全に無意識ではあつたが、立ち上がろうとしていたようだ。

「……ならば、屈服させてやろう」

イグリアはその巨大な手で千秋の頭を掴み、結界の中心辺りへと投げ飛ばす。

それでも尚立ち上がろうとする千秋の頭を再び掴み、持ち上げたかと思うと、思いきり地面へと叩き付けた。それも命には別状が無いよう新式魔法をかけた状態で。

ドゴオ！ と、地面がへこむほど叩き付けられた千秋の口から、無理矢理空気が押し出される。数秒呼吸が出来なくなった。

「さあ、俺に屈服しろ。抵抗をやめて、素直に俺の商品になれ」

起き上がろうとする千秋の頭を地面に押し付け、そのまま電撃を放つ。その威力は、雷の闘技場と同等。再び流れる白い閃光に、今度は意識が奪われるかと思うほどだった。

「うあッッッッッ！……!?」

「ただ領けば良いんだ。そうすれば、止めてやる」

バリバリバリ！

「ああああああああアああああああああアアアアああああああああッッッッッ?!!」

「さっさと領け」

バリバリバリバリ！！

「くああッ！ ～～～～～～～～～～～～～～～～～ッ!!!!!」

「はっ、声にもなくなっただか？」

イグリアの手の中で、涙が止まらない。いつそのことこのまま頷いてしまいたくなるほどに痛い。これはもはや拷問でしかなかった。それでもまだアークスを手放さなかったのは、戦う意志が残っているからだ。まだ諦めていない、今だって立ち上がるうと力を込めようとしている。

また白い閃光が身体を走り抜ける。それと同時に、頭の中に声が響いた。さっきの機械的な声ではない。

【千秋ちゃん！ 大丈夫か！？】

契約型のトライデントと、その契約者との間でだけ出来る頭の中の会話。いわゆる念話というやつだった。

【ぜ、全然大丈夫……じゃ、ない……よ】

【好き勝手やってくれるぞこのじいさん……！ くそつ、千秋ちゃん！ 魔力はまだ扱えるか！？】

【ちょ、ちよつと……ただけけど……】

【じゃあ無理してでも全力で俺に流せ！ 一時的ではあるけど、俺の知識を千秋ちゃんにインストールする！】

トライデントというのはそんなことが出来たのか、と一瞬感心しかけた千秋だったが、

【ぜ、全力でつて……む、無理だつて、ば……】

【無理してでもっていったら！ この状況を乗り切るには、それしかねえ！ それに、千秋ちゃんなら出来るさ！！】

【でも……】

【俺を信じろ！ 千秋ちゃんの相棒が出来るって言ってたんだ、出来るって！ それに——このクソジジに一泡吹かせてやりたいだろ？】

【……………分かった】

千秋は魔力をアークスに流し始める。卑しい笑みを浮かべながら浴びせてくる電撃を耐えながら。飛びそうになる意識をギリギリ保ちながら。

【もつと、もつとだ！！】

[illegible]

でもそれと同時に、さつきから身体を支配していたと言ってもいい白い閃光が止んだ。死んだ訳じゃないだろう。何故なら――。

千秋の頭を掴んでいたイグリアは、バギン！！と音を轟かせる青白い光とエメラルドグリーンに光る何かに吹き飛ばされた。当然、天井にはあの青白い壁がある。

自分で張った結界の効果から抜け出すと、どさりと地面に落ちながら何とか着地する。

結界外にいる蒼夜達も、戦いをやめて千秋の方に視線を向けていた。それほどまでに異質、いや、異常なほどの魔力量だった。そう、結界すらも貫通して漏れ出すほどに。

行くぜ！
千秋ちゃん！！

アークスを横に一線し、穂先を前に出した状態で後ろに構えると突然千秋の足下が光り出した。その光は陰陽の円のように分かれていて、黄色く輝き、エメラルドのように光っている。それは――

「ま、魔法陣！？ し、しかもこれは……！」

そう、魔法陣だった。新式魔法とは違う、れっきとした古式魔法としての魔法陣だ。大抵は初めて魔法を使う時（単純に属性的な物を発動させるときは現れない）。

例えば、ただ風を起こすだけや、火を出すだけなどのときは、現れない（や強力な魔法を使う時に現れ、もしくは魔法創造というものを使う時に現れる。ただそれだけなら、イグリアも、蒼夜も、そしてアレックスも驚きはしなかっただろう。問題なのは大きさだ）。

古式魔法で言う魔法陣とは、魔法を発動させるためのものではない。単純な話、その術者の魔力量と具現力を示す。つまり、大きければ大きいほどに魔力量が多く、具現力が高いということだ。

平均的な魔法陣の大きさは、約半径二メートル半。大きくて三メートル程度だ。

だが千秋の魔法陣はどうだろうか。三メートルを超え、四メートルを超え、さらには五メートル、六メートルを超えてもまだ巨大化を止めるどころか緩めもしない。果てには結界に激突するほどだ。それでも尚、巨大化しようとしている。

ピキ、ピキピキピキ、と雷の闘技場にももの凄いスピードでヒビが入っていく。魔法陣が、千秋の魔法陣が突き破る気にいる。

イグリアはそれを止めようとする事も叶わなかった。結界外にいる蒼夜達には分からないだろうが、こんな狭い個室も同然の場所でこれだけの魔力と具現力に浸かれば動くことすらもままならない。本来なら具現力だけのところを、千秋の空気制御のせい、魔力までが干渉して来ているのだ。

瞬間、パキーン、と雷の闘技場が千秋の魔法陣によって砕かれた。
「ごほっ……ごほっ……！」

イグリアがむせる中、魔法陣は巨大化を止めた。その大きさ、半径約一〇メートルというところで。もはや壁にすらくい込んでいる。ここが崩れなくて良かった、と、蒼夜は思ってしまった。

「ふむ……なんという力……。こんなものは見たことが無い……」

アレックスがそう呟くと、蒼夜も頷いた。ことに気付いた蒼夜は、思いきり頭を横に振り、少し笑顔で、

「千秋！」

「え？」

ボロボロの千秋に言うはただ一言だけ。それだけで十分だ。

「思いきりぶちかませー！」

「！……うん！」

チャキ、とアークスを真つすぐ構える。

「アークス、行くよ！」

おう！ ばっちり決める！ 千秋ちゃん！！

千秋の腰に取り付けられたカードケースから、一枚抜き取り、あの隙間にスライドする。シャキン！ という音と共に、アークスの内部から駆動音が響く。

「でやあああああああああああああああああああああ！
！」

突き出した穂先を中心に、風と雷が巻き起こる。それらはまるで一つのものののようにイグリアに一直線で飛んでいく！

ズドン！！ と、トルネードのような風と雷は、イグリアの腹に直撃し、思いきり激突させた。それどころか、壁を突き抜けさせ、どこかへと飛ばしてしまった。

「ぐあああああああああああああああああああああああ
ああああああああああ………」

千秋と蒼夜は思わず地面にへたり込んだ。疲れたのもあるだろうが、緊張の糸が完全に切れたのが大きい。中で戦っていた千秋もそうだが、外で見ていた蒼夜も十分すぎるほど緊張していた。いや、むしろ自分が戦うよりもしていたかもしれない。

「……あれ？アレックスさんは？」
「何？」

いつの間にか蒼夜の横にいたはずのアレックス・ジークは消え去っていた。

「ちっ……逃げられたか」

「あれ？……うわあっ！？」

「どうした！？　って、何……？」

その辺りに転がっていた山賊達が、突如として紙になったのだ。ただ人形に切り、文字が書いてあるだけの紙に。

「これ……式神、ってやつか？　なんでまた……」

式神はしつての通り、陰陽師などが使っていたあれだ。今では魔導戦士でも扱う者は多いとは言わないまでも、存在しているため別がありえないことではない。あのイグリアも古式魔法を使えるようだったから、もしかしたらイグリアのはなったものかもしれないが……。

「イグリアにしちゃ丁寧過ぎるな……。あのオツさん、こんな丁寧にやるほど几帳面じゃないと思うし……じゃあアレックスの方か？　あっちならまだ納得出来るけど……むっ……」

「蒼夜君、とにかくセシアさん達を追おう？　それについて考えるのはまた後の方が良いよ」

「……そうだな。まだ山賊共が残ってたらあれだし」

蒼夜は式神の紙をポケットにしまうと、千秋と共に隠れ家を飛び出した。

瞬間、隠れ家の入り口が爆発した。

爆風で二人は少し飛ばされるも、精々数センチほどだったのが幸いして崖から落ちるとかはなかった。

「こ、今度は何！？」

「お、おい……あれってまさか……！」

蒼夜が指差すその先に何か大きな物がこちらに向かって飛んできていた。

黒く輝く鱗に、一〇メートルほどもある巨大な身体。太い腕と鋭い爪を持ち、紅い目に大きな翼を持った真つ黒なそれは――。

黒龍だった。

「き、き、来ちやつたああああああああああああ
あああああああああ！」

「まさかの変わり具合にびっくりだ」（後書き）

やっと……やっと更新です！！ 読んでくださっている方々、本当にもうしわけございません！ このバカな結城は二ヶ月もかかってようやく更新しました！

それでも待つてくれていた方々、ありがとうございます！！

さて、やっと山賊に関しては解決しましたね。イグリアさんはどっかに飛ばされちゃったし、アレックスさんはこつ然と消える、なんて不安とか、千秋の頭に響いた機械的な声の謎などとも残しては行きましたが、とりあえずは解決しました。……したってことにしておいてください。

戦闘シーン……難しかった……。やっぱり戦闘シーンは苦手です……。普通のシーンとか説明シーンとかを書くよりも苦手です……。でも楽しいから良しとします。

さて、今度は黒龍の問題を解決していきます。珍しく長めのあとがきでした！

黒龍はその紅い目でぎょろりと辺りを見回しながらこちらに近づいてくる。息を吐くたびに小さな炎がその巨大な口から漏れ出し、その一歩は千秋達の足下を大きく揺らした。

「……仕方ない」

蒼夜は冷や汗たらしながら、ゆっくりとシルディックを黒龍に向ける。

「千秋、適当に道作って逃げるぞ」

「ええ！？ こんな狭い所であれと戦うの！？」

隠れ家前の道は大体人が四人くらい横に並べるくらいの幅だ。普通に対人相手ならまだしも、今相手にしようとしているのはこの巨大な黒龍。普通は無謀といっても良いはずだ。

が、蒼夜は引きつった笑顔で、

「崖から飛び降りて逃げたいか？」

「行くよっアークス！！」

あいよ、千秋ちゃん

切り替え早いですねえ、千秋さん

いや、だってこんな崖から飛び降りる勇氣なんてないし……と、シルディックの呟きに千秋は思った。

ガアアアアアアア！！ と咆哮が轟く。それを聞いて逃げようように、辺りにいた鳥達が逃げ出す羽音が聞こえた。

「行くぜ……！！」

蒼夜はEASをシルディックに差し込む。

ローディング……コンプリート

「ウォーター・ブレード！」

言うと同時に、シルディックの剣身の付け根から水が噴き出す。それは五メートルほど伸びて止まり、先端を尖らせてそのまま固定された。蒼夜が後ろに構えてもそれは崩れることはない。まさにウォーター・ブレードな訳だ。

水流剣

蒼夜はそれを真つすぐ黒龍に向けて振り下ろす。

「でりゃあああああああッ！」

ウォーター・ブレイドは弧を描きながら黒龍の頭に水しぶきを上げつつ直撃した。

「うっ！？」

ガッキン！ と黒龍はウォーター・ブレイドを弾き返した。更に、そのために振り上げた黒龍の頭が振り下ろされると同時に、炎弾が千秋達に飛んでくる。が、突如その下から吹き上げた突風に吹き飛ばされ、あらぬ方向に飛んでいき爆散した。千秋だ。

蒼夜はそれを一瞥すると、ウォーター・ブレイドを縮小化し、元々の大きさほどまでにし、剣身が纏う水の刃が持つ魔力圧を高くする。そのまま黒龍に向かって走り出した。ウォーター・スライドは効力を弱に設定（強のままだと速過ぎて近くでジャンプ出来ない）。黒龍の腕がパンチのように飛び、炎弾が放たれる中、ホイール移動の要領で素早く目前まで近づき、速度をつけたまま振り回す。

ガツキイジジジジジジジッ！ と、チェーンソーでかなり硬い物を切ろうしているような音を立てながら、ウォーター・ブレイドがぶつかる。魔力圧をほぼ一点に集めた上に速度の付いた一撃は、さすがの黒龍の鱗でも傷は入った。だがそれでも致命的ではない。むしろ——危険。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ
ッ!!!」

黒龍はそれを弾き返すのではなく、弾き飛ばしてきた。いや、黒龍に近づいたのだからそれくらいは当たり前だ。体が三メートルほど宙に浮かされ、後方に大きく飛ばされる。それは千秋の真上を通り抜けて――。

その行動は完全に反射的だった。

足下に空気の塊を作って爆発させる。それによって軽くバランスを崩しながら、千秋は蒼夜の元まで飛び上がり……がしっ、と抱き

つくような形で蒼夜を捕らえた。何か考えた訳でもなく、何があるか考えた訳でもなく、もはや勝手に体が動いたというレベルだった。「あぐっ……って、千秋!? お前何やってんの!?!」

「何、って……あれ? 何してるんだろ」

瞬間、ふわっと身体中を嫌な浮遊感が襲う。

……上記したように、千秋の真上を通っていったということは蒼夜は崖の先に飛んでいった訳で。その蒼夜を捕まえたということとは当然千秋もその崖の先にいる訳で――。

「き、きやあああああ――ツツツツツ――!?!」

「おおおおおおお――ツツツツツ――!?!」

当然のごとく、真つ逆さまだった。

黒龍の姿なんて一瞬で視界から消え、見えるのはただデコボコした岩壁と真下にある木々ばかり。

全身で一枚一枚空氣の層を突き破っていく感触が、今までやってきた高飛びや幅跳びみたいな物とは比べ物にならず、一枚突き破るその度に恐怖がこみ上げてくる。

「クソっ、シルディック! 『水竜の右翼』を使っつ――!」

了解です蒼夜様。EASのセットをお願いします

「そら、よつと!」

蒼夜がマガジン型のEASをシルディックにセットすると同時、シルディックの内部から駆動音が響く。すると、剣身の付け根辺りからパシュー、と蒸氣の様な物が吹き出す。

「細かい術式までやる必要ない! 元々の効果を捨てていいから飛べるだけの構築をしろ――!」

了解。元の術式を引用し発動速度を遅くすると思われる物を出来る限り削除……完了。『ドラグーン・ライト水竜の右翼』発動まで約一秒

瞬間、蒼夜の右肩の後ろに真つ白な粒子がもの凄いスピードで集まっていき、二メートルほどの何かになった。それが一度上から下

に振るわれると、白い粒子が一瞬で消え失せる。

その中から現れたのは――翼だった。青く透明な水で出来た翼。構築完了

「何とか真つ逆さまのままだけは回避する！ 掴まってるよおッ！
！」

バサアッ！ と、青い翼が空気を斬り裂く。少しだけ自分たちの角度が傾いた気がした。

「魔力をもつと浮力にまわせ！ いつも通りで飛ぶ量じゃ足りない
！！」

それでは『水竜の右翼』の構築が崩れます

「ならもう一発EASを使う！」

『右翼』を何度もはたかせながら、もう一本EASをセットする。すると、更に翼が巨大化した。

地面までもう五メートルほど。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおッッッ！」

その巨大な翼が大きくはばたく。構築が崩れないギリギリのラインまで魔力を浮力にまわしたのは大きかったらしく。一気に「ほぼ直線」が「ほぼ斜め」になった。

瞬間。千秋達は森の中に突っ込んだ。

「痛ててててててて！ 枝が！ 枝があっ！ （ガスン！）
いつてええええええええええ！ ぶつかった！ 思いきり木に轢
かれた！！ いや木に轢かれるとか意味が……うおっ、おおおお
おおおおおおおおおおおおお！！？」

「んにゃあああああ！！ 痛い痛い痛い！ ひゃあああ！！？
（ガスン！！）って、ちよつと蒼夜君大丈夫！？ ひにゃあああ
ああああああああああ！！？ 今ので滑空の角度がどう
考えてもおかしくなってるうー！ー！ー！！！」

バキバキバキバキガスン！！　バキバキバキバキズシャアア
アアアアアアッ！！

……結局。背中から着陸してゴロゴロと転がり、木に激突して一
〇分ほど二人は気絶していた。

* * *

かくして一〇分後。

「いってえ……」

「いったあい……」

全身泥だらけの二人は目を覚ました。

蒼夜は制服ボロボロ、あちこち擦り傷だらけだし、頭が木の太い
枝に激突して微妙にたんこぶになっている。千秋はそのフリルだら
けの服がボロボロ。当然擦り傷だらけ。蒼夜と違うのは木に轢かれ
て（？）いない事と、服のボロボロ度が蒼夜と違って少しばかり高
いので、太腿とか鎖骨とか胸元とかととか、露出度が少々高くな
った。元々高かったのに。

起き上がった蒼夜は、そんな千秋を見て当然のように赤面した。

「んなっ……！！？」

蒼夜様、ガン見ですね

男だから仕様がねーよシルディ

まあ、蒼夜様は結構えっちいですからね

「お前ら……バラすぞ……」

わー、そーやさまがおこったー

そんな会話がされる中、全く自分の被害を理解していない千秋は、
激突した腰辺りを押さえながら起き上がった。

と同時に蒼夜は体ごと九〇度回転。

「蒼夜君、大丈夫？」

「あ、ああ……なんとかな……」

「？　どうしたの？　なんで後ろ向いてるの？」

「いや、あのー……」

「あつ、もしかしてどこか怪我した！？」

「いやそうじゃなくてだな……」

「ちよつと見せてみて！」

「いや、怪我なんてしてないから！」

「じゃあこつち向いてよ」

「それは……無理（理性的に）」

「むうう……じゃあ仕様がな……」

「ん？」

「とりやあつー！」

「うおっ！ー？」

突如思い切り後ろに引つ張られたかと思うと、どしん！　と背中が地面に叩き付けられた。どうもはつ倒されたらしい。

いわずもがな犯人の千秋は、何も気にせずに蒼夜の身体ぺたぺたと触りながら調べ始めた。適当に腕やら腰やら胸やらを押している。とうの蒼夜の的には、ありがたいような、迷惑なような微妙な所だった。微妙に際どい所まであらわになっている肌がいちいち視界に入る物だから目をそらすのが大変だ。

「ち、千秋……？　本当に怪我してないから起きさせてくれねえかなあ……？」

「ダメ。蒼夜君は意外と無茶したりやせ我慢したりするっていうのをこの短期間で千秋さんは学んでしまったので、ちゃんと確認するまではこの状態」

「いや……あのねえ……」

はつきり言えば良いじゃないですか蒼夜様。千秋さんの美肌が目にちらついて襲いたくなるから止めろ、って

このバカは何言ってくれちゃってるんだ！ー？　と蒼夜は心底思った。

「ふえ？」

千秋ちゃんまだ気付いてないのか？ 服、服

「服？」

今更のように千秋は自分の服を見た。町長の家から着て来たフリルな服は、スカートは下着が見えるか見えないかくらいの所まで裂け、ブラウスは腕と胴回りの辺りがあちこち裂けて、胸元はボタンがない。リボンは微妙にほどけかけ。フリルは少しボロツとなっている。

「んにゃ！？」

今更過ぎますよ、千秋さん

まあ、らしいっちゃらしいけど。ほーら千秋ちゃん、逃げねーと蒼夜に襲われるぞー

「誰が襲うかつ！ 千秋の場合本当に信じかねないからそういうこと言つのマジでやめろっ！！」

「お、おそ、襲われっ……！！？ そ、そそそ蒼夜君ッ！！ え、えっちいのはいけないと思います！！」

「いやお前も本当に信じてんじゃねえよ！？ こいつらに振り回されるのいい加減やめろよな！！」

実は後ろを向いていたのははっ倒されるのを待っていたからで、千秋さんのボロボロな服から垣間見える肌をガン見たかったから

……

「お前本当にバラして資源ゴミに出すぞ！？」

千秋ちゃんも気をつけるよー？ 蒼夜みたいな奴はそこら中にいるんだからさ、ただでさえ千秋ちゃん可愛いんだし

「お前はお前で何を言っとなるんだ！？ 俺をそんな奴らと一緒にするなあ！！」

「そ、蒼夜君……けだもの獣……？」

「ちげえから！ 確かに男は獣だとは言っけど全員が全員じゃない！ 少なくとも俺は違う！ 揺れ動く理性をぶん殴って土木工事で強化することぐらい楽勝だ！！」

「揺れ動くって事は一パーセントでも私をそういう目で見てたって

こと!？」

「しまった! 誤解するような言い方だった!! 違う違う!」

「やっぱり蒼夜君も獣なんだあッ! お兄ちゃんッ! 大変な人と二人きりなつてしまいました!」

「違うつつつてんだろーが!」

「だ!」

「!」

もう今までのシリアスな展開がなかったかのような展開になつちまつてるじゃねーかあああああ!」

蒼夜はぜえ……ぜえ……と、思いきり肩で息をする。何だか千秋と出会ってからこういう類のイベントが起きたりツツコミが大変だったりしている気がもの凄くする。おそらく気のせいではない。

それから約一〇分間。なんとか誤解を解いて千秋を落ち着けることに成功した蒼夜は、元々するべきだった話を始める。

「とにかくだ! まずはラインズに戻ってセシアさん達の安否の確認と、黒龍の対策について考えなきゃならない」

「つていうことは、戻らなきゃいけないだよね?」

「そういうことだ。シルディック、ここからラインズまでどれくらいかかる?」

約一〇分ほどですね。何の邪魔も入らなければの話ですが

「一〇分、ね。よし分かった。とりあえずさっさと行こう。速いにこしたことはないし」

「うん。早く行こう」

二人は、今更ではあるが砂埃を落とし、ラインズに向けて歩き出した。

ラインズの町は最初に来たときよりも賑わっていた。

一番賑わっているのは中央の広場で、かなり大きめのところであったはずだが、広場から人が溢れ出すほどに人が集中していた。どうも広場の中央に何かあるらしく、そこを囲むように人々が集まっている。

「何だ? また怪我人か何かか?」

「とにかくにも、まずはお二人とも町長の家。特に千秋さんは、服がボロボロですから」

「ふえ……？ あっ、そうだった……」

「ささ、町の女性陣が壁になってくれているうちに」

よく見たら本当に女性達が壁になっていた。そして何故か蒼夜までもが壁の中にいる。

セシアに手を引かれて連れて行かれる中、蒼夜はその壁に引きずられる形で町長の家まで案内されていた。

町長の家にとどり着き約一〇分ほどあと。

千秋は二回ほど着せ替え人形扱いされ、最終的に元の制服姿に戻っていた。いつの間に洗濯したのかピカピカの制服である。

朝食をとったりリビングに行くと、さすがに二人も予想出来ていたことだが町長からもの凄くお礼を言われた。しかも蒼夜に娘を嫁にやりたいとかい出し出すほどだ。何とか丁重に断ったが、とうの娘は少し不満そうだった。

席に座ると、昼食が出された。いつの間にやら昼頃になっていたらしい。

「一応調べましたけど、隠れ家の中にはもう誰もいません。どうも残ったのは式神だけだったみたいで」

おそらく結構な術者だと思われます。生体反応に反応させるほどの物でしたから。そんじょそこの術者ではなかなか出来ない芸当ですよ

「普通の人にするのも維持するのも結構大変なのに、生物として感知させる……。理論的には知覚系と幻覚系の応用で出来ると思うけど……あー、新式でも符術系は全然分からないからなあ……」

「ふむ……よく分かりませんが、とにかくかなり高度なことをしていたのは分かりました」

苦笑いしながら町長は言った。

「とにかく。イグリアとアレックスに関しては後で連絡して世紀の

歯車に捕まえてもらいます。ここで捕まえた下っ端共もついでに連れていてもらいましょう。その前にまずは黒龍をなんとかしないと……」

今の所は何もないが、もしかしたらその内このライセンスにまで黒龍がやってくるかもしれない。そうなれば被害は山賊達の比ではないだろう。家が燃える、なんて生易しいことは言わず、炎弾で爆散させられるか、その巨体に踏みつぶされるかされてしまう。

「多分……水竜の右翼を使えば倒せるとは思うけど……」

「本当ですか!？」

「あの鱗に何かしらの細工がなければですけど」

と、千秋は「あつ」と声を上げた。

「そつえば、水竜の右翼の本来の効果ってなんなの？ さっきは捨ててみたいだけど」

ああその事か、と蒼夜はシルディックをテーブルに置く。それから聞け、ということらしい。

自分で説明すれば良いじゃないですか

「お前の方が説明は得意だろ。俺苦手だし」

面倒なだけでしょうが……。まあ良いです。えーっと、水竜の右翼というのはですね——

シルディック曰く。水竜の右翼とは蒼夜のオリジナル魔法、つまり魔法創造で造り出した魔法らしい。

魔法創造とは、その名の通り魔法を造り出すことである。細かい理論を語るとかなり面倒なことになるので大まかなことだけを説明させてもらうが、トライデント、もしくは専用の術式を扱い（この場合はトライデント非使用者）、世界の理（魔法管理システムとも呼ばれる）にアクセスする。そこで魔法属性の属性の特徴などに関する屁理屈とも言える効果を設定するのだ。

例えば、雷は速い。これなら高速移動の魔法が創れるし、風には鳥がのる、だから飛べる。なんて意味の分からない屁理屈すら通るとにかく何かしら属性の特徴などに触れていればほとんどの魔法が

作れるのだ。正確には世界の理に魔法として登録する、ということらしいが。

だが、当然制限はある。強力な魔法を創るにはそれだけの具現力と己の世界の大きさが要だ。どちらに關しても最近では測定出来る時代なので、常識人であれば許容範囲外の魔法は創ろうとはしない。が、創ろうとする者もいる。

そっという者は理に反発され、その属性のとてもない攻撃が飛んで来て、普通は命を落とす。普通じゃない者はそれを押さえつけ、無理矢理ではあるが許容範囲外の魔法を造り出すが、それが成功した人の話なんてものは都市伝説にしかない。それほどまでに常識を離れた話なのだ。

さて、話を戻そう。

蒼夜の水竜の右翼だが、『川は周りの岩を削る』というのを使っている。つまり――、

触れた物の分子を抉りとる、っていう魔法ですね。蒼夜様の許容いっぱいを使つての魔法です

「分子を抉りとるって……」

まあ簡単な話、水竜の右翼で触れた物を消し飛ばす、って感じですね。翼だからたまたま飛行能力も付加されてるみたいですから、ヴィクトリーな二番の使う光の翼みたいに使うことも出来ます

対人用ではないので、基本デビルとか人外系に使いますが、非殺傷も聞かないですし。とシルディックは付け加えた。

——まあ、そんな魔法を人に使ったら危険どころの話じゃないよね……。

「理解したか？」

「うん、大体は。そっちは？ 防音までしてる話だったの？」

テーブルの裏を指差しながら千秋は言う。すつ、となでると、小さな凹凸があるのが分かる。簡単な新式魔法の術式が刻まれているのだ。魔法陣ではないのは、範囲指定が簡単だからだろう。魔法陣では大きさに効力が比例してしまう。好きな配置にするのが難しい

のだ。

「やつぱ気付いてたか……。まあ、その話は部屋に戻ってからだ。まずは昼飯食って体力回復させねーと」

「ん、分かった」

昼食はカレーライス。千秋的には昼に食べる物じゃない、という印象があるのだが、出された物に手をつけずに終わるのも失礼なのでスプーンですくい、口に運ぶ。

「ん……おいしい」

三〇分後。千秋は今、町長宅の階段を上って蒼夜の部屋に向かっている。蒼夜が早々にカレーを食べ終えて先に部屋に戻ってしまったのだ。後で来い、と言っていたので、部屋で先程の話をするのだろうが、わざわざ部屋でする意味が分からなかった。

なーんか危ないことでもされるんじゃないのー？

「そのときは空気制御で吹っ飛ばすから大丈夫だよ」
エアリアル

おー、こえー

三階まで上りきった千秋は、目の前にある三つの扉の内、左の扉にノックした。

「蒼夜君、入るよ？」

「ああ」

扉を開けて中に入ると、蒼夜がベッドに座りながら千秋の方を見ていた。

「やつと食い終わったか」

「蒼夜君が速すぎるんだよー」

「あれくらい普通だろ」

ラーメンの丼ほどの量あったカレーを二杯食べておきながらたったの一〇分しか経っていないのは普通じゃない、と千秋は思うのだが、どうせ言っても無駄なのであえて言わないことにした。

「で、なんでわざわざ部屋まで呼んだの？」

「ん？ ああ。色々そこじゃないとできない準備があつたんだ。

先に言っておくが変な意味じゃない」

うつ、と千秋は笑顔を引きつらせた。言おうとしていたことに釘を刺されてしまった。

「ていうか、準備しないと出来ない話なの？」

「ああ。昨日の夜に何とか世紀の歯車と連絡が取れたから、世界間転移術式を教えてもらったんだ」

「……えーっと、なにゆえこのタイミングでそんな話が？ てつきり黒龍の対策かなにかだと思ってただけと……」

まさか黒龍をどこかに転移でもさせるつもりなのだろうか。確かに真っ正面から戦うよりはその方が安全性は高い、ような気もするが、結局はその術式……はない。長過ぎるだろう。世界間の転移なんて千秋でも知らないが、多分理論から入る。あーだからこうなってるーだからこう。だからこうなんて他の世界に転移。なんて長ったらしく書くことだろう。だからおそらく魔法陣だろうが、バカでかく書いた上にそこに誘い込まなければならぬ。

確実に真っ正面よりは安全性はたかいのだろう。しかしそれはそれで危険な気もする。発動までそこから動かないように、確実に抑えていなければならないのだ。パパっ、と転移してくれるなら良いが、基本的に新式魔法はまだまだそこまで技術が発展していない。だから無理だ。

まあ、何が言いたいかというと、どっちも同じくらい面倒で危ないということだ。メリットで言えば、見つけてそこまで連れて行けばそこまで時間がかからないであろうことくらいだが、出来ればやりたくない。千秋は知識があっても一度たりとも新式魔法は使ったことはないの、抑える役目が確実に自分になるからだ。そんなことが出来ると思うほど、千秋は自信家ではない。

が、そんな考えはただの無駄と化した。

「言っておくけど、黒龍を転移させるとか面倒なこと考えてる訳じゃないぞ。そんなのただ他の世界に被害を移すだけなんだからなるほど。そこまでは思いつかなかった。」

「だからその教えてもらった術式を使うのは——」
蒼夜は一拍置いて——告げた。

「お前だ」

「……は？」

何を言われたか全く理解出来なかった。

「お前だつて言っただ。ちなみに拒否権はない。お前には今からとつと地球^{むこう}に帰ってもらう」

「な……何言ってるの？ まだ終わってないんだよ？」

「ああ終わってない。黒龍の問題は何も終わってないさ、だからお前を帰すんだ。これ以上は民間人には危険過ぎる。まして相手は黒龍だ。お前はただ一つの異能が使えるだけの素人以下の魔導戦士だ。いや、まだ魔法見習いの出発点の一手前か……そんな奴にいられても足手まといだ。今まではただ運が良かっただけだろ」

「なっ……」

何か言い返そうとした。が、言葉が出てこない。反論が出来ない。全て本当のことなのだから。

「本当なら今朝に帰そうと思ってただけど、いろいろあったからな。（千秋の着せ替え人形化とか山賊とか……）つたく、こういう時に限って予定通りに行かないんだよな。本当にもう……くそっ」

「あの……何をブツブツ言ってるの？」

「……ただの独り言だよ。まあとにかく——」

タン、と蒼夜が足下を叩いた。

瞬間、千秋の足下がポウ、と輝き出す。

「ッ！ まさか……準備って——！！」

「そう。この部屋に転移術式を刻むこと。さつきからずっと発動待機だったんだ、すぐに転移が始まる」

「なんでそんな勝手——！」

「勝手だよ。ただ俺がこれ以上、お前に非^{きけんちたい}日 常にいてほしくな

い、っただけの理由だからな」

「！」

蒼夜はただ、ふっ、と笑った。

千秋は蒼夜の元に駆け寄ろうとした。が、ただそうしようとしただけで身体が動かない。手も足も水が動きを封じている。

そして。

突然光りが急激に強まり――。

「そ――やく――！！」

千秋は――この世

スフィéria

界から消えた。

* * *

最初に見たのは青い空、に、橙色がかかりかけている空。

肌を感じるのはやけに硬い地面。

ゆっくりと起き上がり、そこから視えたのはいつも見る場所。

「学校の……屋上？」

千秋がスフィériaで過ごした時間は約二三時間。

今日は地球で五日目。

そのお昼頃だった。

「私はただ——ここで今までの私を捨てたかっただけ。だから——」（後書き）

前よりは速い！

はい、ギリギリ一ヶ月じゃないです。

まああまり関係ないですけどねw

さて。帰っちゃいました。無理矢理帰らされてしまいました。

いやー、この伏線も何もあったもんじゃないワルクラ。だからせめて大事なイベントだけは——！！ と、頑張って書いたつもりなんです…… 自分じゃよく分かりません。出来てるんですかねえ。

はてさて、次の話はどのくらいかかるのやら……。

「オレは千秋ちゃんに付いてくだけさ」

最初に聞こえたのはチャイムの音だった。

キンコンカンコンコン、となり響く人工の音が右耳と左耳から通過していき、今ここが自分の最も知っている世界だと実感させてくる。

ここは——真正正銘、スフィリアではない。

千秋の故郷、地球だった。

転移先が何故自分の学校のか、なんて事は問題ではない。そんなものは、時間的な問題もあるだろうし、どこの学校かに関してはシルディックで制服につけられた校章を検索すれば良いだけの話だ。

起きたな？ 千秋ちゃん

腰の辺りから聞き覚えのある声が聞こえる。

「ん……アークス？」

おう。ちなみに夢じゃないぞ、まあオレがいる時点でそんな考えには至らないだろうけどな

「まあね……」

千秋は力のない声で言うと、立ち上がって梯子を下りる。千秋が今いた場所は確かに屋上であったが、正確には屋上に通じるドアの上にある水タンクの上だった。タンクの下にある、梯子も下り、ドアを通って階段を下りていく。ちなみに、屋上のドアはオートロックで、昼休みの時だけ鍵が開くシステムらしい。今の学校はどこもこんな感じのようだ。

どこ行くんだ？

「保健室……」。擦り傷とかばっかりだったから向こうじゃ断ったけど、一応、ね」

まあ……いつの間にやら額から血でてるからなあ

保健室は当然（かは分らないが、多分基本的には）一階にある。ここは四階＋屋上なので、なんとなく疲労感のある今一番下まで下

りるのは面倒なことだった。が、あのままあそこにおいても仕様がな
いので、怪我もしているしとりあえず保健室に行く、という思考の
流れをたどった訳だ。

時間的に今は昼ご飯の時間。先程聞こえたチャイムはおそらく四
時間目が終わった、というやつだろう。

かといって廊下から誰かが出てくるような音はあまりない。弁当
やおにぎりなどを学校で買う人は少ないし、教室外や屋上、中庭な
どで食べようとする生徒も少ない。だからなのだろうが、三階、二
階に下りても生徒には誰にも会わないし誰もいない。

が、あくまで生徒には、だ。

「ん？ んなっ……！？」

と、丁度一階に降りて来たと同時、目の間に何の偶然か、教師は
二、三〇人ほどいる（一応私立）というのに、自分のクラスの担任
が目の前に現れた。

「み、美薙月いッ！ お前この五日間どこにいたんだ！？ ああ、
ああ……そんな傷だらけで……うわっ！ お前頭から血が……」

「す、すいません……ちよつといろいろあつて……」

（い、言えない……ちよつと異世界で事件に巻き込まれてましたな
んて言えないっ）

そんなこと言ってなど見れば、頭の心配をされて即刻病院にでも
連れて行かれるのがオチだ。

「まったく！ お兄さんが心配していたぞ？ ……まあ良い、事情
は後で聞く。とにかくちよつと来い。保健室で処置してもらおう」

「あ、はい……」

担任の先生は嘆息しながら保健室に向かって行った。千秋もそれ
に続く。

「はあ……成績優秀で性格も良いお前のことだ、何かしらの事情は
あったんだろうが、せめて家族が学校に連絡ぐらいはしなさい。ク
ラスのみんなだって心配していたんだから」

「はい……すいません……」

【つて言っても、世界間の通信なんて簡単に出来るもんじゃねーけどなー】

念話でアークスがそんな事を言った。

千秋は先生に付いていきながら、

【そうなの？】

【おうよ、まだ世界間通信の魔法技術は確立してねえ。出来たつて、短くて五分、長くて一〇分か一五分くらいのもんだろつよ。聞いた話じゃ、色々と研究はされてるみたいだけどなあー】

【まあ……古式魔法じゃ『感』と『空間』の属性しか通信系の魔法は使えないしね。新式魔法はかなり進んでるみたいだけど】

【新式は属性に縛られねえからな。つても、その新式ですら世界間の通信は五分、一〇分なんだが】

保健室に入り、最近赴任して来た保険医の先生、東 雲 梓しのめあかりに驚かれながら、処置を始める。ちなみに担任の先生は保健室から出て行き部屋の外で待っている。

「怪我、してるところはどこ？」

「えつと……」

【額は言わずもがな。左腕の二の腕辺り、肘付近と、右腕の手首より少し後ろ。あとは腰とか足の太腿やら何やらに擦り傷があるぜ？額以外は擦り傷しかないし、消毒とかで済むんじゃないか？】

「おでこのこれと、左腕のこことここの辺りと、右のここの辺。あと腰と足にも……」

「りょーかい。じゃあ、上、ブラウスまで脱いでくれる？」

「はい」

言われた通りにブレザーを脱ぎ、リボンをほどいて襟から抜き取ってブラウスを脱ぐ。梓が窓のカーテンをいつの間にやら閉めていたので特に気にせずに脱いだ。

「ん、擦り傷ばっかりだし、おでこ以外は消毒ね？ ちよつとしみるけど我慢ねー」

千秋の白い肌に消毒液が落とされる。治療や処置に魔法を使わな

いのは、この先生がその類の魔法が扱える属性を持っていないからだ。いや、確かに無理矢理でも屁理屈をつなげれば治療系、回復系の魔法は作れるのかもしれないが、基本的にその系統の魔法は『水』か『風』、もしくは『愛』が効果が高い。

つまり、わざわざそこまで効果のない（具現力の高さにはよるが）物を作るより、普通に処置して人間の回復力に頼った方が効率がいいのだ。

それにしても、とアークスが、

【男子が入って来たらどうするのかねえ】

などと言って来た。すると特に気にした風もない千秋は、

【外にいる先生が止めてくれるよ】

【なるほど。変態扱いされないついでにそんな役割があつたのか】

【なんか酷くない……？ ていうか、そんなこと言ったらアークスだつて……】

【人間的、動物的に言ったらオレは男なんだろうが、トライデント的に言ったらオレ達に性別なんてあつてないようなもんじゃねーか】

【そりゃそうなんだろうけど……】

アークスははっはっは、と笑いながら、

【ま、トライデントが男なのに私の裸を見てるー、なんて言ったら、トライデントなんて一生持てねーよ。ましてや契約型はな】

それはそうだ、と千秋も同意する。契約型に関しては自分がトライデントを選ぶのではなく、トライデントが自分を選んでくるのだ。性別など選び様もないし、性格などももちろん選べない。

まあ、性格は抜きにして、アークスのように主に対してタメ口を使うトライデントというのは、契約型にしても人工型にしても非常に、それはもう極限的に珍しい物ではあるのだろうか。そこは主の受けとり方次第、受け止め方次第、考え方次第なのだろう。

そう考えると、千秋とアークスの相性は結構良いものなのかもしれない。

そんなどうでも良い思考に至ること1・59秒。

「はい、とりあえずこんなものねー」

梓が処置を終える。擦り傷には消毒だけして、血が滲んでいる所には、絆創膏だと剥がすとき痛いでしょ？ などのたまわって、申し訳程度に包帯が巻いてある。非常に無駄な資源の使い方だ。

額に関しては、血を拭き取って消毒をし、大きめの絆創膏（剥がしても痛くない！ 絆創膏と箱に書いてあった。何故擦り傷の方にそれを使わなかったのかは不明）を張っておき、またもや包帯を巻く。これはちよつと激しく動いてもはがれないように、このことらしい。

「じゃ、上着てねー」

ところでこの先生、最近赴任したことは前述したが、千秋とは何故か親しい。それというのも、赴任して来た初日から千秋は部活の助っ人のための練習中に、ちよつとした怪我をしたからだ。その時から結構話をするようになったので、こうしてかなり軽い感じで喋ってくる。

千秋がブラウスのボタンをはめていると、

「それにしても千秋ちゃん？」

「ふえ？」

「またちよつとおつきくなつたんじゃない？ こ・こ？」

自分の胸元を指差しながら言う。が、

「……あーはい。そーですねー」

と、千秋らしからぬテンションと声色で棒読みと脱力な声で言った。

「ちよつ、最近私の冗談スルーし過ぎじゃない？」

「先生の冗談は基本セクハラまがいの物ばかりなので、相手にしたら疲れます」

「うわっ……相変わらず私に対しては冷たいわねえ……。五日ぶりに会ったんだからちよつとくらい相手してくれても良いじゃないのよー」

「嫌ですよ……そんなのに付き合ってたら、胸触って来たりお尻触

つて来たり……。そっちの趣味は私にはないので、先生の冗談にはなるべく反応しない、と先々週辺りに誓いました」

「私だってそっちの趣味はないっ……とは言い切れないわね。私どっちもいけるし？ そうねえ、女の子の、特に千秋ちゃんみたいな美少女の肌って気持ちいいのよねえー、それに甘く艶かしい喘ぎ声なんて……もう最高っ！！ 男はイケメン過ぎるのも考えものよねー、あーゆーのは女たらしが多いと私は見てるし。ていうかそれが共通認識？ いや、そういうのにも騙されるバカなのもいる訳だし……」

「何の話してるんですか……」

梓は千秋を無視して続ける。

「男の子もしくは男と付き合うならやっぱり童顔か女顔が良いわねっ！ 似たような物なのかもしれないけど、やっぱりカッコいいより可愛い方がいいじゃないの！ そして女の子な格好させてえ……ぶはっ、たまらん……！！」

「ちよつと……帰って来てくださーい……」

「あーっ！！ 理。きゅーん！ 私の愛しき。樹くーん！ 私が直枝に嫁ぐから、私のお嬢さん、いえ、お嫁さんになってちょうだいていうかなれよこんちくしょーっ！！ なんで……なんであの男の娘は……理。くんはゲームのなかにしかないのよー……ッッッッ！！ ハッ、そうか。私がゲームの中に入れば――」

「……………」

「ああん、ち・あ・き・ちゃーん！ そこで何か突っ込んでくれないと、私放置プレイで感じちゃう気持ちよくなっちゃぐほえッ！！」

「はいはい。もう良いです」

「ちよ、ちよつと千秋ちゃーん……？ 女性の顔を蹴るのはさすがにマナー違反じゃない？ ていうかお腹も同時に蹴られたんですけど……」

「先生の趣味嗜好及び性癖を一々暴露しなくても、私はもう知って

ます。赴任してからそればかり聞かされてますから。ついでに蹴ったことに関してはいい加減黙ってくれないとそろそろ先生の評判が今よりもヤバくなるかも、という私なりの善意ですから、お気になさらず」

（く、黒い……千秋ちゃん黒いぜ……）

アークスのそんな思いもどこ吹く風と、千秋はリボンを襟に通す。すると梓は呻きながら崩れると、おいおいと泣き出した。

「うう……私の心配をしてくれるなら私と恋人同士になってよお……

……そろそろ三十路でヤバいのよお……」

「だから私にそっちの趣味はないですつてば」

「だったら身体だけの関係でも良いからあ……」

「そっちの方が嫌ですよ……ていうか悪化してますから……」

「お願いよ千秋ちゃん……早く誰か付き合ってくれて結婚してくれないと、私……私……」

何だかちよつと可愛そうになって来た。ちよつとくらい優しい言葉をかけてあげようかなー、と思った千秋だったが――、

「私……千秋ちゃん強姦罪で捕まっちゃうー！」

「私に何しようとしてるんですかッ！！？」

「何って決まってるじゃない。ぴー……とか　ぴー……

とか　ぴiiiiiiiiiiiiiiii などなどいっぱいあるわよ？」

「ワルクラを一八禁にする気ですか！？」

「良いのよ。責任は全部作者に行くから」

「酷ッ……！」

千秋は思わず脱力した。……何でこんな先生と親しいんだろうか、などと思わずにはいられない。いや、今更か。

「まあ良いわ。その内千秋ちゃんを公式に襲えるようになってみせるから」

「公式にそんな事出来るようになるわけないでしょうがっ！」

「とにかく、せんせー、終わりましたよー」

と、梓が言うと、教室の外から担任の先生が出て来た。

「東雲先生……暴走するのは良いですが、叫ぶのはやめてください……」

「すいません先生私としたことが……てへっ」

「可愛く、てへっ、なんて言ったらって私は騙されませんよ東雲先生」

「ちえー、すいませーん」

梓の適当な返事を特に気にせず、担任の先生は千秋の方を向く。

「さて、事情を話してもらうぞ。美薙月」

事情、と言われても、ぶっちゃけ荒唐無稽と言われても仕様がな
い事情しかない。頭の心配をされるだけで終わってしまう。出来れ
ばそれは絶対に避けたい所だ。かといってどう説明すれば良いのか。

「……ちよつと整理させてください」

「分かった。話せるようになったら言ってくれ」

……さて。とりあえず時間は作った。あとはどう答えるかだ。

適当に誤魔化す……というのは少し難しい。千秋はそういう嘘を
考えるのも言うのも苦手だし、おそらく裏を取られて終わる可能性
が高い。ならば単純な話、頭の心配をされない所だけを説明すれば
いい。今回の場合だと、異世界がどうか山賊がどうか黒龍がど
うとか、そう言った物が主だろうか。

とりあえず世紀の歯車のメンバーが担当していた事件に巻き込ま
れ、なんだかんだで五日間行方不明になりました。みたいな感じで
いいだろう。確か蒼夜が異世界間の転移術式を聞いたと言っていた
ので、おそらく千秋が巻き込まれたという事は説明している可能性
が高い。裏を取るために本部に連絡されても、大丈夫なはずだ。

かといって、完璧確実、とは行かないだろうが。

【それで？】

【え？】

突然アークスからの念話が飛んでくる。

【そんな説明して、終了するかい？ 千秋ちゃんの成長物語は】

【！】

【そんな説明して、中途半端な成長で元の生活に戻るのかい？ 千

秋ちゃんは。それが千秋ちゃんの望んだ結

トゥルーエンド

末なのか？】

——違う。そんなはずはない。

中途半端で良いはずがない。こんな成長で良いはずがない。これではスフィーリアに行く前と同じだ。結局逃げているだけ。ただ蒼夜が帰らせてくれた、その恩を無駄に出来ない、なんて馬鹿げた言い訳をして、この日常に再びとけ込もうとしている自分に気付かないフリをしようとしているだけだ。

そうだ。これは望んだ結末じゃない。これは正しい選択によって導き出された真実の終わり方じゃない。

トゥルーエンド

【——違う。違うよ……そうじゃない。これは結末じゃない】

今回の終わり

【ならどうするんだい？　これが千秋ちゃんのスタート地点じゃないなら、どうすればたどり着ける？】

【戻る】

【どこに？】

【スフィーリア。蒼夜君の所へ】

【何をしに？】

【……決まってる】

そう。最初から分かりきっている。

【蒼夜君が勝手な理由で行動したように、私も勝手な理由で行動していく】

それが答えだった。

それが——スタート地点への道を開く鍵だった。

【——分かったよ、千秋ちゃん。君の選択に俺は従うぜ。『ライトニング・スピーダー』】

瞬間、フツ、と千秋の姿が担任の先生の前から、梓の前から消えた。

「なっ！！　み、美薙月！？」

「先生！！」

入り口の方を向くと、そこに千秋はいた。
もの凄いい笑顔で。何かを決心したように。

「私——もう五日間行方不明になりますっ！！　じゃあー！」

担任の先生は全く言われた事が理解出来ずに、ただ千秋がこの場から走り去っていくのを呆然と見ていた。

「……は？　ちょ、ちよつと待て美薙月！　オイ！！」

廊下に出る。が、千秋の姿はもうなかった。どこにも。

向かうはあの廃工場。

そして——スフィériaへと、千秋は走る。

* * *

黒龍の討伐。それがラインズの決定だった。

どうも、たった二人で自分たちを苦しめていた山賊達を倒した蒼夜達に勇気づけられたらしい。蒼夜的には特に凄い事をしたような気はしないが、町人達が喜び戦う意志を再び持ったのなら、特に何も言いはしない。

今問題なのは、蒼夜の水竜の右翼が黒龍に通用するかどうかだ。

蒼夜が聞いた話によると、龍種というのは対魔力能力が高いらしい。これが言われているのは基本的に自然龍種と呼ばれている龍種達で、簡単に言えば火龍や水龍と言った自然属性を司っている龍達の事なのだが、まだ他の龍に関してはあまり分かっていない。

いや、そもそも自然龍種ですら昔の人々から言われて来た事であるため、確証がある訳ではないのだ。当然、それ以外の龍の事などあまり分かる訳もなかった。

……ため息をつかざるを得なかった。

（なんだって俺……龍なんて相手にしようとしてるんだろ……）

森を町人達と歩きながらそんな事を思った。

デビルも、中型まで（千秋を襲っていたのまでが中型）が今の蒼夜には、というか大型に一人で突っ込んでいけるのは地球だけで探しても数えるほどしかないだろう。基本的に大型デビルと戦う時は複数人で戦うのが常なのだ。

だというのに蒼夜は今、一人で戦おうとしている。デビルで言うなら大型デビルと。町人達も手伝ってくれるとは言え、手に持っているのはトライデントでもなんでもないただの銃器。一応アサルトライフルやらRPGやらを持っているようだが、精々使っても牽制や威嚇程度の物だろう。当たっても黒龍には痛くも痒くもないはずだ。

つまり――倒せる可能性があるのは蒼夜だけ。

（だー！ ツー！ くそつ、俺はまだ中三だつーの！ 本当何考えてんだろうなあ！）

一瞬、頭をとある少女の顔がよぎった。

彼が勝手な理由で故郷に送り返した、あの少女。

どんな成長速度を持っているのか疑うほどに、強くなったあの少女。

――バカみたいに笑顔を振りまくあの少女。

（……つたく……千秋につられて俺もちよつと変わったか？）

昔なら。昔の、いや、以前のこと言すべきか。そのとき、蒼夜ならばあんなに勝手な事をする事はなかった。いつもなら相手の考えを無視してまでの行動を起こす事はなかったはずだ。そもそも初対面で、これから再会するかどうかすら怪しい人と必要以上に会話するような事もなかった。

まったく、いつからどこで何が変わったのやら、と、蒼夜は周りに聞こえないほど小声で呟いた。口の端をつり上げながら。

「いたぞーッ！！」

そんな声がどこからか聞こえて来た。それと同時に上を見る。
そびえ立つ崖に立つ黒き龍がそこにはいた。

* * *

千秋は全速力で山を登っていた。

目指すはあの山奥にある廃工場。そしてスフィリア。

「アークス！ 向こうの事件が終わるまでは狭間は出てるんだつたよね！？」

おうよ。さっき説明した通り、狭間は一種のSOS信号みたいなもんだからな。向こうがまだ解決して向こうに行った奴が戻らない限りは大丈夫だ！

ご都合主義と言うか何と言うか……と千秋は軽く呆れていた。いや、まあ今回はそのご都合主義に感謝しなければならないのだが。

で、千秋ちゃん。向こうに行ったらまずどうすんだい？ 黒龍の所に一直線？

「ん……そうだねえ……」

千秋が考えるに、あの黒龍に勝つのはかなり難しい。真正面から立ち向かって勝つのなら、魔導戦士があと二、三人は欲しい所だ。かといって増援が来る気配は全くなかったし、来るならもっと早く来ているはず。だとすると増援は期待出来ないかもしれない。

ならばどうすれば勝てるのか。

（黒龍はもの凄く硬い。蒼夜君のウォーター・ブレイドがどれくらいの切れ味を持つてるのかは分からないけど、多分かなり良いはず。それをほんの少し切れ込みを入れさせるだけで止めるくらいには硬いんだ。だとすれば体内に……って、何凄い事考えちゃってるんだ私！？）

いくらなんでもダメでしょ！？ と、頭を振る。

アークスは少しばかり呆れてながらそれを見ていたが、「まあ千秋ちゃんだしな」と諦めた。自分が選んだだけあって多少なりとも彼女を理解はしているらしい。

さて、体内に向けての攻撃は彼女の性格上無理な事は分かった。だとするならばどうするべきか。

いや、そもそもだ。黒龍を絶対に倒さなくてはいけないという訳ではないはずだ。憶測の域をまだ出ないが、生物なのだからそれなりの思考能力はあるはず。もしかしたら龍なんて大層な物なのだから、人間と同程度の知恵や知識も持っているかもしれない。

どちらにしてもだ。黒龍^{あれ}の目的はなんなのか、それさえ分かればダメな物でない限りそれを達成させれば良い。そうすれば元の住処、白銀の遺跡に戻ってもらう事は出来るかもしれない。

「目的……目的……」

走りながら考えるも……全く分からない。そもそも龍の考える事など分かる訳もない。

（——いや、違うな）

もしや”龍”の視点で考えているからダメなのではないだろうか。もしも、もしもだ。黒龍が前述したように人間と同程度の知恵や知識を持っていたらどうか。ならば、”人間”の視点で考えてみれば、何か分かるかもしれない。

——黒龍の目的はラインズを、人を襲う事？

（いや違う。それなら最初からラインズを襲ってたはず……）

——黒龍の目的は千秋や蒼夜？

（多分違う。だったら隠れ家から出て来た時に本気で殺しにかかって来てたと思うし……）

——なら他に考えられるとすれば？

「……何か……探してる？」

何か探してるって、飯でも探してたってーのか？ 龍属はそこらにある自然力食って生活してるんだぜ？ それにそこまで好きじゃない明るい場所にまで出て来て、いらん食料探すかね

「ご飯はない、か……じゃあ……」

わざわざ明るい場所にまで出てくるほどの目的。物探しの路線で行くとするならば――、

「ねえアークス。――つてありえる？」

ああん？ そうだなあ……まあ確かにあるっちゃあるぜ。黒龍は上位つちや上位だけど、一応普通の龍属だからな

「それって、普通じゃないのもあるってこと？」

まあそう言う訳だけど――つと、そろそろみたいだぜ？

木々の隙間から光が漏れ出した。その光の先に見える廃工場。全ての始まりの場所。

千秋は廃工場の前に立つと、家の鍵を持っていたネコを追いかけた時と同じように、大体二メートルくらいの柵をよじ上って中に入る。単調な音を響かせて着地すると、辺りを見回し始めた。

「確か……」

小走りに目的の場所に向かう。

「あつた！」

入り口から左に少し進んだ所に、半径一メートルくらいの渦のような物があった。紫や赤、青などが混じった空間を捻る渦、狭間。アークスの言った通り、まだ存在していた。

千秋は躊躇いなど一瞬も見せずにその中に飛び込む。と、いうよりは触れた瞬間に引つ張られるみたいに吸い込まれた。

千秋は再び、非日常に^{戦場}戻る。

「オレは千秋ちゃんに付いてくださいさ」（後書き）

私的に、最近のワルクラはグダグダしているような気がしてならない今日この頃。

どうも、結城葵でーす！　そこまで長くないような気がする文章に一ヶ月もかけて来ましたー！

ぶっちゃけ頑張れば一週間くらいで書ける！　と、ふざけた事を思わないでもないですが、まあそこまで集中力が続けば苦労はない訳で……。

一応、毎日執筆時間を作ろうと頑張って入るんですけどね……。

えー、基本千秋中心ですが、今回は特に千秋中心だったと思います。だって蒼夜ほとんど出てないし。

あと思いつきの梓先生登場。彼女はきつとまだまだ出番があります。まあ多分この序章のスフィリア編にはもうない可能性が高いですが。

ていうか最後の戻るまでの所……あまりうまく書けた気がしないですけど大丈夫ですかねえ？　全然自信がないんですけど。

何かアドバイスとか感想あったらお願いします！　出来ればアドバイスが欲しいです。なかなか自分じゃ気付けないような弱点と言うか、悪い所とかもあると思うのでどうかよろしくお願いします！

それではまた次回、お会いしましょう。

「カッコつけたらつけ通す!!」

ズダダダダダダダダダダッ!! と、轟く銃声が聞こえ
ると共に、黒龍の黒い身体に火花が散る。確実に傷すらもつけられ
ていないだろうそれは、ただ単にこちらに出来るだけ気を引くため
の物だ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおッ
ッ!!」

黒龍の真上から急降下し、勢いを殺さずに水竜の右翼を叩き付け
る。
ドラグーン・ライト

ドッッシャアアアアアアア!! と轟音が響く。

水竜の右翼は黒龍の左肩を抉った。が、それ止まりだ。傷は浅い
し、少し呻いただけで怯みもしない。

やはり持っていたらしい対魔力能力が水竜の右翼に対抗し、その
拮抗に蒼夜の方が耐えられなかったのだ。見た所かなり高い、とい
うほどの物でもないようだが、今の蒼夜がこれに対するならばE A
Sで出来る分だけ具現力を強化しなければならぬだろう。それで
も勝てるかどうかはやってみなければ分からないが。

まだまだ余裕らしい黒龍が抉られた方の腕を蒼夜に向けて振るう。
腕自体は避けられたが、それによって生み出された風圧に煽られ
て吹き飛ばされバランスが崩れる。

「チッ……!!」

何とか体勢を立て直しながら、射撃魔法『アクア・ブラスター』
で牽制する。当然、ただ当たっただけでダメージなど全くないだろ
うが、あくまで牽制。特に気にしない。

それに、蒼夜でさえも今は困でしかないのだ。倒せばそれで良
いが、わざわざ無理に倒しに行く事はない。一五分。それだけ持ち
こたえる事が出来れば良いのだ。

蒼夜様、あと一〇分です

「やっと三分の一かよ……！ 無駄に長い、一〇分、だっ！！」

上昇し降下し旋回し突っ込み退がる。あつちに飛んだりこつちに飛んだり下りたり上がったりをして黒龍の攻撃を避ける。風圧が煽ってくるが、一撃がこちらの戦闘不能へと繋がっているだろう事を考えると絶対に当たってはやれない。牽制し隙があれば攻撃しつつ、確実に黒龍の攻撃は避けていく。

蒼夜はEASを二本抜き取りつつ、黒龍が開けた巨大な口の中にアクア・ブラスターを撃ち込む。中はどうも対魔力能力が弱いのか、直撃すると同時に轟音としか言いようのない悲鳴を上げ、少し怯む。その隙にEASをシルディックに差し込みロードさせ、水竜の右翼をさらに具現化させる。すると、翼が身の丈の二倍以上の大きさになった。だが、これはあくまで現実空間に具現化出来る魔法の効力が何倍かになったただけだ。対魔力に勝つ確実性を求めるならば更に一工夫をしなければならない。

飛びながら蒼夜は巨大化した水竜の右翼を身の丈ほどの大きさまで、魔力を圧縮して縮めた。更に、基本的に相手へぶつける翼の下半分の方へ魔力を多めにし、上半分は飛べる最低限の魔力だけを残した。下に魔力をやった事で少し下に大きくなったが、そこは再び魔力を圧縮して元の大きさに戻す。

巨大な尻尾が蒼夜に向けて振るわれた。当然蒼夜は上昇して避ける。が、それを狙うように黒龍はその巨体からは考えられない速度で、尻尾のためにひねった身体を蒼夜の方に戻しながら殴り掛かって来た。

蒼夜は翼の下で斜めに受けつつ後方に流した。その過程で前に押し出された身体のを速度を緩めず、さらに速度を上げながら顔面に一気に近づく。

「はああああああああああッッ！！」

ブワァ！ と黒龍が翼を使って後ろに下がって起きた風圧が蒼夜を襲う。直感的な物か、黒龍は当たったら危険だと判断したようだ。だがそんなものを蒼夜は気にしない。向こうが下がるのが少し遅

かった。水竜の右翼は既に振り下ろしている。

翼の先端付近が黒龍の右目を削り取った。

黒龍が下がったせいで直撃こそしなかったが、確実に消滅させた。対魔力能力を無視出来た。

（行ける——！！）

黒龍が悲鳴を上げる中、消された右目から鮮血が吹き出す。痛さからか、よろけて後退する黒龍に追い討ちをかけるように水竜の右翼を振るう。狙うは頭。正確には額の部分にある黒い黒曜石のような石。龍の核石だ。

生体になった龍属を倒すにはただ腕や足を落したり頭や腹を吹き飛ばすだけではダメだ。子供を倒すならそれで十分だが、今目の前にいるようなのを倒すには核石を破壊するしかない。

龍属の生命力は凄まじい。

たとえ腕を落としてもすぐ様再生するほどだ。今さっき決った右目も再生が既に始まり、血はもう止まっている。目はさすがにすぐには治らないようだが、一日、いや半日と数時間もあれば完全に治るだろう。人間では考えられない事も龍属は可能にしてくる。

だが、核石を壊されればそうはいかない。

核石を壊された龍属は再生も出来ぬまま即死し、塵となって消える。龍属にとつてただ一つの急所だ。

……まあ、それでも何十年何百年と経てば、その核石は自然力によつて再構成され復活するのだが。

話を戻そう。

振り下ろした水竜の右翼は黒龍が暴れたせいで核石には当たらずに左目の下辺りを決るだけで留まった。が、痛い物はやはり痛いらしく、悲鳴を上げる。目の前にいる蒼夜は、その被害をもろに受けている。今にも鼓膜が破れるんじゃないかと思うほどだ。

そんな考えも、黒龍の行動で吹き飛ぶ。唐突に飛び上がり始めた

のだ。

黒龍はその巨大な翼をはばたかせて空へと舞い上がる。

「クソっ、逃げる気か!？」

いえ。どちうちうちうちです。

と、蒼夜はシルディックに視線を移す。

黒龍体内からの魔力反応急激増大。前面及び黒龍を包むように展開していきます。どうも――

じれったくなるような一瞬をシルディックは開け……告げた。

——バカでかい一撃を撃ってくるようです。

「ッ！！？」

思わず黒龍の方へ視線を戻す。

薄く見える”水色の流れ”が黒龍の顔の前を流れ、更にオーラのようにその巨体を包んでいる。顔の前を流れる”水色の流れ”は急激に濃くなっていき、集束していく。ついにはその集束した”水色の流れ”の前面に、黒龍の身体半分くらいの大きさはある魔法陣が出現する。

—聞いた事がある。

黒龍を含む龍属というのは、核石を通じてその身に宿す強大な魔力を現実空間に干渉可能な物へと変化させる事が出来る——と。

もし。もしもその話が本当だとしたら。

もし。もしも今見えるあの”水色の流れ“が黒龍の膨大な魔力だとしたら……。

「に逃げろ……」

焦りで口がまわらない。届く事も怪しい。だが叫ばずにはいられなかった。思うように動かない口を無理矢理に動かし、叫んだ。

[illegible]

るほど蒼夜は弱くない。それに蒼夜は周りよりもかなり多い魔力を持っている。が、山賊戦や一度目のこく竜泉などの連戦に告ぐ連戦で魔力は結構消費していた。一度町長邸で休んだ時には少しだけ回復したが、『少し』止まりだった。

その上でかなり全力の水ドラグーン・ライト竜の右翼を使っだし、更に防御の為に即席の障壁も使った。使用可能魔力が底をつきかけるのも無理はない。

そんな中、無情にも黒龍は次の一撃を放とうとしていた。

「ちっ……くしょう……んな所で死ねるか……ッ！ シルディック！ さつさと水竜の右翼を再構成しろ！！」

本来の効果は――

「出来ねえのは分かってるからさつさとやれ！！」

了解。術式急速構築

蒼夜の背中に再び水竜の右翼が構築されていく。

黒龍の口元には魔法陣が出現する。さっきのに比べてかなり小さな。おそらく今度は広範囲ではなくピンポイントに狙うタイプなのだろう。

パシン、と音がすると共に水竜の右翼が完成する。

瞬間、魔法陣を黒龍の魔力球が通過した。

ズドオオオオオン！！ という爆音と共に青白く細長い閃光が蒼夜に目掛けて飛ぶ。

（間に合うか……ッ！！？）

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

同じように蒼く輝く翼を全力ではばたかせる。翼の周りを切った空気が吹き荒れ、大きく砂埃を立てたが三度。

地面に背中を引きずりながら後ろへと下がる。石やら枝がぶつかって痛いのを無視し、ただ自分に迫る光を見ながら。

少し背中が浮いた瞬間、着弾した。――靴をかすめて。

空へと飛び上がりながら蒼夜は思わず安堵の息を吐いた。直後に崖へと衝突したが。

「うごっ！？ くそっ……締まらねえなあ……」

言って蒼夜は同じフィールドにいる黒龍を見る。

満身創痍。疲労困憊。魔力切れ寸前の上、黒龍の硬い鱗を通り抜けさせれるほどの攻撃手段も正直無いに等しい。が、それでも蒼夜はシルディックを握る手に力を入れる。

正直もう黒龍に勝てるとか勝てないとかどうでもよかった。蒼夜の身体を動かしているのはそんな勝利願望などではない。

ただ単純に、カッコつけたなら最後までカッコつけたい。それだけだ。

——実は負けず嫌いな蒼夜が逃げずに黒龍と戦っているのはそんなくだらない理由。

「さあ行くぞ。敗率九九パーセントの第二ラウンドだ」

* * *

廃墟群。最初に視界に入ってきて来た浮かんだ単語はこれだった。

人の気配の全くしない建物が並ぶ町。その建物達はツタが上つていたり草だらけだったり天井がなかったりと、様々な物がある。が、元の形自体は全て同じような物らしく、四角い形のした単純な物ばかり。少なくとも千秋の視界に入った建物に四角い物意外はない（崩れている物以外だが）。

周りは崖で覆われ、崖の上には森が広がっている。

周りを見渡すと、丁度後ろ。少し離れた所に、見覚えのある一際大きな建物があった。四角形を重ねたような建物で、柱や門、入り口付近に天使みたいな形をした人形の彫刻の彫られた建物。言うなれば神殿と言った物だろうか。

それを見た瞬間に、いろいろあって記憶の奥に沈んでいたものが浮かび上がって来た。

白銀の遺跡。

黒龍が棲んでいるとされていた、第二遺跡地帯ポイントB三エリ

ア全てを占める巨大な遺跡だ。

「前こつちに来た時と出る場所が違う……？」

出る場所は基本的にランダムだよ、千秋ちゃん

へえ、と呟きながら千秋は神殿へと向かう。

「もし……もしも私の考えが正しいなら、あれに黒龍を止めるための答えがあるはず……」

特別自信がある訳ではない。正直、直感による所が多い。が、それでも千秋はこれを答えとして選んだ。

だから向かうのだ。神殿に。神殿の奥、黒龍がいたであろう広間に。

千秋は神殿内部に入ると、何の躊躇いもなく真つすぐに進む。数分歩き曲がり角も通り過ぎ、更に進んでいくと外の光が千秋の目に飛び込んでくる。

入り口付近には池があり、部屋の中心には大きな瓦礫が積み重なっていてその天井には大きな穴があいている。前に来た時と何の違いもない。千秋はその部屋の中心、瓦礫が積み重なった所まで歩いていき、部屋全体を見渡す。

「アークス。分かる？」

んー、ちよつと待ってくれ……部屋、にはねーな。ただ立体的に見た場合だとこの部屋の少し下の方になんかの反応がある。これじゃねーか？

「どう行けば良いの？」

ふむ……瓦礫の下だな。この瓦礫をふつとばしゃ良い

「なるほど……分かった。じゃあこうして、つと」

むむむ……、と唸りながらボールを持つようにしながら、両手に力を入れて魔力を外に流す。空気制御の力によって千秋の制御下に置かれたエメラルドグリーンの風が、千秋の両手に集まり圧縮されていく。

しばらくそうして、これくらいかな？ いやこれくらい？ と試行錯誤すること二、三分。

だからだ。つまり時間稼ぎ。あれから結構時間が経ってあと二、三分。それだけ耐えれば良いのだ。故に無理して通らない攻撃をする必要もない。さっきの攻撃でその必要もなくなったのでは、と思うかもしれないが、ちょうど飛び上がって黒龍の攻撃を避けたときに耳につけたインコムから町人の声が聞こえて来たのだ。作戦は続行中、時間にも間に合う、と。

というわけで未だに囷をやっているのだが……だからといってただただ避けていれば良いという訳ではない。確実に黒龍の気を引いておくためには結構いろいろとやっていなければならないのだ。基本的に近くで。

例えば、黒龍の近くで飛び回り、たまにだが確実に通らないことが分かりきっている攻撃をしたり、眼球はまだ再生していない右目の方へ行って完全な死角に行く事で振り向かせてみたり。正直心臓に悪い事しかやっていないが、その分黒龍の気は引けているからここでやめる訳にも行かない。

蒼夜様下から。次は右、更に左、おっと今度は右斜め上からです「でかい囷体してるくせに動きはなんでこんなに速いんだよ!？」単純に魔力で強化してるのではないのでしょうか。意外と器用なようですからおっとまさかの後ろから

「うおおおう!!!? 危ねえっ!!!」

ハエみたいに飛び回るからいい加減蒼夜様の事が鬱陶しいんじゃないですか更に前方と真上から攻撃が来てます

「普通に指示しろよ! 冗談まで混ぜる必要ねえから、よお!!!」

上へ下へ右へ左へ斜め下へ上へ後ろへバク転トルネードなどなどしながら次々に避ける。正直黒龍が攻撃するたびに生まれる風圧が半端じゃないのだが、全く持って構ってられない。

と、インコムに通信が入る。セシアからだ。

『準備は完了。蒼夜さん、黒龍を今の一からなるべくずらさないでください』

「りよう……かいっ! うおっと!」

ドドドドド——ッ！——と、爆発音が連続で黒龍の背中から響いた。

そして——何かの高速回転音と共に黒龍の腹から巨大なドリルが出て来た。

はずだった。

ズッドオオオオオオ——と、突然ドリルが爆発したのだ。黒龍を貫通する前に。

「なっ！——？」

青い光が黒龍の背中に集まっていき、穴があいた背中を修復していく。

爆発の瞬間魔力が放出されるのを感知しました。おそらく魔力で押しつぶしたのではないかと

「んなデタラメな事出来んのか龍属つてのは！？」

まあ目の前でやっている訳ですし

「くそっ……どうする……ッ！——？」

魔力はこれ以上使えない、攻撃は通じない、ドリルはもうない、町人も蒼夜も満身創痍、疲労困憊。

戦いを続けるだけ無駄、という結論しか出てこない。が、今更逃げられるだろうか。逃げるのをこの黒龍は許すだろうか。

何かが空気を切る音がした。

それに蒼夜は動揺からか反応出来なかった。

「しまっ……！——」

ゴッ！——と、黒龍の巨大な腕が蒼夜を捕らえた。身体から力が抜ける。

水竜の右翼はまだ維持されているが空に居続ける気力も体力もない。

——終わった、そう感じた蒼夜を何かが優しく捕らえた。

「う……あ……？」

それは人ではなく、エメラルドグリーンに輝く涼しい何か。そのまま身を委ねてしまいたくなるほどにそこは心地良い。

それを見た瞬間、意識がハッキリしていくのを感じた。

「ま……さか……」

……どうも、そうみたいです。ほら、あそこ

「蒼夜君ッ！！」

聞き覚えのある声が崖の上から聞こえた。

見覚えのある姿が崖の上に立っていた。

自分が地球に帰したはずの少女がそこには立っていた。

みなつきちあき

美薙月 千秋が。

「カッコつけたらつけ通す!!」(後書き)

……最近、効果音を使い過ぎな気がする今日この頃です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1240p/>

ワールド・クライシス！

2011年8月27日03時22分発行